

図版番号	図NO	整理番号	遺構区分	遺物番号	小ナリツク名	スケール	出土層位	器種	材質	長さmm	幅mm	高さmm	重量g	遺存度	欠損部位	備考
図版227	129	60042	SK110	6		1/4	Pa		安山岩	112	93	69	668.13	100		
図版227	130	60069	SK129	3		1/4	Pa		安山岩	100	96	28	332	100		
図版176	131	43975	SH-01	43975	I FN15	1/4	II	GS	Sa	76	72	14	120.71	100		
図版176	132	43960	SH-01	43960	I FN15	1/4	II	GS	Sa	92	74	38	338.71	100		
図版176	133	43959	SH-01	43959	I FN15	1/4	II	Pa	Sa	25	25	16	16	100		
図版176	134	43934	SH-01	43934	I FM16	1/4	II	Pa	安山岩	163	96	46	613.36	100		
図版176	135	43907	SH-01	43907	I FN17	1/8	II	Pa	安山岩	108	64	35.5	296.5	100		
図版176	136	43825	SH-01	43825	I FN18	1/8	II	Pa	安山岩	98	64	34	189.01	100		磨石を兼ねる
図版177	137	31913	SH-03	31913	I LE05	1/8	II	Pa	安山岩	83	66	46	265.21	100		
図版177	138	31923	SH-03	31923	I LE05	1/8	II	Pa	安山岩	94	72	47	356.09	100		
図版177	139	31936	SH-03	31936	I LE05	1/8	II	Pa	安山岩	86	76	37.5	337.3	100		磨石を兼ねる
図版177	140	31914	SH-03	31914	I LE05	1/8	II	Pa	安山岩	92	78	43	332.63	100		
図版177	141	51447	SH-09	51447	I FE03	1/8	III	Pa	安山岩	100	94	43.5	495.82	100		磨石を兼ねる
図版178	142	45338	SH-08	45338	I K110	1/8	II	Pa	安山岩	104	73	53	546.73	100		
図版178	143	46364	SH-08	46364	I K111	1/8	II	Pa	安山岩	116	62	39	284.5	100		
図版178	144	51395	SH-08	51395	I FJ05	1/8	II	Pa	安山岩	183	69	39.5	254.93	100		
図版178	145	51334	SH-08	51334	I FJ05	1/8	II	Pa	安山岩	96	81	38	430.16	79	長さ	

第49表 日向林A遺跡 縄文時代石器属性表 (4)

第3節 土坑の化学分析

日向林A遺跡の土坑のリン酸分析

パレオ・ラボ

(1) 概要

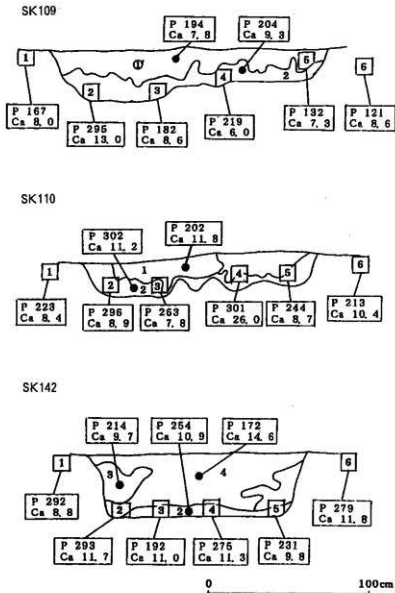
リンは、生物の必須元素であることから、生物体内には周囲の土壌より高濃度のリンが集積している。したがって、生活面には動物の遺骸、排泄物、食物残渣、燃料などの生業活動に由来するリンが蓄積し、周囲の影響を受けない土壌より多く存在する。さらに、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと結合し、水に難溶性のリン酸化合物となるため拡散がすくなく保存性がよい（還元性土壌や水成堆積物を除く）ことから、その供給された層準で残る。こうしたことから、リン分析は墓坑、生活面の検出、累積土壌の埋没腐植層の判定などに利用でき（竹迫、1993）、用途の不明な土坑などでしばしば分析が行われてきた（竹迫（1981）；坂上（1983、1984）など）。しかし、基本的にはバックグラウンドとの比較、リン酸の由来、土壌の性質などを総合的に判定する必要があり、こうしたことから推定の部分も少なくない。一方、骨の主成分であるカルシウムは溶解性が高いため土壌中で移動ないし拡散することから、カルシウムを用いた解析は難しいとされている（坂上、1984）。しかし、カルシウムがリンとともに相対的に高い濃度を示す場合は骨の存在を積極的に示すと考えられる。こうしたことから、ここでは他の遺跡と同様に全リン酸と平行して全カルシウムも測定した。

(2) 分析方法

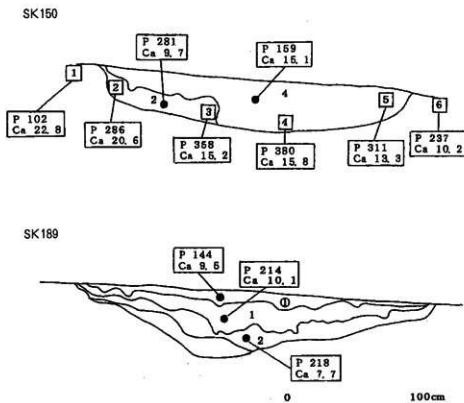
試料は、SK109、SK110、SH142、SK150、SK189の5つの土坑（図37、38）から採取された。各土坑の時期は不明である。SK109土坑は長さ170cm、深さ30cm程度で、埋積層は下部の黄褐色土と上部のふい赤褐色土からなる。SK110土坑は長さ145cm、深さ20cmで底部は波状を示す。堆積層は2層

に区分され、下部は黄褐色土、上部はにぶい褐色土からなる。SK142土坑は長さ135cm、深さ38cmで低部は平坦である。土坑内は最下部に薄く暗褐色土が層状に堆積し、その上位は不定形に褐色土ないしにぶい褐色土により埋積される。SK150土坑は長さ230cm、深さ36cmでいくぶん傾斜する。堆積層は主として赤褐色ないし褐色土により埋積され、一部下部にブロック状に明褐色土が堆積する。SK189土坑は長さ270cm、深さ50cmの凹状の形態を示す。土坑内は層状に堆積し、下層は明黄褐色土、中上部は暗褐色土からなる。

分析方法は、試料2.0gを採取し硝酸で加熱分解後、過塩素酸を加え再度加熱分解する。この分解液の一定量を採取し、バナドモリブデン酸発色液を加え比色分析により全リン酸を定量する。また、リン酸分析と同様の操作をした分解液を一定量採取し、原子吸光光度計で全カルシウムを測定する。



第38図 日向林A遺跡 SK109・110・142の全リン酸・全カルシウム含有量(mg/100g)



第39図 日向林A遺跡 SK150・189の全リン酸・全カルシウム含有量(mg/100g)

(3) 測定結果と若干の考察

1. SK109土坑

土坑内は132～295mg/100gと全般にバックグラウンド(121ないし167mg/100g)よりリン酸値が高いことから、何等かの物質によりリン酸が富化されたと考えられる。特に低部のいくぶん漏込まれた部分では295mg/100gと最高値を示す。また、全カルシウムは概ね同様な値を示すが、こうした中ではリン酸値の高かったNa 2で13mg/100gと相対的に高い。こうしたことから、Na 2付近には遺骨に由来してリン酸が富化された可能性を示唆させる。

2. SK110土坑

土坑内は2層に区分されるが、下部層はバックグラウンドより高い含量を示す。すなわち、リン酸含量は周囲の土壌は213ないし223mg/100gであるが、下部層は244～302mg/100g、上部層は202mg/100gである。こうしたことから、土坑内にリン酸が富化されたことは明らかである。また、全カルシウム含量はNa 4を除いては周辺土壌と概ね同様な値を示すが、Na 4では26mg/100gと高くなる。Na 4は全リン酸含量も301mg/100gと高いことから、遺骨によりリン酸が富化された可能性を示唆させる。

3. SK142土坑

全リン酸含量は、土坑内では192～293mg/100gの値を示すが、周辺土壌が279ないし292mg/100gと高いことから、多くはバックグラウンドより低い値を示す。また、全カルシウム含量にも有意な差は認められない。こうしたことから、土坑内にリン酸を富化する物質が入れられた痕跡は認められない。

4. SK150土坑

バックグラウンドが102と237mg/100gとかなり異なることから普遍的な値は特定しにくい。しかし、土坑の低部では281～380mg/100gとバックグラウンドより高い値を示し、土坑内に何等かの物質でリン

酸が富化されたことを示す。また、全カルシウム含量は遺構のレベルの高い側でいくぶん含量が多いようであるが顕緒ではない。このように全リン酸含量は土坑の中央部で高い値を示し、No.1が周辺の標準値とみなせばかなりのリン酸が富化されていることになる。こうした多くのリン酸の供給は遺骨の可能性を示唆させる。

5. SK189土坑

全リン酸値は下部で218mg/100g、中部214、上部144と上位ほど含量が低下している。一方、全カルシウムは全般に少なく、相対的に中部でいくぶん高い。ここではバックグラウンドの測定を行っていないことから直接比較できないが、他の4つの土坑と近接することからそれらを比較試料とした。その結果、全リン酸の含量が低いことから、少なくとも遺骨などが入れられていた可能性はほぼないといえる。また、上位に向け含量が低下していることから、土坑内に何等かによりリン酸が富化された可能性はあるが、その由来物質を特定するには至らない。

遺 構	整理番号	取り上げNo	堆 積 物	全 リ ン 酸	全カルシウム
SK109	449	1	褐色土	167	8.0
	450	2	"	296	13.0
	451	3	"	182	8.6
	452	4	黄褐色土	219	6.0
	453	5	にぶい黄褐色土	132	7.3
	454	6	明黄褐色土	121	8.6
	455	①	にぶい赤褐色土	194	7.8
	456	②	黄褐色土	204	9.3
SK110	463	1	黄褐色土	223	8.4
	464	2	にぶい黄褐色土	296	8.9
	465	3	"	263	7.8
	466	4	黄褐色土	301	26.0
	467	5	にぶい黄褐色土	244	8.7
	468	6	"	213	10.4
	469	①	にぶい褐色土	202	11.8
	470	②	黄褐色土	302	11.2
SK142	477	1	黄褐色土	292	8.8
	478	2	褐色土	293	11.7
	479	3	暗褐色土	192	11.0
	480	4	"	275	11.3
	481	5	褐色土	231	9.8
	482	6	黄褐色土	279	11.8
	483	②	暗褐色土	254	10.9
	484	③	褐色土	214	9.7
485	④	にぶい褐色土	172	14.6	
SK150	507	1	にぶい黄褐色土	102	22.8
	508	2	明褐色土	286	20.6
	509	3	褐色土	358	15.2
	510	4	"	380	15.8
	511	5	"	311	13.3
	512	6	にぶい黄褐色土	237	10.2
	513	②	明褐色土	281	9.7
	514	④	赤褐色土	159	15.1
SK189	526	① 上層	暗褐色土	144	9.5
	527	1 中層	"	214	10.1
	528	2 下層	明黄褐色土	218	7.7

注記) 測定単位は mg/100g 乾土

第50表 日向林A遺跡 全リン酸・全カルシウムの分析結果

引用文献

- 板上寛一(1983) 小山田No.23遺跡・土坑に関する若干の土壌学的考察。小山田遺跡調査 会編「小山田遺跡群Ⅱ」: 221—228
- 板上寛一(1984) 小山田No.15遺跡・縄文土坑と現代字穴における全リン酸分布の比較。小山田遺跡調査会編「小山田遺跡群Ⅳ」: 1—8
- 竹迫 紘(1981) 11号住居址内埋藏中の土壌リン酸分析。横浜市道高速2号線埋藏文化財発掘 調査団編「横浜市道高速2号線埋藏文化財発掘調査報告書1980年度」: 156—158
- 竹迫 紘(1993) リン分析法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2 研究対象別分析法」: 38—45

第4節 まとめ

- 1 本遺跡は旧石器時代のはかに縄文時代の草創期の石器が検出され、草創期終末から前期前半までの土器群が検出された。
- 2 縄文時代の3基の遺物集中部は縄文前期後半期の土器群であった。
- 3 縄文時代の集石は7基あり、SH07は表裏縄文期の集石と思われる。また本遺跡のAタイプの凹石と第2類の石皿が集石内でセットとして出土した。
- 4 土坑は116基確認された。そのうち第3類(土坑分類第11類)のSK109・SK110の上坑からリン酸が確認され、土坑墓の可能性があることが判明した。また、第4類(土坑分類第15類)の土坑からもリン酸が確認され土坑墓の可能性があることが確認された。しかし、陥穴状の土坑は検出されなかった。
- 5 本遺跡は8,000点以上の表裏縄文が出土した。表裏縄文系の土器群は調査範囲の中央部東側の広い範囲で半月状に分布するが、土器分類からは、分類土器の纏まった分布範囲が確認されなかった。
- 6 本遺跡の表裏縄文土器を分類した中で、表裏縄文第2類の口縁部と口唇部の施文後口唇部下に縄文が施文される特徴のある土器が多く検出された。また、本遺跡の表裏縄文土器は、外反度が緩く、口唇部が角頭状で肥厚するものが少ない傾向がある。表裏縄文土器の胎土にも特徴があり、多量の白色粒(長石?)が含有する。色調が黄褐色や黄橙色のものが多く認められた。
- 7 本遺跡の押型文土器は繊維の混入する異段密接帯状施文の土器が多く検出され、縄文時代早期中葉の押型文土器後半の土器群と思われる。
- 8 本遺跡では縄文早期後半の条痕文土器が出土している。条痕文土器は絡条体圧痕文が施文されている。
- 9 縄文時代前期初頭の土器が少量出土している。
- 10 縄文前期後半期の諸磯a式併行期の土器が出土している。
- 11 縄文時代草創期と思われる石器が出土しているが、この石器に相当する土器は出土していない。
- 12 凹石が大量に出土している。Aタイプ(円礫のもの)とBタイプのもの(角礫・亜角礫のもの)が多く、今まで注目されなかったBタイプの凹石は多面に凹があり、時期的、用途的問題が残った。また、Aタイプの凹石に本遺跡第2類の石皿が共伴した。

(註) 1区は日向林B遺跡の部分であり、日向林A遺跡の1区として調査した範囲は存在しない。

第13章 日向林B遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

今回調査が行われた日向林B遺跡は、長野県上水内郡信濃町大字富濃字日向林2,253他に所在する。本遺跡は野尻湖の南西部に広がる丘陵地帯の南東端付近に位置する。野尻湖南岸までの距離は約1kmほどである。遺跡は関川水系となる野尻湖とは異なり、斑尾川、鳥居川を経て千曲川、信濃川の水系にあたり、標高は650m前後で野尻湖面とほぼ同じである。

遺跡の東側には北東—南西方向に標高約636mの沖積面が広がっておりそれに沿って斑尾川が流れている。この沖積面のトレンチ調査により、旧石器時代相当層準に泥炭層および水性堆積層が堆積していることが確認され、旧石器時代には湖沼であったことがわかっている。遺跡から水場までの距離は約50mである。遺跡と沖積面の間には台地状の緩斜面地が細く連なっている。この地形面に七ツ栗遺跡が存在するが、そこから調査地点までは一連の緩斜面となっており、今回の調査地点には地形面の差異は認められない。

遺跡の北西側は丘陵地帯となっている。遺跡はこの丘陵の裾部に立地していることとなる。丘陵の上部は緩斜面となっており日向林A遺跡が広がっている。比高差は20～25mある。

遺跡周辺の耕作地からは、縄土器片、土師器片、五輪塔などが採集されていたことから、調査以前は縄文時代および平安時代の遺跡とされていた。今回の調査ではその時代の遺物の検出は微量であり、大半は旧石器時代の遺物であった。

平成6年度に信濃町教育委員会により調査が行なわれた日向林B遺跡(棚橋氏住宅地点)は、南南西に約500m程度離れた場所に位置している。棚橋氏住宅地点で縄文時代早期～前期、および中世の遺物・遺構が検出されている。

引用・参考文献

信濃町教育委員会 1995 「貫ノ木遺跡・日向林B遺跡(個人住宅地点)発掘調査報告書」

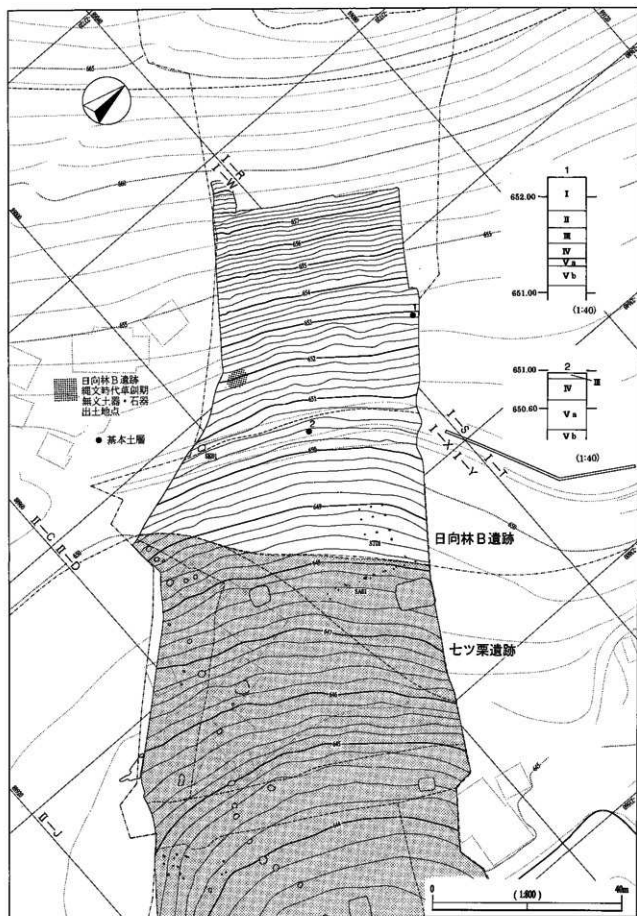
2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法(第35図・第40図)

工事工程の関係で北西側の平成5年度調査区と南東側の平成7年度調査区に2分割する調査工程となった。

平成5年度調査区では当初、縄文時代以降の遺物・遺構の検出が予測されていたために、ルーム層上面までの深度で、重機によるトレンチ調査を先行しておこなったが、遺物・遺構は検出されなかった。引き続き旧石器時代遺物の有無確認のために重機によるトレンチをいれたところ、ルーム層中より遺物が検出されたため、本格的な調査をおこなうこととなった。

重機によりルーム層(IV層)上面までを慎重に掘り下げた。次に8mグリッド内にある16の2mグリッドのうち、一番北側で西から2番目のグリッドを原則としてテストピットを設定し、人力によりVII層まで遺物の検出を行った。



第40図 日向林B遺跡 遺構配置図

遺物が検出されたテストピットについては、遺物検出時点で掘り下げを中断し、周囲を含めて人力によるVI層上面までの面的調査を行った。

平成7年度は平成5年度調査からほぼ全面からの遺物検出が予想されたため、最初から面的に調査を行った。

また、グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、七ツ栗遺跡、菅光田遺跡、日向林A遺跡と合わせて設定した(第35図)。

遺物の取り上げはアイシーに委託して単点測量を用いた。集石・遺物集中部については手取り実測を行った。

(2) 調査経過

(日誌抄)

平成5年度

4月21日	本調査に先行するトレンチ調査により、斧形石器が出土し旧石器が確認される。	7月29日	毎日のように旧石器時代斧形石器が出土する。同志社大学松藤和人講師による現場指導。
4月21日	表土剥ぎ開始	8月2日	旧石器時代砥石が出土する。
5月18日	地形測量のための空測を実施。	8月3日	文化庁岡村道雄主任文化財調査官による現場指導。
5月20日	2m×2mグリッドを一定間隔に設定し掘り下げを開始。	8月6日	旧石器時代斧形石器の総出土数全国最多の25点となり、記者発表が行われる。
6月8日	面的掘り下げ開始。石器が次々と出土する。	8月25日	Va層の掘り下げ終了。空撮・空側を行う。
6月12日	七ツ栗、東裏遺跡と合同で現地説明会が開かれ85名が訪れる。	9月16日	明治大学安森政雄教授による現場指導。
6月18日	明治大学戸沢充則教授による現場指導。	9月22日	國學院大学小林達雄氏による現場指導。
6月15日	トータルステーションによる遺物上げ開始。	10月7日	脂肪酸分析のための斧形石器サンプリング。
7月7日	Va層上面まで掘り下げ終了。環状ブロック群であることが判明。	10月9日	貫ノ木、東裏遺跡と合同で現地説明会を行う。
7月14日	3日続けて雨天。作業難航。	10月28日	掘り下げ完了。
		10月29日	機材を撤収し調査終了。

平成6年度

9月22日	平成7年度調査区の表土剥ぎ行う。	11月8日	平成7年度調査区のローム上面の空測を行う。
-------	------------------	-------	-----------------------

平成7年度

4月5日	IV層上部の掘り下げを開始。	5月29日	明治大学安森政雄教授による現場指導。
4月26日	IV層の掘り下げ終了。	6月2日	Va層掘り下げ終了。空撮を行う。
5月10日	Va層の掘り下げ終了。空撮・空測を行う。	6月7日	文化庁岡村道雄主任文化財調査官による現場指導。
5月28日	貫ノ木遺跡と合同で現地説明会を行う。150名が見学する。	6月14日	調査終了。

(3) 調査結果の概要

縄文時代の遺構としては、土坑1基が確認されたが風倒木と思われる。

また、縄文時代草創期と思われる無文土器と掻器等が同一地点・ほぼ同一層と思われるII層～III層から出土した。他に日向林A遺跡や七ツ栗遺跡と同様の縄文時代土器片や平安時代土器片が僅か数点出土して

いる。

平安時代と思われる建物1棟が日向林B遺跡の調査区から検出された。しかし、七ツ栗遺跡との境目での検出であり、七ツ栗遺跡においては平安時代の住居址や欄が検出されており、この遺構との関連が考えられるため、第14章七ツ栗遺跡にて報告するものとする。

V b層とIV層から2つの旧石器文化が検出された。

V b層からは30のブロックからなる環状ブロック群より石器9,001点、礫74点が出土した。

旧石器時代の調査報告は第1分冊旧石器編に掲載している。

(4) 基本土層 (第4図、第2表)

野尻湖遺跡群の遺跡内では堆積が厚いほうであった。調査区の半分強は畑地であったが、耕作はII層までで旧石器時代遺物への影響はほとんど見られなかった。ただし、平成5年度調査区と平成7年度調査区の境目付近にある昭和期の溝はIV層まで掘り込みが及んでおり、平面的に重なる日向林I石器文化の遺物数十点が二次的に動いていることが確認されている。

I層は表土で30cm~40cmの厚みを持っている。畑地部分は大部分が耕作土であった。

II層は20cm~35cm程度の厚みで、貫ノ木遺跡などと比較すると、色調がやや明るく黒褐色を呈している。比較的やわらかくフカフカしている。

III層は厚さ5~15cm程度で場所によって異なっている。また、下面は不規則にIV層に入り込んでいる。土質はIV層とほぼ同じでやや粘性を帯びている。II層の色調が明るかったために、野尻湖調査団の黒モヤ(モヤ上部)相当層の大部分はII層に分層されていると思われる。そのため、本遺跡でのIII層の大部分は黄モヤ(モヤ下部)に相当すると思われる。III層上部からは創期初頭と思われる石器および、無文土器が出土している¹⁾。

IV層は黄褐色のソフトロームで15~25cmの厚みがある。均質な風化火山灰層でわずかに黒褐色にスコリアを含む。粘質部と砂質部が3:7程度の割合で均質に混合している。

V a層は褐色を呈するIV層とV b層の中間的な層で、両者がブロック状に混在し全体がやや黒ずんでいる。A Tが最も多く含まれるため、この層堆積中にA Tが降灰したと考えられる。

V b層は暗褐色で粘性がありしまりのよい比較的硬い層である。全国的に多く確認されている黒色帯として考えられる。厚さは15cm~25cmで、日向林I石器文化の生活面が存在する。下部になるとスコリアが増し部分的にはV c層と判断できる場所もあったが、安定して分離できなかったため、V c層も含めてV b層とした。

基本層序	Hue	色調	特徴	微	備考
I	7.5YR1.7/1	黒色	表土・耕作土		
II	7.5YR1.7/1	黒色	柏原黒色火山灰層		
III	7.5YR4/2	黒褐色	細粒風化火山灰層	漸移層	モヤ層
IV	10YR7/3	にぶい黄褐色	細粒風化火山灰層	ソフトローム	やや粘性が有りやわらかい 上部野尻ローム II上部~下部
V a	10YR4/4	褐色	細粒風化火山灰層 Tを含む	粒子がやや粗く粘性有り	やや黒い A 上部野尻ローム II最下層
V b	10YR4/6	暗褐色	細粒風化火山灰層	黒色帯 粘性有り	しまりよし 黒色帯上部
V c	10YR4/6	褐色	細粒風化火山灰層	V b層より色調が明るく	V b層をブロック状に含む 黒色帯下部

第2節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、表裏縄文土器や、押型土器前期縄文土器など少量散在するが、これらは日向林A遺跡からの流れ込みと思われる。本遺跡南側の中央調査区境界部から搔器などの石器と共存するように無文土器が出土した（図版222）。出土層位はⅢ層下部であり、草創期の初期の土器と思われる。

(1) 石器（図版229・230—1～7、第51表）

1. 削器（Sc）（1）

珪質凝灰岩製の削器である。長さ140mm、幅37mm、厚さ13mm、重量40.97g。反りが強く縦長の剥片の両側縁と打面部に主要剥離面側から調整剥離が行われている。使用痕は側縁に線条痕がみられる。

2. 搔器（ES）（2）

珪質頁岩製の搔器である。長さ83mm、幅36mm、厚さ10mm、重量31.09g。

縦長の剥片の縁辺に主要剥離面側から調整剥離が行われている。長軸の両端は鈍角の調整剥離が見られる。使用痕は刃部の主要剥離面側に線条痕が見られる。

3. 石刃（Bl）（3）

珪質頁岩製の石刃である。長さ46.5mm、幅20mm、厚さ4mm、重量3.59g。

打面部がほとんどない。やや先細りの石刃である。使用痕は、側縁部に線条痕がみられる。

4. 尖頭器の調整剥片（Pf）（4～7）

4～7は尖頭器の調整剥片である。

(2) 土器（図版230—8～16、第51表）

土器は全点無文である。胎土は砂粒が非常に少なく繊維束痕が混入している。色調は黄褐色、厚みは厚いもので3～4mm薄いもので3mmであり。焼きが甘いため、表面が解けてしまったものが多く、指頭圧痕など明確なものはない。

図版番号	図版NO	整理番号	遺物番号	小ナリ名	スケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	欠損部位	遺存度	文様	部位	備考
図版229	1	1767	1767	IWO11	3/4	Sc	ST	140	37	13	40.97		100			日向林B遺跡
図版229	2	302	302	IWP11	3/4	ES	SS	83	36	10	31.09		100			日向林B遺跡
図版229	3	257	257	IWR13	3/4	Bl	SS	46.5	20	4	3.59					長さ75 日向林B遺跡
図版229	4	4450	4450	IWK03	3/4	Pf	ST	28	29	5	4.07					長さ50 日向林B遺跡
図版230	5	259	259	IWR13	3/4	Pf	ST	20	17	3	0.79		100			日向林B遺跡
図版230	6	328	328	IWQ12	3/4	Pf	ST	22	17	2	0.51		100			日向林B遺跡
図版230	7	254	254	IWR13	3/4	Pf	ST	21	25	2.5	1.09		100			日向林B遺跡
図版230	8	1756	1756	IWP10	1/1		土器				7.28			無文	胴部	2片同一個体 日向林B遺跡
図版230	9	1754	1754	IWP10	1/1		土器				5.99			無文	胴部	2片同一個体 日向林B遺跡
図版230	10	1755	1755	IWP10	1/1		土器				8.82			無文	胴部	日向林B遺跡
図版230	11	1758	1758	IWP12	1/1		土器				2.6			無文	胴部	日向林B遺跡
図版230	12	1760	1760	IWO12	1/1		土器				2.26			無文	胴部	日向林B遺跡
図版230	13	1761	1761	IWO12	1/1		土器				1.07			無文	胴部	日向林B遺跡
図版230	14	1762	1762	IWO12	1/1		土器				2.67			無文	胴部	こなごな 日向林B遺跡
図版230	15	1763	1763	IWO12	1/1		土器				1.72			無文	胴部	日向林B遺跡
図版230	16	1764	1764	IWO12	1/1		土器				2.55			無文	胴部	2片同一個体 日向林B遺跡

第51表 日向林B遺跡 縄文時代遺物属性表

第3節 ま と め

石器と土器が同一地点から共伴して出土している。搔器や削器・石刃等石器は旧石器時代の後半期の石器と思われる。無文土器は石器と共伴していることから青森県大平山元I遺跡（1999 大平山元I遺跡発掘調査団編）の無文土器出土の条件と類似し、縄文時代草創期初頭の古い土器と考えられる。

第14章 七ツ栗遺跡

第1節 調査と概要

1 遺跡の概要

七ツ栗遺跡は長野県上水内郡信濃町大字富濃字七ツ栗2351-3他に所在する。本遺跡は野尻湖の南西部に広がる丘陵地帯の南東端付近に位置する。野尻湖南岸までの距離は約1kmほどである。遺跡は関川水系となる野尻湖とは異なり、斑尾川、鳥居川を経て千曲川、信濃川の水系にあたり、標高は650m前後で野尻湖面とはほぼ同じである。

遺跡の東側には北東-南西方向に標高約636mの沖積面が広がっており、それに沿って斑尾川が流れる。この沖積面のレンチ調査により、旧石器時代相当層中に泥炭層および水性堆積層が堆積していることが確認され、旧石器時代には湖沼であったことがわかっている。遺跡から水場までの距離は約50mである。遺跡と沖積面の間には台地状の緩斜面地が細く連なっている。この地形面に七ツ栗遺跡が存在する。

七ツ栗遺跡は周知の遺跡として知られていたが、その範囲は未確定であり、また、周辺には未周知の遺跡の存在も予想されるところであった。これら周知の遺跡の内容および範囲を把握するための試掘調査は、センターにより本調査と並行して実施され、未周知の遺跡を確認するための試掘調査は県教委により行われた。その結果、縄文時代と平安時代の遺跡とされていた七ツ栗遺跡においても新たに旧石器時代が加わることとなった。

2 遺跡の調査と概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第35図・第41図)

調査範囲は、国道新設部分・高速道と橋台で接する部分・現国道拡幅部分・取り付けの県道・町道改良部分など、工事内容・時期・現況などがさまざまであった。調査は平成5年度から開始し、平成7年度まで3年間に及んだ。調査区域・調査年度等は別項に記した。

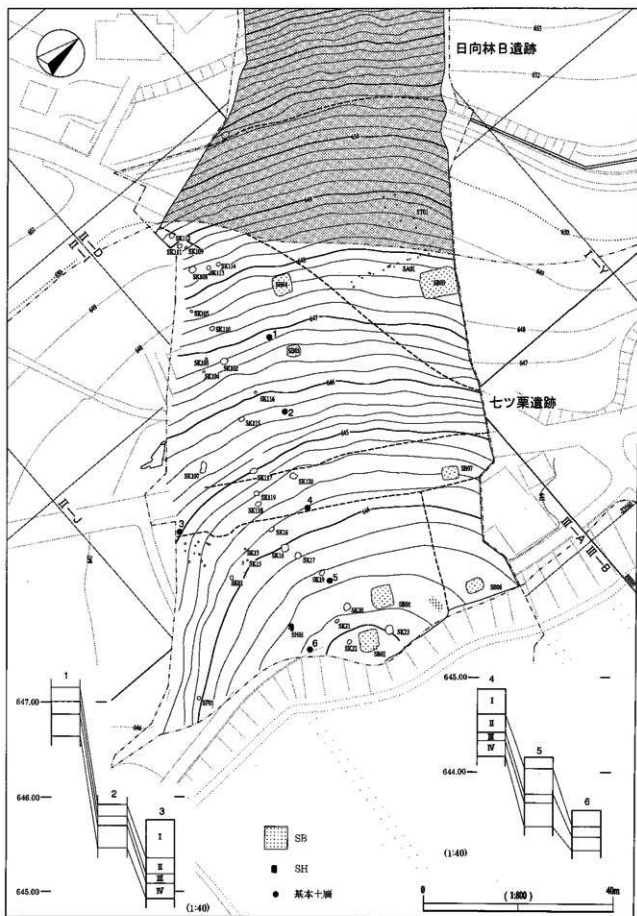
七ツ栗遺跡南東部の低地は複数のトレンチにより試掘をおこなったが遺物は検出されず、すべてのトレンチにおいて水性堆積物層および泥炭層が確認され、湖沼あるいは湿地であったことが判明したため調査区外とした。

グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様に従い、七ツ栗遺跡、普光田遺跡、日向林A遺跡と合わせて設定した(第35図)。

また3年度にわたって調査が行われたため、1-1区、1-2区、1-3区、2-1区、2-2区、3区に便宜的区分けをしたが、整理作業においては区分けを取り除いて行った。

旧石器時代の遺物が主体となったため、遺物の取り上げに際しては、測量業者に委託して、光波トランシットを用いて端点測量をおこなった。現地では、出土位置をmm単位までの精度で、端点の属性として、①点の種別(土器、石器、礫といった遺物の種類等)、②出土層位、③遺物番号をデータとして電子野帳に記録し、それをもとに作成した、編集図面、観測成果簿、観測データ(フロッピーディスク)の3種で管理している。また、群葬や良好な遺存状態で集中していた遺物については、別に微細図を作成した。

遺物の取り上げ番号は、遺構に帰属する遺物については、遺構ごとに1番から番号を付し、包含層・遺構外の遺物については遺跡ごとに1番から番号を付した。注記については以下のとおりである。



第41図 セツ渠遺跡 遺構配置図

七ツ栗道跡2号礫群3番の遺物は、MNN、SH2.3と記す。

また、調査区の北東側の日向林B遺跡調査区側で検出された建物址（ST01）と櫓列（SA01）は、七ツ栗道跡の平安時代住居址と関連する遺跡と思われる、七ツ栗道跡において報告こととする。

(2) 調査経過

(日誌抄)

平成5年度

- | | | | |
|-------|------------------------------------|-------|--------------------------------|
| 4月13日 | 1-1区の表土剥ぎを開始。 | 6月11日 | Ⅲ層までの掘り下げほぼ終了。空撮・空測を行う。 |
| 4月19日 | Ⅱ層の遺物・遺構の検出開始。 | 6月12日 | 日向林B、東裏遺跡と合同で現地説明会が開かれ85名が訪れる。 |
| 5月7日 | トータルステーションによる遺物上げ開始。縄文時代前期の土器片が主体。 | 6月18日 | 明治大学戸沢充則教授による現場指導。 |
| 5月11日 | 平安時代の住居跡SB01を確認し、覆土の掘り下げを始める。 | 6月25日 | Ⅳ層以下の調査終了。旧石器時代の遺物・遺構がないことを確認。 |
| 5月21日 | 縄文時代の陥し穴確認。 | | |

平成6年度

- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|-------------------------------|
| 9月28日 | 2-1区の表土剥ぎを開始。 | 10月18日 | 縄文時代の陥し穴の調査を進めるが、掘りこみが深く難航する。 |
| 10月4日 | 縄文面の調査開始。縄文前期の土器片を確認。 | 10月28日 | 調査終了。 |
| 10月7日 | 縄文面掘り下げ終了。空撮・空測を行う。 | 11月11日 | 3区の表土剥ぎを開始。 |
| 10月8日 | 旧石器面および縄文時代の遺構の調査開始。石器ブロックを確認。 | 11月21日 | 2-2区の表土剥ぎを開始 |
| 10月12日 | 遺物を取り上げる。杉久保系の石器文化であることが判明する。 | | |

平成7年度

- | | | | |
|-------|---------------------------------|--------|----------------------------------|
| 4月5日 | 3区で調査始まる。平安時代のSB03を確認、掘り下げを始める。 | 7月11日 | 1-3区の調査開始。 |
| 4月14日 | 縄文時代の包含層の掘り下げ開始。縄文時代前期土器片を確認。 | 7月18日 | 1-3区で平安時代の住居跡（SB0.6）確認。縄文土器片も出土。 |
| 5月18日 | 3区の調査終了。2-2区の調査開始。 | 7月24日 | 1-2区の調査開始。縄文時代の陥し穴を確認。 |
| 6月6日 | 2-2区の縄文面調査開始。 | 7月25日 | 2-2区の陥し穴断面の土層転写を行い、2-2区の調査を終える。 |
| 6月8日 | 平安時代の住居跡2軒・縄文時代の陥し穴2基を検出。 | 8月2日 | 1-3区の一部を残して調査を終了する。 |
| 6月15日 | 空撮・空測を行う。 | 10月20日 | 1-3区の残り部分の調査再開。 |
| 6月19日 | 陥し穴を除く縄文面の調査終了。旧石器面の調査に移行。 | 10月26日 | 平安時代の住居跡（SB07）4を確認。 |
| 6月22日 | Ⅳ層中位に石器文化確認。 | 10月31日 | すべての調査が終了する。 |
| 7月6日 | 4日連続で雨天。調査滞る。 | | |

(3) 調査結果の概要

七ツ栗道跡は旧石器時代から平安時代まで確認された。

旧石器時代はブロックが2ヶ所検出され、礫群は1基確認され旧石器時代の遺物は量的に少なく、Ⅳ層

中心の遺物が出土している。

縄文時代は表裏縄文土器、早期押型文土器・条痕文土器等、前期前葉～中葉土器が出土した。遺構は集石2基、土坑25基確認され、そのうち15基が陥し穴と思われる土坑が確認された。

弥生時代中期初頭の同一個体の土器片が数点出土した。

平安時代は住居址5棟検出された。また、調査区北東側においては日向林B遺跡調査範囲内で、平安時代の建物址(S T01)1棟と欄列(S A01)が検出された。

(4) 基本層序(第4図・第2表)

丘陵の裾に位置するセツ栗遺跡では、比較的厚い土層の堆積が認められる。

基本層	Hue	色	調	特	徴
I	7.5YR1.7/1	黒色		表土・耕作土	
II	7.5YR1.7/1	黒色		柏原黒色火山灰層	
III	7.5YR4/2	黒褐色		細粒風化火山灰層	漸移層 モヤ層
IV	10YR7/3	にぶい黄褐色		細粒風化火山灰層	ソフトローム やや粘性が有りやわらかい 上部野尻ローム II上部～下部
Va	10YR4/4	褐色		細粒風化火山灰層	粒子がやや粗く粘性有り やや黒い ATを含む 上部野尻ローム II最下層
Vb	10YR4/6	暗褐色		細粒風化火山灰層	黒色帯 粘性有り しまりよし 黒色帯上部
Vc	10YR4/6	褐色		細粒風化火山灰層	Vb層より色調が明るくVb層をブロック状に含む 黒色帯下部

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

(1) 集石(図版231)

1. SH01(図版231)

調査区南側(III F13)の緩い斜面の下方に位置する。SH01はII層面から検出している。径約1mに頭大の礫敷き、その上に北方向を頂点とする底辺1.5m高さ0.8mの三角形に亜角礫や角礫が密に集石している。礫68点、重量76,040g、礫は子供の頭大(20mm×10mm)のものが多く、全体に焼けているものが多い。礫の材質は安山岩である。石蒸し料理などの用途の集石であろうか。

2. SH02(図版231)

調査区南側(III K02)の緩い斜面の下方に位置する。SH02はII層面から検出している。径約0.7mの円形状に集石されている。深さ約5cm～8cmの浅いIII層の土が焼成した覆土の土坑上に、大きな(約30mm×20mm)亜角礫や角礫が平らに積まれ、その上に拳大の角礫・亜角礫が中央に密集するように礫が積まれている。その円形状の集石の周りに拳大の礫が散在している。SH02は礫92点、重量43,870g、材質は安山岩製の非常に焼を受けた礫の集石である。SH02は炭化物の検出がないが、集石炉の可能性はある。

(2) 土坑(図版232～234、第52表)

土坑は25基検出された。そのうち21基を図化した。セツ栗遺跡では3類に分類される。なお、SK01

は中世以降の土坑と思われるため、その他の遺構の項に記述する。(括弧内は第16章第3節の分類)

第1類 (土坑分類1類) (図版232~234)

平面長方形あるいは楕円形断面箱型で底面に逆茂木痕がある土坑をこの類とする。深さの違いから3種類に細分される。

1-a類 口径約1.2m×0.8m、深さ約1.0m前後のもの。SK19・SK21・SK22・SK110・SK112・SK115・SK118・SK119の8基がこれにあたる。

1-b類 口径約1.3m×1m、深さ1.2m以上のもの。SK16・SK17・SK18・SK102・SK108・SK117の6基がこれにあたる。

1-c類 口径約1m×0.8m、深さ約0.8mの浅いもの。SK111がこれにあたる。

遺跡の南東側Ⅱ-D・E・J・F区の西から東に向かう斜面には、西からSK112・SK111・SK110・SK115・SK119・SK118・SK18・SK16・SK17・SK19・SK21・SK22が斜面に沿ってほぼ直線状に並列している。その間93mにも及ぶ。

特に1-a類はSK111とSK112、SK119とSK118は2m間隔でならび、SK21とSK22は5m間隔で並ぶ。また、1-b類のSK18・SK16・SK17は2~4m間隔で並び、隣り合うSK118やSK119とは5m間隔で並ぶ。第1類としたものをブロック別にとすると、第1ブロックSK112・SK111・SK108、第2ブロックSK110・SK102、SK1115は単独で第3ブロック、第4ブロックはSK117・SK119・SK118とSK18・SK16・SK17・SK19の2つの小ブロックを合わせたブロック、そして第5ブロックのSK21・SK22の5ブロックに分かれ、そのブロック間の間は等間隔で、約10~12mである。陥穴と思われる。

第2類 (土坑分類第2類) (図版234)

平面口径約0.5mの円形あるいは楕円形で、断面浅い0.2~0.5mの箱型あるいは楕円状の土坑はこれに分類する。七ツ栗遺跡ではSK20・SK103・SK104・SK105・SK114の5基がこれにあたる。

第3類 (土坑分類第14類) (図版234)

平面形・断面形態が不定形のもはこの類とする(SK23・SK113・SK116・SK120・SK121)。

第1-a類の壁面には小さな横穴が開けられている。陥穴のための補助棒の穴と思われる。

第1類は底面に逆茂木痕があり、陥穴と思われる。第1-a類のSK19、第1-b類のSK17とSK108は年代測定の結果がでている。これにより、信濃町の第1類の土坑は縄文時代前期として考察できよう。

SK19は5,200±100 (3,250 B. C) 年、SK17は5,540±100 (3,590 B. C) 年で、SK108は6,150±100 (4,200 B. C) 年であった。時期的には縄文時代前期にあたる。

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方向	分類	備考
SK	1	0.91×0.62	13	N-57°-W		中世以降
SK	16	1.74×1.64	125~140	N-6°-W	1b	
SK	17	1.39×1.20	116~126	N-25°-W	1b	
SK	18	1.22×0.74	92~117	N-2°-W	1b	
SK	19	1.19×0.86	103~128	N-19°-W	1a	
SK	20	1.68×1.35	44	N-34°-W	2	
SK	21	0.98×0.54	92~108	N-4°-E	1a	
SK	22	0.98×0.80	86~110	N-13°-W	1a	
SK	23	1.94×1.64	17	N-58°-W	14	
SK	102	1.49×1.34	128~162	N-0°	1b	
SK	103	0.47×0.44	16	N-88°-E	2	
SK	104	0.50×0.46	16	N-8°-W	2	
SK	105	0.52×0.51	20	N-80°-E	2	
SK	108	1.42×1.30	126~166	N-2°-E	1b	
SK	110	1.02×0.78	79~96	N-8°-E	1a	
SK	111	1.02×0.86	106~136	N-2°-E	1c	

第52表 七ツ栗遺跡 土坑属性表(1)

遺構の種類	遺構番号	規模(m)	深さ(cm)	方 向	分類	備 考
SK	112	1.24×0.96	114~150	N-7° -W	1a	
SK	113	0.94×0.86	42	N-10° -E	14	
SK	114	0.83×0.87	30	N-20° -E	2b	
SK	115	1.18×0.80	114~162	N-1° -W	1a	
SK	116	0.56×0.51	24	N-3° -E	14	
SK	117	1.56×1.02	103~162	N-32° -E	1b	
SK	118	1.34×0.96	101~152	N-0°	1a	
SK	119	1.02×0.98	90~128	N-88° -E	1a	
SK	120	1.63×1.27	35	N-31° -E	14	
SK	121	1.83×1.60	15	N-0°	14	

第52表 セツ栗遺跡 土坑属性表 (2)

2 遺物

(1) 土器 (図版237~249、第53表・第54表)

1. 縄文時代草創期の土器 (図版237-1・2)

爪形文 (1・2)

本遺跡内 2 点のみの出土である。胎土に透明石英粒が大量に含有している。爪形文が器面全体に施文されるタイプの土器と思われる。

爪形文は調査区から少しはみ出た南側崖の先端部でⅡ層より出土している。

2. 縄文時代草創期終末~縄文時代早期前葉 (表縄文系土器群) の土器 (図版237-3~図版240-78)

本遺跡の表裏縄文系土器群には a 表裏縄文と b 表縄文が出土している。

a. 表裏縄文土器 (3~49・65・66)

第 1 類 異方向に縄文が施文されているもの。規則性のない羽状に施文されているもの (1~9)。7 は「RL」の原体で、他は「LR」である。

第 2 類 口縁部と口唇部に施文された後、口唇部下に施文するもの (10~17)。12~14 は「RL」の原体で、16・17 は「L」、他は「LR」である。

第 3 類 外面の縄文の条が縦走するもの (18~30)。18 の原体は「R」、21・30 は「LR」、他は「RL」である。

第 4 類 外面の縄文の条が横走するもの (31~40)。

31・36・40 は「LR」の原体で、37 は「R」、38 は「L」、39 は「LRL」の原体である。

第 7 類 特殊なもの (41)

41 は、無文帯をさきむ「LR」原体の横位施文である。

b. 表縄文 (50~64・67~78)

表縄文第 1 類 (67・68・70・73) 異方向に縄文が施文されているもの

表縄文第 4 類 (63・64) 表の縄文の条が横走するもの。

表縄文第 5 類 (65・74) 表の縄文の条が斜走しており、施文が縦方向のもの (縦位施文)。

表縄文第 6 類 (66・69) 表の縄文の条が斜走しており、施文が横方向のもの (横位施文)。

表縄文第 7 類 (71・72・75~78) 特殊な施文を一括した。

78 と 75 と 72 は同一個体で結節部分のある粗い施文の縄文、76 は結束部、77 は「LL」の撚り戻し縄文と思われる。78 は縄の撚りと反対方向に絡げた付加条の原体を用いている (註)。78・75・72・78 は内面が

註 図版229では縷糸文として分布域を記載している。

非常に平滑である。

50から62は、底部である。尖底(56・57)と丸底(54・55)がある。

本遺跡の表裏縄文の胎土は日向林A遺跡同様、白色粒子(長石?)を主体的に含んでいる。屈曲する器形はなく、緩く外傾する器形である。器厚も薄いものはほとんどなく、口縁部が肉厚になるものもほとんどない。口唇部に施文されている角頭状のものが主体的である。日向林A遺跡と表裏縄文土器は同じ傾向を示している。

また、表裏縄文系土器群はⅡ層からⅡ層下部にかけて出土している。分布は、調査区南側崖先端部で多く出土しており、西側にも少し分布している(図版235)。表裏縄文土器文様分類別に分布を見ると調査区南側に散漫に分布している(図版236)。分類別の分布の片寄りはない。

3. 縄文時代早期中葉の土器(図版241~図版242)

本遺跡の早期中葉の土器ではa押型文、b沈線文の土器群が出土している。ほとんどの土器片に繊維が混入している(79~82・89~132)。

a. 押型文(79~132)

第1類(83~88) 無文帯を挟む縦位施文の山形文。器厚が薄く4mm以下である。山形文の刻みは3本で、施文幅約15mmである。

第2類(89~97) 無文帯を挟む横帯状施文の山形文。

第3類(80・82・98~120・132) 楕円密接施文。施文幅約30mm。

80と82は横密接施文の上に縦方向施文と斜め方向施文。80は直立する口縁部で、口径約20cm。82は口縁部直立、口縁部下で最大径のある胴上部が膨らみ、尖底にいたる器形である。推定口径約19cmである。

第4類(121~131) 異種多段施文。施文幅22mm~25mmと30mm。

79は楕円文と格子目文を横帯状に施文。81は楕円文を2段と山形異型文を横帯状に施文。79は口縁部が外反し、胴部が直立し、尖底部にいたる器形である。口径は約21cmである。81は口縁部が外傾して、胴部の文様が変わる部分から尖底部に緩やかに向かう器形である。口径約25cmである。異種の文様として他に重菱形文(121・126)など各種の文様(121~131)がある。

b. 沈線文(133)

沈線文系貝殻腹縁文の土器である。田戸上層式併行期の土器と思われる。

aの押型文の分布は表裏縄文同様調査区南側崖先端部に多く出土している。その他に南東崖先端部にもわずかに第3類と第4類が分布する。bは南崖先端部から出土している。(図版235)

4. 縄文時代早期後半の土器(図版243~244-134~176)

条痕文(134~176)

本遺跡の条痕文土器群は多量の繊維が含有している。また、黒雲母類も多く含有しているものが多い。条痕文土器文様の施文具や施文方法の違いから大きく5分類される。

第1類 口縁部文様帯に沈線で施文されたもの(134・138~148・161・162)

a 細い沈線のもの(139~146)

142は沈線の交差部に刺突がされているようにも観察されるが、石が抜けた穴の可能性もある。

b 太い沈線のもの(134・138・161)

138・161は隆帯の脇に刺突文がある。134口縁部と底部が欠損している。口縁部文様帯にヘラ状工具の太い沈線が羽状に引かれている。器形は細身の尖底土器と思われる。134は常世1式関連の岩手県馬立I遺跡出土(1997 長野県考古学会縄文時代(早期)部会編 P161)の土器に文様構成が類似する。

- c 沈線に沿って刺突文のあるもの (148・162)

沈線は太く、沈線に向かってヘラ状工具で刺突している。

- d 縦区画のある沈線文 (147)

147は新水B遺跡 (1997 長野県考古学会縄文時代(早期)部会編) と同時期の文様構成に類似する土器と思われる。

- 第2類 櫛歯状工具による刺突 (149)

明確な条痕は不明、この類にしては薄手である。子母口式土器と併行期の土器と思われる。

- 第3類 先端の尖る棒状工具の刺突 (151~155・159)

ハの字状に施文されている。

- 第4類 絡条体条痕文 (135~137・163~171・173・174)

口縁部が波状のものと平口縁のものがある。163・165など縦位隆帯の側面に絡条体を押し付けるようにしてから条痕を引くものがある。

- 第5類 口縁部文様帯に絡条体丘痕文が施文されたもの (157・158・160・172・175)

第2類のものは、文様構成など田戸上層式併行期の土器文様の系譜を持つものが多い。田戸上層式併行期の後続土器群として注目される。

条痕文の土器は南東側崖先端部に面して分布している (図版229)。他の土器群と分布を異にしている。

5 縄文時代前期の土器 (図版244~249-177~269)

本遺跡の縄文前期の土器はa羽状縄文土器 b竹管文土器 c縄文土器の3分類される。

- a 羽状縄文 (繊維含有) (図版244~243-177~179・182~197)

- 第1類 羽状縄文 (179)

結束縄文の羽状縄文である。原体「L R」と「R L」の羽状である

- 第2類 ループ文 (182~184・191)

182・183は縄文側面ループであり、184・191は閉端のループ文である。

- 第3類 縄文条痕の上に縄文を転がしたもの (193)

193は原体「L」である。

- 第4類 組紐縄文 (185~187)

185・186は同一個体である。組紐がほどけた状態で施文されている。187は原体「R」と「L」の組紐である。

- 第5類 繊維含有縄文 (188~190・192・194~197)

- b 竹管文 (180・181・198~256)

- 第1類 胴部文様帯が菱形の羽状縄文のもの (181・198)

- 第2類 地紋がなく、平行沈線の半截竹管文を施文するもの (180・199~206)

- 第3類 地紋に縄文が施文されて磨り消しのないもの (207~210)

207・208は爪形の半截竹管文が口縁部文様帯に施文されている。

- 第4類 沈線で表現された格子状の竹管文 (211~213)

- 第5類 幾何学的な入り組み木ノ葉文や渦巻き状文等を組み合わせた竹管文 (214~230・223を除く)

- 第6類 鋸歯状文と横沈線が組み合わさった竹管文 (231~234)

- 第7類 肋骨文 (235~256)

- 第8類 櫛歯状工具による波状文 (223)

この類は鋸歯文と同等の文様と理解する。

c 縄文 (257~268)

内面丁寧なナデ若しくは、ミガキに近い整形がされている縄文の土器をこの類とした。268は縄文の端部が曲がった状態で施文したもの。257は繊維が含有しているが、内面整形が丁寧である。

a 羽状縄文第1類~第4類は縄文前期初頭の土器群である。a 羽状縄文第1類・b 竹管文第1類~第3類は、前期中葉有尾式、黒浜式併行期の土器である。b 竹管文第5類~第8類・c 縄文の土器は前期後半初頭の諸磯a式土器群である。

縄文前期の土器群は調査区南西部分と南部分から南東部分に分布する。他の時期より崖から若干離れた位置に分布する。土坑列の中腹部と先端部両脇に分布する。

文様別	爪形文	表裏縄文	表縄文	縷承文	羽状縄文	縄文	押型文	無文	文様文	条痕文	竹管文	その他	合計
土器片数	2	94	26	19	140	2354	172	92	1	773	756	1127	5558

第53表 セツ栗遺跡 縄文時代土器文様別組成表

図版番号	No.	発掘番号	遺構・区分	遺物番号	小ゲリ名	出土層位	スケール	文様	部位	文様構成	特徴	縄文内容	胎土	繊維或 色調(%)	接合・同一個体 (遺物番号)	備考
図版237	1	3777		3777	田KGO7	II	1/2	爪形文	胴部	爪形文		爪	石英微細砂多量	にぶい赤褐色		
図版237	2	3673		3673	田KH07	II	1/2	爪形文	胴部	爪形文		爪	石英微細砂多量	にぶい褐色		
図版237	3	2558		2558	田KE06	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	明赤褐色		
図版237	4	3844		3844	田KGO7	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	にぶい赤褐色		
図版237	5	3732		3732	田KFO7	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	にぶい赤褐色		
図版237	6	2850		2850	田KFO2	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	石英粒多量	にぶい暗褐色		
図版237	7	2632		2632	田KFO6	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	石英粒多量	にぶい褐色		
図版237	8	320		320	田JO05	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	暗褐色		
図版237	9	3149		3149	田KGO1	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	暗褐色	3163	
図版237	10	2519		2519	田KFO7	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	赤褐色		
図版237	11	2678		2678	田KGO5	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	石英粒多量	赤灰色		
図版237	12	1301		1301	田FE13	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	石英粒多量	暗褐色		
図版237	13	486		486	田KE05	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	雲母多量	にぶい赤褐色	589	
図版237	14	2562		2562	田KE06	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	石英粒多量	褐色		
図版237	15	3656		3656	田KH06	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	暗褐色		
図版237	16	2295		2295	田JPO7	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		L	石英粒多量	褐色		
図版237	17	3368		3368	田JGO7	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		L	雲母多量	褐色		
図版237	18	3148		3148	田KGO1	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		R	雲母多量	暗褐色		
図版237	19	1250		1250	田FC15	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	石英粒多量	明赤褐色		
図版237	20	1259		1259	田FD13	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	雲母多量	赤褐色		
図版238	21	3696		3696	田KGO7	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	明赤褐色		
図版238	22	963		963	田KDO2	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	石英粒多量	赤褐色		
図版238	23	77		77	田FA16	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	雲母多量	明赤褐色		
図版238	24	1143		1143	田FD18	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		RL	雲母多量	にぶい赤褐色		
図版238	25	2617		2617	田KFO6	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文		LR	雲母多量	にぶい褐色		

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器属性表 (1)

第14章 セツ栗遺跡

図版番号	No.	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小「リ」系	出土状況	スケール	文様	部位	文様構成 特徴	施文内容	胎土	線装	色調(外)	結合・同一個体(整理番号)	備考
図版238	26	1134		1134	ⅡFD1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		暗赤褐色		
図版238	27	2642		2642	ⅡKHO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		に白い黄褐色		
図版238	28	3843		3843	ⅡKGO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		明赤褐色		
図版238	29	2507		2507	ⅡKFO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		に白い赤褐色		
図版238	30	2503		2503	ⅡKFO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		に白い褐色		
図版238	31	1421		1421	ⅡFF1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		明赤褐色		
図版238	32	1432		1432	ⅡFF1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		に白い褐色		
図版238	33	2645		2645	ⅡKGO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		明赤褐色		
図版238	34	7420		7420	ⅡJQO	ⅡF	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		褐色		
図版238	35	1164		1164	ⅡFE1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		に白い暗褐色		
図版238	36	1189		1189	ⅡFE1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		に白い赤褐色		
図版238	37	883		883	ⅡKFO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		褐色		
図版238	38	2606		2606	ⅡKEO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		褐色		
図版238	39	61		61	ⅡJP1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	石英粒多量		に白い赤褐色		
図版238	40	2815		2815	ⅡKEO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		暗赤褐色		
図版238	41	909		909	ⅡKDO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文(帯状施文)	丸	石英粒多量		褐色	2606	
図版239	42	1277		1277	ⅡFC1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	雲母多量		に白い褐色		
図版239	43	3414		3414	ⅡFKO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	雲母多量		暗赤褐色		
図版239	44	1138		1138	ⅡPDI	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	石英粒多量		赤褐色		
図版239	45	2231		2231	ⅡJPO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	雲母多量		明赤褐色		
図版239	46	2608		2608	ⅡKGO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文(継りの跡が異なる)	丸	石英粒多量		暗赤褐色		
図版239	47	4283		4283	ⅡJIO	Ⅱ上	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	雲母多量		明赤褐色		
図版239	48	2231		2231	ⅡF2	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	雲母多量		に白い赤褐色		
図版239	49	1120		1120	ⅡFC1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	不明	雲母多量		暗赤褐色		
図版239	50	2532		2532	ⅡKFO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	雲母多量		暗赤褐色	2543	
図版239	51	1399		1399	ⅡFE1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	石英粒多量		に白い褐色		
図版239	52	8091		2543	ⅡKFO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	雲母多量		暗赤褐色	253	
図版239	53	1156		1156	ⅡFE1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	雲母多量		明赤褐色		
図版239	54	3686		3686	ⅡKFO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	実底部	表裏縄文	丸	石英粒多量		褐色		
図版239	55	3147		3147	ⅡKGO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	実底部	表裏縄文	丸	雲母多量		褐色		
図版239	56	88		88	ⅡJL1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	実底部	表裏縄文	不明	雲母多量		暗赤褐色		
図版239	57	909		909	ⅡJP0	Ⅱ	1/2	表裏縄文	実底部	表裏縄文	不明	雲母多量		明赤褐色		
図版239	58	3842		3842	ⅡKGO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	実底部	表裏縄文	丸	雲母多量		明赤褐色		
図版239	59	1183		1183	ⅡFF1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	石英粒多量		に白い褐色		
図版239	60	1609		1609	ⅡFEO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	雲母多量		暗赤褐色		
図版239	61	2814		2814	ⅡKCO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴下部	表裏縄文	丸	石英粒多量		赤褐色	3162	
図版239	62	2707		2707	ⅡKGO	Ⅱ	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文	丸	石英粒多量		赤褐色	2722	
図版240	63	3234		3234	ⅡFR1	Ⅱ	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		赤色		
図版240	64	5042		5042	ⅡEJ1	ⅡF	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	丸	雲母多量		に白い赤褐色		

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器属性表 (2)

図版番号	No.	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小片・おぼろ	出土層位	スケール	文様	部位	文様構成特徴	施文内容	胎土	施文	色調(外)	統合・同一個体(整理番号)	備考
図版240	65	3066		3066	黒KF06	II下	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	LR	雲母多量		褐色		
図版240	66	3765		3765	黒KF09	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	LR	雲母多量		暗赤褐色		
図版240	67	3143		3143	黒KF01	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	LR	石灰粒多量		赤褐色		
図版240	68	2811		2811	黒KF01	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	LR	石灰粒多量		赤褐色		
図版240	69	2986		2986	黒KF01	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	RL	雲母多量		にぶい褐色		
図版240	70	3265		3265	黒FC17	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	R	雲母多量		にぶい暗褐色		
図版240	71	2448		2448	黒FC05	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文	R	雲母多量、石灰粒多量、赤褐色粒含有		にぶい暗褐色	2449	
図版240	72	1719		1719	黒FF04	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文(胎)	R	細砂粒含有		褐色	1259類似	
図版240	73	2258		2258	黒FB11	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文(形状?胎)	不明	雲母多量		明赤褐色		
図版240	74	2543		2543	黒KF06	II	1/2	表裏縄文	口縁部	表裏縄文(前期?)	RL	雲母多量		暗赤褐色		
図版240	75	1587		1587	黒FE06	II	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文		白色砂粒少、赤色細粒少、石灰粉粒微量		暗褐色	1719同一個体	
図版240	76	1574		1574	黒FF05	II	1/2	表裏縄文	胴部	表裏縄文(胎)	不明	雲母多量、石灰粉粒多量		赤褐色		
図版240	77	4038		4038	黒JF06	II中	1/3	表裏縄文	口縁部	表裏縄文(胎)	L	細砂粒多量、白色粒含有		暗褐色	4039-4040-4037-4290	
図版240	78	526		526	黒FC06	II	1/3	表裏縄文	口縁部	表裏縄文(胎)	L	細砂粒含有、白色粒少量		暗赤褐色	527	
図版241	79	56		56	黒JP16	II	1/3	押型文	口縁部	押型文(西内文、鳥ノ目文)		粗い砂粒含有	有	黄	遺物多数	
図版241	80	1716		1716	黒FE06	II	1/3	押型文	口縁部	押型文(西内文)		粗い白色粒、砂粒混合、小石まじり	有	黄	1718-2740・1098	
図版241	81	2550		2550	黒KF06	II	1/3	押型文	口縁部	押型文(西内文)		砂粒多量、石灰、赤褐色粒多量	有	黄	遺物多数	
図版241	82	2763		2763	黒KF03	II	1/3	押型文	口縁部	押型文(楕圓、楕圓文)		粗い白色粒、砂粒含む、小石まじり	有	黄	遺物多数	
図版241	83	3895		3895	黒FK02	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒多量、石灰少量混入		にぶい黄褐色		
図版241	84	572		572	黒JO04	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒少量、金雲母細粒少量		にぶい黄褐色		
図版241	85	2282		2282	黒JO04	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒少量、小石1~2mm含有		黄褐色		
図版241	86	7339		7339	黒JQ04	II下	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒少量、金雲母細粒少量		にぶい黄褐色		
図版241	87	8990	不明			不明	1/2	押型文	胴部	押型文(縦行文、楕圓混合)		白色細粒少量、砂粒、細粒含有		黄褐色		
図版241	88	3195		3195	黒FF20	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒含有、砂粒少量混入		黄褐色		
図版241	89	3072		3072	黒KD04	II	1/2	押型文	口縁部	押型文(山形文)		赤色細粒含有、白色細粒少、繊維少量	有	にぶい黄褐色		
図版241	90	3668		3668	黒KG07	II	1/2	押型文	口縁部	押型文(山形文)		砂粒細粒含有、白色細粒少		黄		
図版241	91	6006		6006	黒J107	II中	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒少量、黒雲母少	有	黄		
図版241	92	1266		1266	黒FD12	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		砂粒含有、石灰少量	有	黄	1312	
図版241	93	885		885	黒KE06	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色粒含有		明赤褐色		
図版241	94	891		891	黒KE05	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒含有		にぶい黄褐色		
図版241	95	1075		1075	黒KE03	II	1/2	押型文	口縁部	押型文(山形文)		白色細粒含有、砂粒少量	有	黄		
図版241	96	1383		1383	黒FC12	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		砂粒含有、黒雲母少量		にぶい黄褐色		
図版241	97	91		91	黒J111	II	1/2	押型文	胴部	押型文(山形文)		白色細粒多量、石灰少量		にぶい黄褐色		
図版241	98	2724		2724	黒KF05	II	1/2	押型文	口縁部	押型文(楕圓文)		粗い砂粒含有		黄褐色		
図版241	99	3423		3423	黒FL06	II	1/2	押型文	口縁部	押型文(西内文)		白色粒多量(貝殻粒最文の胎土に類似)		黄		
図版241	100	2198		2198	黒FA14	II	1/2	押型文	胴部	押型文(楕圓文)		石灰、赤褐色粒含有	有	明赤褐色	945-977同一個体	
図版241	101	2545		2545	黒KF06	II	1/2	押型文	胴部	押型文(西内文)		石灰少量、赤褐色粒含有	有	黄		
図版241	102	3060		3060	黒KF06	II	1/2	押型文	胴部	押型文(西内文)		石灰少量、赤褐色粒含有	有	黄		

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器属性表 (3)

第14章 セツ渠遺跡

図面番号	%	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小・イ・イイ名	出土状況	スケール	文 種	部 位	文様構成 特徴	施文内容	胎 土	織 成	色調 (色別)	結合・同一個体 (整理番号)	備 考
図面242	163	2634		3834	Ⅲ F M O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		石英砂粒多量		有 橙		
図面242	164	7512		7512	Ⅲ A Q 1	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		雲母多量		有 赤褐		
図面242	166	9689		9689	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		細砂粒含有		有 橙		
図面242	168	2537		2537	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		白色粒含有		有 橙		
図面242	167	3732		3732	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		細砂粒含有		有 橙		
図面242	166	5073		5073	Ⅲ K D O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		1mm以上白色粒含有		有 橙		
図面242	169	3064		3064			1/2	押型文	基部	押型文 (横四文)		粗い砂粒、石英含有		有 橙		
図面242	110	2638		2638	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		粗い砂粒、石英含有		有 橙	2549同一個体	
図面242	111	880		880	Ⅲ K E O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		白色粒含有		有 橙		
図面242	112	2549		2549	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		粗い砂粒、石英含有		有 橙	2638同一個体	
図面242	113	2751		2751	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文)		雲母石英含有		有 赤褐	2231同一個体	
図面242	114	2234		2234	Ⅲ J P 1	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文)		雲母石英含有		有 赤褐		
図面242	115	2755		2755	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文)		白色粒含有		有 橙		
図面242	116	3228		3228	Ⅲ F H 1	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文+横文)		砂粒含有		有 明赤褐		
図面242	117	2602		2602	Ⅲ K G O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (横四文)		細砂粒含有		有 褐	2602	
図面242	118	101		101	Ⅲ J M 1	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文)		白色粒、石英多量		有 明赤褐	110	
図面242	119	73		73	Ⅲ J P 1	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文)		石英、赤褐色粒含有		有 橙		
図面242	120	7514		7514	Ⅲ A Q 1	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文)		粘土粒・長石 (白色粒) 小石英等多量		有 褐		
図面242	121	3010		3010	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	口縁部	押型文 (横四文+山形文)		細石英粒含有		有 橙	3012	
図面242	122	945		945	Ⅲ K D O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		長石、赤褐色粒含有		有 明褐	497、2198同一個体	
図面242	123	3223		3223	Ⅲ F H 1	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		細砂粒含有		有 橙	2504同一個体	
図面242	124	2518		2518	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		細砂粒含有		有 橙	2517、2223同一個体	
図面242	125	2504		2504	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		細砂粒含有		有 橙		
図面242	126	7902		7902	Ⅲ A J O 7	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		粗砂粒含む		有 に近い地		
図面242	127	2547		2547	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		細石英含有、赤褐色粒少		有 橙		
図面242	128	2191		2191	Ⅲ J P 1	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文 (真横)		細砂粒含有		有 橙		
図面242	129	2692		2692	Ⅲ K G O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文		石英多量、赤色粒含有		有 橙	2700、2743同一個体	
図面242	130	2743		2743	Ⅲ K E O	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文		石英多量、赤色粒含有		有 橙		
図面242	131	85		85	Ⅲ J L 1	Ⅱ	1/2	押型文	胴部	押型文		粗砂粒多量、白色粒多量		有 橙	84-85	
図面242	132	909		909	Ⅲ K E O	Ⅱ	1/2	押型文	尖底部	押型文		大粒な石英粒含有		有 橙	3688	
図面242	133	2927		2927	Ⅲ K G O	Ⅱ	1/2	沈黙文	胴部	貝殻縁線文		白色粒含有、石英粒細粒多量		有 に近い地		
図面243	134	7905-58-23					1/4	糸織文	胴部	糸織文		砂粒多		有 に近い地	遺物多数	背島式洋行所
図面243	135	990		990	Ⅲ K F O	Ⅱ	1/4	糸織文	胴部	絹糸捺正織文		粗砂粒多量		有 に近い黄褐	遺物多数	
図面243	136	7276		7276	Ⅲ A M 1	Ⅱ	1/4	糸織文	口縁部	糸織文		白色粒含有、赤色粒粒少		有 に近い黄褐	7490-7471	
図面243	137	779		779	Ⅲ A G 1	Ⅱ	1/4	糸織文	胴部	糸織文		白色粒多量、赤色粒粒含有、砂粒粗粒少		有 橙	770-782-773	
図面243	138	7258		7258	Ⅲ A L 1	Ⅱ	1/3	糸織文	胴部	糸織文		白色粒含有、赤色粒粒少、雲母細粒少		有 に近い地		
図面243	139	1222		1222	Ⅲ F B 1	Ⅱ	1/3	糸織文	口縁部	糸織文		白色粒含有、赤色粒粒少、砂粒粗粒少、小石・砂		有 に近い黄褐	1231-1224	
図面243	140	1218		1218	Ⅲ F B 1	Ⅱ	1/3	糸織文	胴部	糸織文		白色粒含有、砂粒粗粒少		有 に近い黄褐	1234	

第54表 セツ渠遺跡 縄文時代土器属性表 (4)

図版番号	No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小名(1/3)	出土層位	スケール	文種	部位	文様構成	特徴	施文内容	胎土	織理	色調(注)	組合・同一個体(整理番号)	備考	
図版243	141	1229		1229	黒F11 S	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文		白色陶粒少量、石英 砂粒少量、砂粒粗粒 含有、0.3~0.4Cm	有	にじみ黄 褐色	1227			
図版243	142	1217		1217	黒F11 3	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文		白色陶粒含有、砂粒 粗粒含有	有	にじみ黄 褐色	1228-1221-1223			
図版243	143	1899		1899	黒AH2 H	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		小石0.1~0.3Cm含 有、白色陶粒少量 、石英陶粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版243	144	1898		1898	黒AG2 O	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒少量、砂 粒粗粒含有、石英 陶粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版243	145	1661		1661	黒F10 8	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文		石英陶粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版243	146	2057		2057	黒AJ1 7	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文		石英陶粒少量、赤 土粒少量	有	灰褐色				
図版243	147	6889		6889	黒JD1 O	II	中	1/3	竹管文	胴部	条痕文		白色陶粒少量、赤 土陶粒少量、石英 陶粒少量	有	にじみ黄 褐色			
図版243	148	2058		2058	黒AJ1 8	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(縦条赤 土)		小石0.6Cm、砂粒 粗粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版243	149	7654		7654	黒AP08	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒少量、砂 粒粗粒含有	有	明黄褐色				
図版243	150	383		383	黒JN0 9	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(斜交文)		白色陶粒含有、赤 土陶粒少量	有	灰黄褐色				
図版243	151	3425		3425	黒FL0 O	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		砂粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版243	152	5399		5399	黒FJ0 9	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒少量、砂 粒粗粒少量	有	明黄褐色				
図版243	153	1362		1362	黒FD0 O	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(斜交文)		砂粒含有	有	明黄褐色				
図版243	154	1293		1293	黒FE1 3	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(八字刺 突)		白色陶粒少量、砂 粒粗粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版243	155	2458		2458	黒AE1 7	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、赤 土含有、黒雲母少 量、小灰少量	有	にじみ黄 褐色			遺物多数	
図版243	156	3799		3799	黒F00 5	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、赤 土陶粒少量、砂粒 粗粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版243	157	2034		2034	黒AJ1 8	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文(赤条赤 土) 横線孔有		砂粒粗粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版243	158	2098		2098	黒AF1 8	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(赤条赤 土)		砂粒粗粒含有	有	にじみ黄 褐色	3543-2010-2036			
図版243	159	2550		2550	黒AF1 4	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、小 石0.7~0.9Cm	有	黄褐色				
図版243	160	850		850	黒AG1 5	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文(赤条赤 土)		砂粒粗粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版243	161	2283		2283	黒FA1 1	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(斜交文)		赤土陶粒少量、白 色陶粒少量	有	黄褐色				
図版243	162	2023		2023	黒AI1 9	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文		石英陶粒少量、赤 土陶粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版244	163	2087		2087	黒AI1 6	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文(赤条赤 土)		砂粒粗粒含有	有	黄褐色	2087			
図版244	164	3427		3427	黒FL0 7	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、砂 粒粗粒含有	有	黄褐色				
図版244	165	1390		1390	黒FG1 O	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文(波状口 縁、赤条赤土)		白色陶粒含有、砂 粒粗粒含有	有	黄褐色	1391			
図版244	166	818		818	黒AG1 3	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、砂 粒粗粒含有	有	にじみ黄 褐色	861			
図版244	167	7004		7004	黒EG1 3	V	中	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		砂粒粗粒含有、小 石0.4Cm	有	にじみ黄 褐色			
図版244	168	7305		7305	黒AK1 1	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、赤 土陶粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版244	169	7706		7706	黒A009	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、砂 粒粗粒含有、小石 0.5Cm	有	にじみ黄 褐色				
図版244	170	7294		7294	黒AL1 3	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、赤 土陶粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版244	171	7311		7311	黒AJ1 1	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒少量、赤 土陶粒含有、砂粒 粗粒含有	有	黄褐色	7469			
図版244	172	5851		5851	黒XT1 5	II	中	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒少量、赤 土陶粒少量	有	黄褐色			
図版244	173	7492		7492	黒AL1 4	II	1/3	条痕文	口縁部	条痕文		白色陶粒含有、赤 土陶粒少量	有	にじみ黄 褐色				
図版244	174	3431		3431	黒FL0 7	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(斜交文)		白色陶粒少量、赤 土陶粒含有、砂粒 粗粒含有	有	にじみ黄 褐色				
図版244	175	2765		2765	黒KF0 3	II	1/3	条痕文	胴部	条痕文(斜交文、 斜上部)		石英陶粒、黒雲母 少量	有	にじみ黄 褐色				

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器属性表 (5)

第14章 セツ栗遺跡

図版番号	No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小名	出土層位	ステータス	文種	部位	文様構成	特徴	施文内容	胎土	織物	色調(外)	総合・同一体(整理番号)	備考
図版244	176	4001		4001	J I O 1	II 中	1/3	赤灰文	尖底部	赤灰文(黒未施)		砂粒細粒少量	有	黄地	4002		
図版244	177	7511		7511	A O 1	II Ⅰ	1/3	縄文	II 縁部	縄文(黒末赤)		石灰、砂粒細粒少量	有	にぶい・黄地	7510、7520同一個体		
図版244	178	177		177	J P O 9	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	縄文(複線)		白色細砂粒少量	有	にぶい・黄地	160・180・187・184、2209・2208・176・171・173・170同一個体		
図版244	179	2009		2009	A I 1	II Ⅰ	1/4	縄文	胴部	菱形羽状縄文		粗い砂粒少量	有	黄地	遺物多数		
図版244	180	7285		7285	A O 1	II 中	1/3	竹管文	(II 縁部)	羽状縄文(黒末口縁)		白色細粒少量、赤色細粒少量	有	にぶい・黄地			
図版244	181	7271		7271	A N 1	Ⅰ	1/3	竹管文	口縁部	羽状縄文(有尾式)		やや粗い砂粒含有	有	黄地	7269・7272・7290・7504・7273		
図版245	182	1303		1303	F F 1	II Ⅰ	1/3	縄文	口縁部	羽状縄文(突起状口縁、ループ文)		砂粒細粒少量	有	黄地			
図版245	183	1648		1648	F G O 7	II Ⅰ	1/3	縄文	口縁部	羽状縄文(ループ文)		砂粒細粒少量	有	にぶい・黄地			
図版245	184	1682		1682	F E O 6	II Ⅰ	1/3	羽状縄文	胴部	羽状縄文(ループ文羽状、LRとE)		砂粒細粒含有	有	黄地			
図版245	185	1493		1403	F Z 1	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	羽状縄文(縄文原付で赤末?)		石灰砂粒細粒少量	有	黄地	1404、1410同一個体		
図版245	186	1415		1415	F P 1	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	羽状縄文		白色細粒少量	有	にぶい・黄地			
図版245	187	982		982	F O 1	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	羽状縄文(細線網)	粗み線	砂粒細粒含有	有	明黄地			
図版245	188	21		21	J O 1	II Ⅰ	1/3	羽状縄文	口縁部	羽状縄文		石灰細粒含有、赤色細粒含有、砂粒細粒含有	有	にぶい・黄地	23		
図版245	189	2032		2032	A J 1	II Ⅰ	1/3	羽状縄文	胴部	羽状縄文(O 遺多赤丸、LR)		白色細粒細粒含有、赤色細粒	有	にぶい・黄地			
図版245	190	250		250	F A 1	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	羽状縄文	LR	白色細粒少量	有	黄地	283		
図版245	191	1011		1011	K E O 2	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	羽状縄文(黒末文E、LR羽状縄文)		黒雲母細粒含有	有	黄地			
図版245	192	178		176	J O 8	II Ⅰ	1/3	縄文	口縁部	羽状縄文(黒末部黒末赤丸) 網織	複線?	細砂粒少量	有	にぶい・黄地			
図版245	193	7286		7286	A O 1	II 中	1/3	赤灰文	口縁部	羽状縄文	R	赤色細粒少量、白色細粒少量	有	明赤地	7288		
図版245	194	3628		3628	F O 4	II Ⅰ	1/3	縄文	底部	羽状縄文(L R O 遺多赤)		白色細粒含有、赤雲母細粒少量、砂粒細粒含有、小石0.3cm 2ヶ	有	明黄地			
図版245	195	1644		1644	F G O 5	II Ⅰ	1/3	縄文	胴部	羽状縄文		石灰細砂粒少量	有	明黄地			
図版245	196	3444		3444	F I O 3	II Ⅰ	1/3	縄文	口縁部	羽状縄文		石灰細粒少量	有	にぶい・黄地	3145		
図版245	197	1014		1014	K E O 2	II Ⅰ	1/3	縄文	口縁部	羽状縄文		石灰細粒少量、黒雲母細粒少量、白色細粒少量、砂粒細粒含有	有	黄地			
図版245	198	347		347	J N O 7	II Ⅰ	1/4	羽状縄文	胴部	羽状縄文		白色細粒含有、赤色細粒含有、砂粒細粒含有	有	黄地	遺物多数		
図版245	199	247		247	F A O 9	II Ⅰ	1/3	竹管文	II 縁部	半截竹管文		白色細粒含有、黒雲母細粒少量	有	黄地			
図版245	200	1538		1538	F C O 9	II Ⅰ	1/3	竹管文	口縁部	半截竹管文		白色細粒含有、黒雲母細粒少量	有	にぶい・黄地			
図版245	201	1342		1342	F C O 9	II Ⅰ	1/3	竹管文	口縁部	半截竹管文		白色細粒含有、赤色細粒含有、黒雲母細粒少量	有	黄地			
図版245	202	147		147	J O 9	II Ⅰ	1/3	竹管文	口縁部	半截竹管文		白色細粒含有、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量	有	黄地			
図版245	203	296		296	F B O 9	II Ⅰ	1/3	竹管文	胴部	半截竹管文(縁部)		白色細粒含有、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量	有	にぶい・黄地	2408・2423・2325同一個体		
図版245	204	2406		2406	F B O 6	II Ⅰ	1/3	竹管文	胴部	半截竹管文		白色細粒含有、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量	有	にぶい・黄地	2325・2423、250同一個体		
図版245	205	2256		2256	F A 1	II Ⅰ	1/3	竹管文	胴部	半截竹管文		白色細粒細粒含有、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量	有	にぶい・黄地			
図版245	206	3042		3042	K H O 1	II Ⅰ	1/4	竹管文	胴部	半截竹管文		粗い白色細粒少量	有	黄地	遺物多数		

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器型式表 (6)

調査番号	No	整理番号	遺構・区分	遺物番号	小片の名称	出土層位	スケール	文様	部位	文様構成特徴	遺文内容	胎土	繊維状	色調(内)	複合・同一個体(整理番号)	備考	
図説245	207	408		408	J P D B F H	Ⅱ	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(波状口縁)		赤色顔料多量、黒炭粉粒少量	有				
図説245	208	2394		2394	R O B	Ⅱ	1/3	赤炭文	胴部	平織竹管文(4織7)		白色顔料少量、黒炭粉粒少量	有	にぶい黄褐色	遺物多数		
図説246	209	5305		5305	X S O B	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(短文織文竹管ⅡC平行)		白色顔料少量、黒炭粉粒少量					
図説246	210	4112		4112	J K O 4	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部			白色顔料含有、黒炭粉粒少量、砂粒含有					
図説246	211	7566		7566	A P I B	Ⅱ乱	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文(有尾式)		白色顔料含有、赤色顔料少量				埋赤地	
図説246	212	5548		5548	V B O B	Ⅱ	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(下格子目)		赤色顔料少量、白色顔料少量、砂粒含有		にぶい黄褐色	5550		
図説246	213	5268		5268	X R O 7	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(隆起付波状口縁)		白色顔料多量、黒炭粉粒少量				灰黄緑	
図説246	214	4639		4639	E A I 9	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(突起ある口縁)		白色顔料多量、赤色顔料含有、砂粒粒状含有		にぶい黄褐色			
図説246	215	3076		3075	K C O D	Ⅱ	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文		白色顔料含有、砂粒粒状含有					
図説246	216	7432		7432	E T I 1	Ⅱ上	1/3	竹管文	底面	平織竹管文(隅太)	RL	白色顔料含有、赤色顔料少量		にぶい黄褐色	983同1個体		
図説246	217	5618		5618	V C O 1	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		白色顔料多量		にぶい赤褐色	5596・5696・5485・5655・5757・5756・5515・5485-5596同1個体		
図説246	218	5603		5603	V C I 0	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文		白色顔料多量、赤色顔料少量					
図説246	219	5345		5345	X T O B	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(波状口縁)		砂粒含有、炭山跡、金雲母顔料含有		にぶい赤褐色	5385・5605・5647・5581		
図説246	220	8764		8764	V B I 3	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		白色顔料多量、粗粒		にぶい赤褐色	5655・5757・5656・5515・5485-5596同1個体		
図説246	221	5366		5366	V A O B	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(波状口縁)		白色顔料含有、炭山跡、粗粒多量に含有	有				
図説246	222	6267		6267	J K O 1	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文		砂粒少量、黒炭粉粒少量				灰褐色	
図説246	223	5418		5418	X T I 1	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		砂粒含有、0.30mm以下0.30mm片状		にぶい赤褐色	5419・5522・5418・5417		
図説246	224	5719		5719	V E I 2	Ⅱ中	1/6	竹管文	口縁部	平織竹管文(波状口縁)		金雲母多量	有	暗褐色	遺物多数		
図説247	225	364		364	F B O B	Ⅱ	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文		白色顔料多量、赤色顔料含有、右側顔料含有		にぶい黄褐色	2433		
図説247	226	5608		5608	V C I 0	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		白色顔料含有		にぶい赤褐色	5616・5612・5634・5642・5640・5638・実測番号466同1個体		
図説247	227	5640		5640	V D I 1	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		白色顔料含有		にぶい赤褐色	5608・5616・5612・5634・5631・5632・5638・実測番号466同1個体		
図説247	228	5637		5637	V D I 1	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		黒炭粉粒含有		にぶい黄褐色	5328・5267・5637・5270同1個体		
図説247	229	5465		5465	X T I 2	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文(一部RL織文)	RL	白色顔料多量、赤色顔料少量		にぶい黄褐色	5710・5512・5313・5312・5709・5704		
図説247	230	5267		5267	X R O 7	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		黒炭粉粒含有、小石0.4cm(2ヶ)				5328・5270・5637同1個体	
図説247	231	5475		5475	X T I 1	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文(波状口縁)		白色顔料少量、赤色顔料少量、砂粒含有		にぶい黄褐色			
図説247	232	5666		5666	V C I 0	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文(縁織)		黒炭粉粒含有					
図説247	233	5602		5602	V C I 0	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文(平行波織)		黒炭粉粒含有					
図説247	234	5312		5312	X S O 9	Ⅱ中	1/3	竹管文	胴部	平織竹管文		黒炭粉粒含有		にぶい黄褐色			
図説247	235	6081		6081	J K O 3	Ⅱ上	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文		白色顔料含有、赤色顔料少量、黒炭粉粒少量		にぶい黄褐色			
図説247	236	5648		5648	V B O B	Ⅱ中	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(筋文)		白色顔料含有、赤色顔料少量				灰黄緑	
図説247	237	4464		4464	J D O B	Ⅱ下	1/3	竹管文	口縁部	平織竹管文(縦に平織竹管文)		白色顔料多量、赤色顔料少量				灰黄緑	

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器属性表(7)

第14章 セツ渠遺跡

図版番号	No.	発掘番号	遺構・区分	遺物番号	小字・付名	出土層位	スタイル	文種	部位	文様構成・特徴	土質内容	土質	色調(灰)	組合・同一群(整理番号)	備考
図版217	238	5764		5764	I X T 1 0	II 中	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文(縦に平截竹管文)	白色細粒少量、赤色細粒多量	にぶい	黄		
図版217	239	5569		5260	I X R 0 7	II 中	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文(筋骨文)	白色細粒含有、砂粒粗粒含有	にぶい	黄		
図版217	240	5169		5169	I Y B 0 8	II 上	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文(縦に平截竹管文)	砂粒粗粒多量、黒雲母細粒少量、赤色細粒少量	にぶい	黄		
図版217	241	5501		5501	I Y A 1 1	II 中	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文(縞線状文)	白色細粒含有、赤色細粒含有、砂粒含有	にぶい	黄		
図版217	242	6249		6249	II E H 2 0	II 下	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文	白色細粒多量、赤色細粒含有	にぶい	黄	6277	
図版217	243	4081		4081	II J G 0 6	II 中	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文	白色細粒多量、赤色細粒含有、黒雲母細粒少量、砂粒細粒少量	にぶい	黄		
図版217	244	5290		5290	I X S 0 7	II 中	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文(把下状突起の口縁)	白色細粒少量、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量、砂粒細粒含有	にぶい	黄		
図版217	245	2429		2429	II F C 0 8	II	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文	白色細粒含有、赤色細粒含有、黒雲母細粒少量	にぶい	黄		
図版217	246	5382		5382	I X T 1 0	II 中	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文	赤色細粒少量、白色細粒少量、砂粒含有	黄			
図版217	247	6288		6288	II E I 1 9	Va上	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文	白色、赤色細粒含有、砂粒少量、黒雲母細粒少量	黄			
図版217	248	2890		2890	II K H 0 2	II	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文	赤色細粒少量、白色細粒少量	黄			
図版217	249	5181		5181	I Y D 0 9	II 上	I/3	竹管文	胴部	平截竹管文(瓦地文、筋骨文*)	白色、赤色細粒含有、砂粒細粒少量、黒雲母細粒少量	にぶい	黄		
図版217	250	1648		1648	II F G 0 5	II	I/3	竹管文	口縁部	平截竹管文(筋骨文)	白色細粒多量、赤色細粒含有、黒雲母細粒少量	黄			
図版217	251	361		351	II J O 0 3	II	I/3	竹管文	胴部	平截竹管文(縞文)	白色、赤色細粒含有、砂粒細粒含有	黄	352・355		
図版217	252	1614		1614	II F E 0 6	II	I/3	竹管文	胴部	平截竹管文(筋骨文)	白色細粒含有、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量	にぶい	黄		遺物多量
図版218	253	5204		5204	I X Q 0 8	II 中	I/4	竹管文	口縁部	平截竹管文	白色粒多量、粗粒	明黄			遺物多量
図版218	254	306		306	II F C 0 9	II	I/4	竹管文	口縁部	平截竹管文	小石含有、細砂粒含有	灰褐			遺物多量
図版218	255	4071		4071	II J G 0 5	II 中	I/4	竹管文	口縁部	平截竹管文(筋骨文、縞文)	白色細粒多量、赤色細粒含有、砂粒細粒含有、小石0.5cm(2ヶ)	にぶい	黄		遺物多量
図版218	256	3091		3091	II K G 0 4	II	I/4	竹管文	胴部	平截竹管文(縞文)	白色砂粒多量、石灰まじり	赤褐			遺物多量
図版219	257	3272		3272	II F B 0 3	II	I/4	縄文	口縁部	前期縄文 R I 縄文	砂粒多量	有	にぶい		遺物多量
図版219	258	1020		1020	II K F 0 2	II	I/4	縄文	口縁部	前期縄文	白色細粒少量、赤色細粒含有、砂粒細粒含有	増赤黄			遺物多量
図版219	259	495		495	II F B 0 5	II	I/4	縄文	胴部	前期縄文	粗粒砂粒多量	黒褐			遺物多量
図版219	260	592		592	II F C 0 2	II	I/4	縄文	口縁部	前期縄文	白色細粒多量、赤色細粒含有、黒雲母細粒含有	黄			遺物多量
図版219	261	1483		1483	II F H 0 9	II	I/4	縄文	高部	前期縄文	白色細粒含有、赤色細粒少量、黒雲母細粒少量	明黄緑			遺物多量
図版219	262	3260		3260	II F B 0 4	II	I/4	縄文	胴部	前期縄文	粗粒砂粒多量	にぶい	黄		遺物多量
図版219	263	3211		3211	II F E 0 9	II	I/3	縄文	口縁部	前期縄文	白色細粒少量、砂粒粗粒含有	黄			3209・3210・2977・3030・2417・2418
図版219	264	4568		4568	II J I 0 4	II 下	I/3	縄文	口縁部	前期縄文	赤色、白色細粒少量、砂粒粗粒含有	灰褐			4568
図版219	265	1363		1363	II F C 1 0	II	I/3	縄文	口縁部	前期縄文	白色微細粒少量、赤色細粒少量	にぶい	黄		1354
図版219	266	4481		4481	II J D 0 1	II 下	I/3	縄文	口縁部	前期縄文	赤色細粒少量、砂粒含有	黄			
図版219	267	4015		4015	II J H 0 6	II 中	I/3	縄文	口縁部	前期縄文	白色細粒少量、赤色細粒少量、砂粒粗粒多量	黄			

第54表 セツ渠遺跡 縄文時代土器属性表 (8)

図録番号	No	整理番号	遺構・遺物区分	遺物番号	小が「1」が「名」	出土層位	スケール	文種	部位	文様構成特徴	施文内容	胎土	編織痕	色調(弁)	組合・同一個体(整理番号)	備考
図録249	268	2285		2285	J P O II	II	1/4	縄文	胴部	残存縄文	紅胎赤縄文	白色細粒含有、砂粒細粒含有	横		遺物多岐	
図録249	269	1692		1692	W F C O 7	II	1/3	縄文	底部	残存縄文	紅	砂粒粗粒多量、白色細粒含有	横	3356・3358・3359		

第54表 セツ栗遺跡 縄文時代土器属性表 (9)

(2) 石器 (図版251~256、第55表、第56表)

本遺跡の石器器種別の出土数は第55表のとおりである。やや多いのは凹石が58点、特殊磨石が23点である。剥片類も100点あまり出土している。

1 石鎌 (A H) (1~8)

1~7は凹基無茎鎌である。6は脚が長く、形態から縄文時代晩期の石鎌と思われる。7は大型鎌の先端が欠損したものである。形態から縄文時代前期の石鎌と思われる。8は平基有茎鎌の基部が欠損したものである。縄文時代後半期の石鎌と思われる。その他の石器も形態の特長から縄文時代前半期の石鎌と思われる。石材は2が珪質凝灰岩製、8が無斑晶安山岩製、他は黒曜石製である。

2 石錐 (D r) (9・10)

2点とも黒曜石製である。9は三角鎌の先端を石錐として加工されている。異形石器の先端を石錐として加工している。

3 楔形石器 (P e) (11~13)

11は楔形石器で曾根型石核である。12は原礫面を残す縦長剥片の両極に剥離がある。13が玉髓製、他が黒曜石製である。

4 2次加工のある剥片 (R F) (14)

不定形な剥片の打面部に剥離を施し石錐のような先端部を作成している。石錐であろうか? 石材は無斑晶安山岩である。

5 石匙 (15~19)

全点横型の石匙である。15~17は摘みが中央部についている。石材は15が珪質凝灰岩製、16がチャート製、17・18が無斑晶質安山岩製、19が頁岩製である。縄文前期の石器と思われる。

6 磨製石斧 (20・21・23)

20は頭部のみ磨製石斧である。20・23は同型の石斧と思われる。23は短冊形の磨製石斧である。刃部が欠損しているが帳場の石斧と思われる。頭部には敲打痕が残っており、楔としても利用されたと思われる。21は小型の短冊形の石斧である。頭部が欠損している。22は凝灰岩製、他は蛇紋岩製である。

7 凹石 (P s) (24~39)

本遺跡の凹石はA円礫を素材としたものとB角礫あるいは亜角礫を素材としたものとC敲石としても利用したものの3種類に分類される。更に凹の位置で細分類される。全点安山岩製である。

A 円礫を素材としたもの (1~32)

第1類 表裏両面に凹のあるもの (24~27)

第2類 表裏と一側面に凹のあるもの (30・31)

この類の素材の円礫は歪みの多い礫である。

第14章 セツ渠遺跡

第3類 表裏と両側面に凹のあるもの (28・29)

この類の素材の円礫は歪みの多い礫である。

第4類 表裏に長軸中央に多数の凹のあるもの (32)

B 角礫・亜角礫を素材としたもの (33~38)

第1類 平坦な表面だけに凹のあるもの (33・34・36)

第2類 平坦な表裏面に凹のあるもの (35・37・38)

C 敲石としても利用したもの (39・40)

第1類 棒状の礫を利用した敲石の平坦面に凹のあるもの (39)

第2類 平坦な円礫の中央部に敲打痕状のわずかな凹面のあるもの (40)

8 敲石 (Ha) (22・41・42・47)

22は扁平な円礫の先端部を敲打面としている。頁岩製である。41・42・47は棒状の先端部を敲打面としている。41・42は砂岩製、47は安山岩製である。41は平坦面まで敲打痕が及んである。47は長軸一側辺を磨り面としている特殊磨石を再利用している。

9 磨石 (GS) (43・44)

扁平な円礫の平坦面を磨り面としている。安山岩製である。

10 特殊磨石 (45・46・48・49)

本遺跡の特殊磨石は2種に分類される。

第1類 楕円形の長軸側縁一方を磨面とするもの。断面三角形の頂点部分を磨面とする (45・46・48)。

第2類 三角形で断面が卵形の底側縁部分を磨面とするもの (49)。

11 石皿 (SD) (50)

本遺跡の石皿は約1/2が欠損しているが、現重量約10kgであり、大変大形である。形態は内外に凹面をもつ厚い亜角礫を用いている。周縁には平らな縁があり、その面に凹石として利用した径約20mmの凹が内外の外周に巡っている。発火具としての火きり臼として用いたか、あるいは木の実を割る際に用いた凹石面と思われる。石材は安山岩である。凹面はロート状のものが多く。

本遺跡での石器の分布は、図版250に示した。石鏃は遺跡南側の土坑列に沿って出土している。磨製石斧は南東側の縄文前期土器の分布する地点 (図版235) に分布する。特殊磨石は調査区南側から東側にかけての岸縁辺部に分布し、条痕文の土器分布 (図版235) と類似する。

器種名	Po	AH	Pe	Dr	Es	Sc	NS	RF	UF	Co	Fl	Ch	打製石斧	磨製石斧	特殊磨石	Ps	GS	Ha	SD	磨石原石	原石	その他	合計
石器数	2	10	9	2	1	16	5	9	6	12	71	28	3	5	23	58	11	6	8	2	1	6	294

第55表 セツ渠遺跡 縄文時代石器組成表

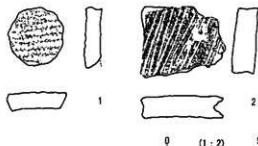
図版番号	No	整理番号	遺物区分	遺物番号	小字付名	山名	土位	スケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	遺存度	欠損部位	備	考
図版251	1	2688		2688	Ⅱ K G O 4	Ⅱ	3/4 AH	0b			20	14	4	0.77	100			
図版261	2	7638		7638	Ⅱ J N O 6	Ⅱ中	3/4 AH	ST			20.8	13	4	0.6	100			
図版261	3	2240		2240	Ⅱ J O O 9	Ⅱ	3/4 AH	0b			20	13	2	0.94	75			
図版251	4	1433		1433	Ⅱ F F 1 2	Ⅱ	3/4 AH	0b			17.5	13	3.5	0.63	100			
図版251	6	3839		3839	Ⅱ A 1 1 B	Ⅱ	3/4 AH	0b			19	12	3.5	0.45	76			
図版251	6	7814		7814	Ⅱ A H O 9	Ⅱ	3/4 AH	0b			23	14	2.5	0.69	75	長さ		
図版251	7	4604		4604	Ⅱ J Ⅱ O 2	Ⅱ上	3/4 AH	Ge						1.12	50			
図版251	8	8370		8370	Ⅱ J L O 3	Ⅱ中	3/4 AH	An										

第56表 セツ渠遺跡 縄文時代石器属性表 (1)

図版番号	No	整理番号 遺構・区分	遺物番号	小字付名	出所	土位	スケール	器種	材質	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	遺存数	欠損部位	備考
図版251	9	7641	7641	ⅢAQ10	Ⅲ	3/4	Ⅱc	Ch	Ob	25	13	7	1.15	100		
図版251	10	1999	1999	ⅢA117	Ⅲ	3/4	Ⅱc	Ob	Ob	23	23	8.5	2.66	100		
図版251	11	3854	3854	ⅢF102	Ⅲ	3/4	Ⅱc	Ob	Ob	23	12	7.5	2.04	100		
図版251	12	2708	2708	ⅢKGO5	Ⅲ	3/4	Ⅱc	Ch	Ob	58	18	7.5	9.32	100		
図版251	13	6355	6355	ⅢJH03	Ⅲ中	3/4	Ⅱc	Ca	Ja	31	23	7	5.1	100		
図版251	14	7541	7541	ⅢJ003	Ⅲ中	3/4	Ⅱc	An	Ca	43	27	7	6.01	70	破	
図版252	16	3293	3293	ⅢFD03	Ⅲ	1/2	ⅡS	ST	ST	42	60.5	8	16.41	100		
図版252	16	5295	5295	ⅢXS07	Ⅲ中	1/2	ⅡS	Ch					10.47			
図版252	17	4911	4911	ⅢDM12	Ⅲ下	1/2	ⅡS	An					10.88			分布は3と区別されるが、石版であるため、ブロックからはずす。
図版252	18	2428	2428	ⅢFB06	Ⅲ	1/2	ⅡS	An		33	56	8	11.87	100		
図版252	19	5552	5552	ⅢYB08	Ⅲ中	1/2	ⅡS	Sh					10.88			
図版252	20	678	678	ⅢFB03	Ⅲ	1/2	ⅡS	Se	磨製石片	59	54	21.5	89.12	50	長さ・幅・厚さ	
図版252	21	392	392	ⅢJP07	Ⅲ	1/2	ⅡS	Se	磨製石片	43	16	7	7.89	100		長さ
図版252	22	7787	7787	ⅢAJ10	Ⅲ乱	1/2	ⅡS	Sh		53	41	11	34.25	100		
図版252	23	2303	2303	ⅢFA05	Ⅲ	1/2	ⅡS	Ta	磨製石片	150	62	37	690	75	長さ	
図版253	24	3695	3695	ⅢKGO7	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	108	63	25	201.78	100		
図版253	25	3681	3681	ⅢKGO7	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	96	86	35	341.78	100		
図版253	26	394	394	ⅢJP07	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	103	62	28	209.48	100		
図版253	27	3547	3547	ⅢAM18	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	62	62	41	148.67	100		
図版253	28	5098	5098	ⅢECO2	Ⅲ下	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	83	64	43	206.14	100		
図版253	29	2168	2168	ⅢAM19	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	90	65	45	307.5	100		
図版253	30	875	875	ⅢAF12	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	90	63	40	257.68	100		
図版253	31	3081	3081	ⅢKE04	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	108	73	45	388.02	100		
図版253	32	916	916	ⅢKE07	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	160	70	42	517.48	100		
図版254	33	2479	2479	ⅢFC08	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	111	47	35	182.7	50	幅	
図版254	34	1381	1381	ⅢFD12	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	108	68	59	365.53	25	長さ・幅・厚さ	残っている
図版254	35	66	66	ⅢJO16	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	84	91	47	370	25	長さ・幅・厚さ	
図版254	36	2551	2551	ⅢKF06	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	102	76	48	320.4	100		
図版254	37	2078	2078	ⅢAK18	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	117	74	56	473.64	100		
図版254	38	3896	3896	ⅢAK20	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	103	87	54	650.16	100		
図版254	39	1028	1028	ⅢKGO1	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	148	88	26	250.80	100		
図版254	40	7986	7986		Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	59	47	22	76.7	0		
図版254	41	2101	2101	ⅢAK15	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	112	38	20	142.56	100		
図版254	42	2340	2340	ⅢFA07	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	118	47	22	227.7	100		残っている
図版255	43	1270	1270	ⅢFD14	Ⅲ	1/3	ⅡS	GS	安山岩	77	67	21	149.91	100		
図版255	44	8092/2801	81		不明	1/3	ⅡS	GS	安山岩	110	98	48	650	0		
図版255	45	3914	3914		1/3	ⅡS	特殊磨石	Sa		160	65	65	664.95	100		遺跡(1-1)区一層厚なので確認なし。
図版255	46	1706	1706	ⅢGO1	Ⅲ	1/3	ⅡS	特殊磨石	Sa	162	74	82	903.72	100		
図版255	47	2872	2872	ⅢKH03	Ⅲ	1/3	Ⅱc	Pa	安山岩	130	69	35	396.21	100		
図版255	48	840	840	ⅢAH14	Ⅲ	1/3	ⅡS	特殊磨石	安山岩	163	84	58	1036.94	75	長さ	
図版255	49	1879	1879	ⅢAH18	Ⅲ	1/3	ⅡS	特殊磨石	Sa	180	93	65	1237.02	100		タタキ石を兼ねる
図版256	50	7586	7586	ⅢAD11	Ⅲ中	1/4	ⅡS	ⅡPa	安山岩	373	242	113	19090	50		

第56表 セツ栗遺跡 縄文時代石器属性表 (2)

(3) 土製品 (第42図)



1と2は前期後半の土器片の外周を打ち割って外周を磨り、1は円形、2は方形にしている。土鏝のような溝はなく、用途不明である。

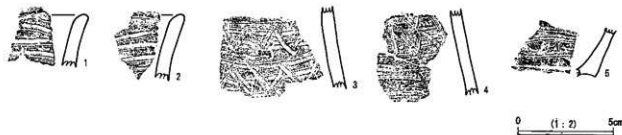
引用文献

第42図 セツ栗遺跡 縄文時代土製品

長野県考古学会縄文時代(早期)部会編 1997 『シンボジウム 押型文と沈線文 本編』

第3節 弥生時代遺物

土器 (第43図1~5)



第43図 セツ渠遺跡 弥生時代土器

1~5は同一個体の壺形土器片である。胎土は細かい砂粒含む、浅黄褐色の土器である。粟林式の土器は櫛齒状工具による波状文を施文するが、本遺跡の土器は纖維束で波状文施文したと思われる。口縁部は横方向に数本施文して、頸部は横方向に施文した上に波状文を数本巡らせている。5は底部の破片であるが底部まで横方向に施文されている。施文方法は、器面を動かさず手を動かす手法である。本遺跡では弥生時代の遺物は、この1個体のみである。出土地点は調査区南西側のⅡ-Ⅱ2区から出土している。弥生時代中期の粟林式土器より古い中期前半の新諏訪町併行期の土器と思われる。

標記番号	標記No	発掘層分	実測番号	遺物番号	小グリッド	層位	スケール	文	横	部位	種	原	色	面	胎土	同一個体・組合(整理番号)	備考
第43図	1	4630	1001	4630	ⅡJ E 0 4	1下	1/2	縦線?波状文 施文	口縁部	同上	繊維束工具(あるいは櫛状工具小口)による施文 内面磨き	褐色	黒緑な 砂粒少 量	同上	同上	4119・4120・ 4122・4124・ 4125・4365・ 4430・4475・ 4476・4530・ 4533・4536・ 4538・4561	新南東中継村布 袋A地点出土土器 に類似 弥生中 期初頭
第43図	2	4538	1001	4538	ⅡJ E 0 3	1下	1/2	縦線?波状文 施文	口縁部	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第43図	3	4124	1001	4124	ⅡJ E 0 4	Ⅱ上	1/2	縦線?波状 文・波状文施 文	頸部	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第43図	4	4536	1001	4536	ⅡJ K 0 4	1下	1/2	縦線?波状 文・波状文施 文	底部	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第43図	5	4476	1001	4476	ⅡJ E 0 4	Ⅱ中	1/2	縦線?波状文 施文	底部	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

第57表 セツ渠遺跡 弥生時代土器属性表

第4節 平安時代の遺構と遺物

1 遺構 (図版257~261)

(1) 住居址

S B 01 (図版257)

調査区の南東側のⅢ-F区で検出面。規模4.55×4.5m深さ30cm形状は方形である。覆土上面に礫が集積していた。竈は南東コーナーにあったものと思われるが、破壊されていた。柱穴は南側に集中しているが、土坑は竈の両側に1基づつ(SK2・3)と中央部分に1基(SK01)検出。中央部分に貼り床が認められる。遺物は土師器の内黒釉が出土している。また床面から鉄滓や鐵灰が出土。SK01から鉄滓が出土しており、鉄鍛冶に関係する住居址と思われる。

SB02 (図版258)

調査区の南側のⅢ-F区で検出。検出面はⅡ層中位である。規模は4.45×4.2m、深さ34cm。形状は歪な方形である。中央部分に貼り床が認められる。竈は東コーナーで、両脇に土坑のような楕円状の穴P02・P03があり、北壁のP01も土坑のような楕円状である。遺物は土師器甕、杯、鉄滓が出土している。

SB03 (図版259)

調査区1-Y区検出面Ⅱ層中より検出。南東半分攪乱されていた。規模は7.84×5.8m深さ62cmの大形住居址で、長方形である。覆土南東部分の攪乱を除くと黄橙色の貼り床面が直接検出された。竈は検出されなかったが南東付近に焼土が多く、この付近に竈があったものと思われる。柱穴は23本確認され、壁面四隅とその間の1本ずつの計6本と、住居内中央に4本が主柱穴と思われる。土坑は、住居南面に偏って6基検出された。遺物は鉄製品や鉄滓、土師器甕や杯などのほか墨書土器が出土している。

SB04 (図版260)

調査区北側Ⅱ-D区で検出。検出面はⅠ層下部からⅡ層上部である。規模4.25×3.75m深さ10cmで、住居址の北側に攪乱されたところがあり、奥道により上面もほとんど破壊されている。竈は検出されなかったが、火床のある南側コーナーに竈があったとわかる。柱穴はP05のみで、他のP1～P04は竈の回りの浅い土坑と思われる。貼り床は住居内全面で確認された。遺物は土師器片が出土しているのみである。

SB05 (図版260)

調査区中央部のⅡ-E区で検出した。検出面はⅠ層下部～Ⅱ層上部である。東側は耕作による攪乱のため、不明である。規模は2.75×2.5m、深さ10cmで、攪乱のため歪な方形の住居址である。貼り床と思われる竈から中央部まで、にがひ橙色の粘土で固められていた。趣向は西側壁面に検出された。竈は検出されなかったが、火床のある南側コーナーに竈があったとおもわれる。柱穴はなく、土坑のような穴が2基確認された(SK01・SK02)。遺物は土師器が数点検出されたのみである。

SB06 (図版260)

調査区南東側Ⅲ-A区で検出した。検出面はⅡ層上部で確認。規模3.74m×2.65mの長方形で、貼り床は南西壁付近である。周溝も西側で検出された。住居の上を農業用道路がとおっていたため、覆土が17cmしか残存していなかった。竈は検出されなかったが、火床のある南東側コーナーに竈があったとわかる。柱穴は南壁中央で1基確認したが、他には検出されなかった。遺物は土師器片のみである。

遺構名	遺構番号	遺構・区分	規模(m)	深さ(m)	カマド位置	周溝有無	残存部位	残存率(%)	ピット数	土坑数	備考
SB01	SB01	ⅢP03	4.55×4.50	30	南東	有		100	10	3	
SB01		P1	0.18×0.18	44							
SB01		P2	0.20×0.20	38							
SB01		P3	0.18×0.18	31							
SB01		P4	0.22×0.20	35							
SB01		P5	0.38×0.28	26							
SB01		P6	0.24×0.24	17							
SB01		P7	0.15×0.16	12							
SB01		P8	0.40×0.24	20							
SB01		P9	0.43×0.37	30							
SB01		P10	0.16×0.16	19							
SB01		SB01	1.12×0.82	18							
SB01		SB02	0.66×0.40	24							
SB01		SB03	0.76×0.60	26							
SB02	SB02	ⅢP09	4.45×4.02	34	南	有			5	0	
SB02		P1	1.00×0.80	20							
SB02		P2	0.96×0.56	12							
SB02		P3	0.46×0.38	26							
SB02	SB03	ⅢP18	7.84×5.58	62	南東	有		100	23	6	

第58表 セツ栗遺跡 平安時代住居址属性表 (1)

第14章 セツ栗遺跡

遺跡名	遺跡番号	遺構・区 分	規模(m)	長さ(m)	コマド位置	内溝有無	積存層位	残存率 (%)	ピット数	土坑数	備 考
SB03		P1	0.30×0.30	28							
SB03		P2	0.28×0.24	46							
SB03		P3	0.32×0.30	39							
SB03		P4	0.34×0.30	44							
SB03		P5	0.30×0.28	49							
SB03		P6	0.28×0.26	39							
SB03		P7	0.24×0.22	26							
SB03		P8	0.28×0.20	46							
SB03		P9	0.25×0.24	18							
SB03		P10	0.24×0.20	61							
SB03		P11	0.50×0.42	14							
SB03		P12	0.30×0.24	33							
SB03		P13	0.72×0.64	48							
SB03		P14	0.40×	24							
SB03		P15	0.65×	41							
SB03		P16	0.20×0.24	28							
SB03		P17	0.20×0.20	16							
SB03		P18	0.44×0.31	25							
SB03		P19	0.30×0.19	15							
SB03		P20	0.32×0.25	11							
SB03		P21	0.28×0.26	12							
SB03		P22	0.23×	9							
SB03		P23	0.18×0.16	14							
SB03		SK01	2.00×1.00	21							
SB03		SK02	0.88×0.82	25							
SB03		SK03	0.65×0.56	20							
SB03		SK04	0.84×0.82	23							
SB03		SK05	1.20×	10							
SB03		SK06	0.80×	24							
SB04	SB04	II-D	4.25×3.75	10	北	有		6			コマド破壊
SB04		P1	0.48×0.48	16							
SB04		P2	0.94×0.60	26							
SB04		P3	0.84×	26							
SB04		P4	0.62×0.50	20							
SB04		P5	0.6×0.50	32							
SB05	SB06	II-E	2.75×2.50	10	南	一部有		100	2		
SB05		P1	0.78×0.65	14							
SB06		P2	0.28×0.24	16							
SB06	SB06	III-A	3.75×2.25	17	南東	一部有		100			コマド破壊
SB07	SB07	III-A	3.30×		北	なし	東南		2		コマド破壊
SB07		P1	0.44×0.44	30							
SB07		P2	0.34×0.32	45							
SB07	SK01		0.80×	34							
SB01		P1~P9	2.28×0.28	40					9		I Y16
SB01		P1	0.30×0.24	17					27		I Y17 I Y21 I Y22 ⅡB1
SB01		P2	0.14×0.14	9							
SB01		P3	0.22×0.20	21							
SB01		P4	0.20×0.18	27							
SB01		P5	0.18×0.18	15							
SB01		P6	0.23×0.24	24							
SB01		P7	0.16×0.14	10							
SB01		P8	0.22×0.20	21							
SB01		P9	0.24×0.22	16							
SB01		P10	0.81×0.20	12							
SB01		P11	0.20×0.20	16							
SB01		P12	0.28×0.24	27							
SB01		P13	0.18×0.18	20							
SB01		P14	0.38×0.35	29							
SB01		P15	0.30×0.18	8							
SB01		P16	0.24×0.24	19							
SB01		P17	0.22×0.20	28							
SB01		P18	0.30×0.24	24							
SB01		P19	0.22×0.20	10							
SB01		P20	0.22×0.22	9							
SB01		P21	0.24×0.22	43							
SB01		P22	0.20×	17							
SB01		P23	0.15×	6							

第58表 セツ栗遺跡 平安時代住居址属性表 (2)

遺構名	遺構番号	遺構・区分	周長(m)	深さ(m)	カマド位置	周壁有無	残存幅(m)	残存率(%)	ピット数	土坑数	備考
SA01		P24	0.26×0.22	13							
SA01		P25	0.23×0.18	11							
SA01		P26	0.26×0.18	13							
SA01		P27	0.32×0.30	22							

第58表 セツ栗遺跡 平安時代住居址属性表 (3)

SB07 (図版258)

調査区東側Ⅲ-A区で検出。検出面Ⅱ層中である。規模一辺3.3mの方形と思われる。東壁を残し、水道管工事により破壊されている。覆土は床面しか確認されなかった。竈は火床の存在から南東側コーナーと思われる。柱穴はP01・P02しか確認されなかった。土坑も竈の北側で検出した。遺物は土師器など。

(2) 建物址

ST01 (図版261)

調査区北東側日向林B遺跡内のI-Y区から検出した。検出面はⅢ層である。規模径28cm前後、深さ約40cmの柱穴列である。柱穴は10本で、柱穴の間隔は約2.4mと約3.2mで、3本づつ3列並び、1本変則的に列から出る。出土遺物はない。

(3) 欄列

SA01 (図版261)

ST01に隣接する東側で検出し、日向林B遺跡との境界部分I-Y区である。検出面はⅢ層上面から検出した。径20cm前後、深いところで43cm、浅いところで5cmの深さの欄列である。長さ約20m、各ピットの間隔は約2.4mである。立て替えか、数列の欄列が存在した形跡がある。27本の柱穴確認している。出土遺物ない。

2 遺物 (図版262～264)

(1) 住居内遺物

SB01 (図版262—1～16)

1～13は土師器である。1～3は杯、4～6が碗で、5のみ黒色処理されていない。6には2本1単位の螺旋状の暗文が「十」字に描かれている。5は「十」に1本の線の暗文が描かれている。8は黒色処理をされた小型甕である。7・10も小型甕、10・11はロクロ甕で、胴部にタタキメがある。12は羽釜、13は甎で、12と13は同一個体の可能性がある。14～16は鉄製品で、14は鉄鎌、16は鉄先である。16は「U」に近いU字状である。15は欠損しており器種がはっきりしないが、火付け金具の可能性がある。

SB02 (図版262—17～20)

17～19は土師器で、17は杯、18・19は平底の小型甕、20は甎である。

SB03 (図版263—21～41)

24の須恵器を除く21～39は土師器である。21～29は杯、30～38は碗、39は小型甕である。40・41は鉄製の紡錘車である。40は紡軸、41は径約5cmの紡輪である。

SB04 (図版263—42～44)

42～44は土師器である。42は杯、43は黒色処理された碗、44は小型甕である。

SB05 (図版264—45～48)

45～56は土師器である。45は杯、46は黒色処理された碗、47は小型甕、48は墨書土器であるが、文字は不明である。

SB06 (図版264—49~56)

49~56は土師器である。49~54は杯、55は黒色処理された碗、56はタタキメのあるロクロ甕である。

SB07 (図版264—57~58)

57は土師器杯、58は土師器甕である。

(2) 遺構外遺物 (図版264—59~61)

59・60土師器杯、61は鉄製の断面方形の釘である。

以上のようにSB01~SB07の出土遺物は平安時代の様相を示していると思われる。また、住居址の竈を住居のコーナーに作ること、鉄器の鍛先など、平安時代中葉から後葉にかけての様相をしていると思われる。

図版番号	図版 No	遺構・K 分	実測番号	スケール	類別	器種	色調(外)	色調(内)	胎土	附文	口径cm	底径cm	器高cm	備考
図版262	1	SB01	5008	1/4	土師器	杯	明赤褐色	明赤褐色	砂粒やや多き やや粗い		12	6	3.8	
図版262	2	SB01	5007	1/4	土師器	杯	にぶい褐色	にぶい褐色	砂粒少 きめ細か 量		13.8	5.8	3.8	
図版262	3	SB01	5006	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒少 きめ細か 量		11.8	4.8	3.4	
図版262	4	SB01	5012	1/4	土師器	内黒陶	にぶい褐色	黒褐色	砂粒やや多き やや粗い		7.3	3.8	6.0	
図版262	5	SB01	5013	1/4	土師器	碗	褐色	褐色	砂粒やや多き やや粗い		7	3.1	6.85	
図版262	6	SB01	5009	1/4	土師器	内黒陶	褐色	黒褐色	砂粒少 きめ細か 量	有 ワ	14.4	8.6	5.3	
図版262	7	SB01	5001	1/4	土師器	甕	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	小石含有 砂粒多 量		12.4	6	13	
図版262	8	SB01	5010	1/4	土師器	内黒小型甕	明赤褐色	黒褐色	小石含有 砂粒多 量		10.6	7	12.4	
図版262	9	SB01	5011	1/4	土師器	小型甕	にぶい赤褐色	褐色	小石含有 砂粒多 量		5.5			
図版262	10	SB01	5002	1/4	土師器	甕	褐色	にぶい褐色	小石含有 砂粒多 量		16.4			
図版262	11	SB01	5005	1/4	土師器	甕	褐色	褐色	小石含有 砂粒多 量		22			
図版262	12	SB01	5003	1/4	土師器	甕	にぶい褐色	褐色	小石含有 砂粒多 量		22.6			
図版262	13	SB01	5004	1/4	土師器	甕	褐色	褐色	小石含有 砂粒多 量				15	
図版262	14	SB01	5025	1/2	鉄	釵								
図版262	15	SB01	5026	1/2	鉄	不明								
図版262	16	SB01	5019	1/4	鉄	釵								
図版262	17	SB02	5014	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒少 きめ細か 量		11.6	4.8	5.2	
図版262	18	SB02	5016	1/4	土師器	甕	にぶい赤褐色	褐色	小石含有 砂粒多 量			7.2		
図版262	19	SB02	5017	1/4	土師器	甕	褐色	にぶい黄褐色	小石含有 砂粒多 量			6.0		
図版262	20	SB02	5015	1/4	土師器	甕	褐色	褐色	小石含有 砂粒多 量					
図版262	21	SB03	5020	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒少 きめ細か 量		11	4.7	3.4	
図版262	22	SB03	5021	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒少 きめ細か 量		11.2	5.9	4	
図版262	23	SB03	5029	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒少 きめ細か 量		10.5	4	3.6	
図版262	24	SB03	5027	1/4	土師器	杯	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色顔含む きの 細か 色調灰色		12	4.4	3.8	
図版262	25	SB03	5025	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒やや多き やや粗い		12.6	4.6	3.6	調査
図版262	26	SB03	5022	1/4	土師器	杯	黄褐色	黄褐色	砂粒少 きめ細か 量			5.8		調査
図版262	27	SB03	5023	1/4	土師器	杯	褐色	褐色	砂粒少 きめ細か 量					文字資料
図版262	28	SB03	5024	1/4	土師器	杯	明褐色	黒褐色	砂粒やや多き やや粗い					文字資料
図版262	29	SB03	5028	1/4	土師器	内黒杯	褐色	黒褐色	砂粒少 きめ細か 量		14	6	5.6	

第59表 セツ栗遺跡 平安時代遺物属性表 (1)

図版番号	図版No	遺構・区分	実測番号	スケール	類別	器種	色調(外)	色調(内)	胎土	焼文	口径cm	底径cm	高さcm	備考
図版263	30	S303	5030	1/4	土師器	碗	橙	橙	砂粒やや多 きめ細かい		14.2	6.6	5.2	
図版263	31	S303	5031	1/4	土師器	碗	橙	橙	砂粒少 きめ細かい		14	7.5	5.4	
図版263	32	S303	5032	1/4	土師器	内黒陶	橙	黒陶	砂粒少 きめ細かい		13.6	6.0	5.6	
図版263	33	S303	5033	1/4	土師器	内黒陶	改良橙	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い			4.8		
図版263	34	S303	5034	1/4	土師器	内黒陶	橙	黒陶	砂粒少 きめ細かい		14.5	7	5	
図版263	35	S303	5035	1/4	土師器	内黒陶	にぶい黄橙	黒陶	砂粒少 きめ細かい		4.8			
図版263	36	S303	5036	1/4	土師器	内黒陶	橙	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い		14.4	7.2	5.6	
図版263	37	S303	5037	1/4	土師器	内黒陶	明黄陶	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い		14.6	6.6	5.8	番号
図版263	38	S303	5038	1/4	土師器	内黒陶	橙	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い	有	8.5			
図版263	39	S303	5039	1/4	土師器	小形壺	橙	にぶい陶	小石含有 砂粒多 量		14	6.6	10.1	
図版263	40	S303	5040	1/2	鉄	釘?								
図版263	41	S303	5041	1/2	鉄	釘								
図版263	42	S304	5042	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒やや多 きめ やや粗い		11.4	5.2		
図版263	43	S304	5043	1/4	土師器	内黒陶	にぶい陶	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い		11.6	3.4		
図版263	44	S304	5044	1/4	土師器	甕	にぶい陶	橙	小石含有 砂粒多 量		7.4			
図版264	45	S305	5045	1/4	土師器	杯	橙	明陶	砂粒少 きめ細かい		13	4.8		
図版264	46	S305	5046	1/4	土師器	内黒陶	明黄陶	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い		11.6	6.6		
図版264	47	S305	5047	1/4	土師器	小形壺	にぶい陶	改良橙	小石含有 砂粒多 量		12.2			
図版264	48	S305	5048	1/4	土師器	杯	にぶい陶	黒陶	砂粒少 きめ細かい					文字資料
図版264	49	S306	5049	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒やや多 きめ やや粗い		11.6	3.8		
図版264	50	S306	5050	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒やや多 きめ やや粗い		11.7	4.6		
図版264	51	S306	5051	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒少 きめ細かい		12.4	6		
図版264	52	S306	5052	1/4	土師器	杯	にぶい赤陶	にぶい赤陶	砂粒やや多 きめ やや粗い		14	5.2		
図版264	53	S306	5053	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒少 きめ細かい		11.7	5.6		
図版264	54	S306	5054	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒やや多 きめ やや粗い		12	5.2		
図版264	55	S306	5055	1/4	土師器	内黒陶	橙	黒陶	砂粒やや多 きめ やや粗い		14.6	7.4		
図版264	56	S306	5056	1/4	土師器	甕	橙	橙	小石含有 砂粒多 量		22.2			
図版264	57	S307	5057	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒やや多 きめ やや粗い		14.5	6.2		
図版264	58	S307	5058	1/4	土師器	甕	明赤陶	にぶい赤陶	小石含有 砂粒多 量		16			
図版264	59	遺構外	5059	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒少 きめ細かい		11.4	5		
図版264	60	遺構外	5060	1/4	土師器	杯	橙	橙	砂粒やや多 きめ やや粗い		12	5.6		
図版264	61	墓F・D2	5061	1/2	鉄	釘								

第59表 七ツ栗遺跡 平安時代遺物属性表 (2)

第5節 その他の遺構

中世の遺構

土坑

SK01

本土坑は遺構配置図のみ記載した。調査区南東側(IIJ14)に位置する。平面形状は小判型、規模は約0.9m×0.7m深さ約10cmの浅い土坑である。検出面はII層上部である。伴出遺物は縄文時代早期繊維混入の押型文が出土しているが、これは混入したものと思われる。また検出面に微量の骨片が検出された。骨片の残りが悪く、形状が明確ではなかった。中世の火葬墓の可能性が考えられたが、この土坑内には炭・焼土が検出されず、骨片の出土量が少量であり、同時期と思われる遺構が他になく、中世の火葬墓の可能性は否定されると現場担当者は所見で記載している。

しかし、信濃町仲町遺跡では骨片を出土する土坑が検出されている。中世の五輪塔の下にある火葬墓の可能性もある(信濃町中村氏ご教示による)。土坑の形態・規模から、土坑墓の可能性は少ないと思われる。深さが、10cmほどしか残存しておらず、傾斜地先端部で、土坑上面が崩れており、炭や焼土なども流れ落ちた可能性があり、中世の火葬墓の可能性が強いと思われる。

第6節 自然化学分析

セツ栗遺跡の放射性炭素年代測定結果

パレオ・ラボ

放射性炭素年代測定は、セツ栗遺跡から採取された3試料について行った。分析用試料は、黒色炭化物と黒褐色土壌を用いた。以下の表1に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は、 ^{14}C の半減期5570年(LIBBYの半減期)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yrs BP)として示している。付記された年代誤差は、 β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。

試料番号	試料番号	コード番号	測定値 (yrs BP)
MNN-6	黒色炭化物 (SK-19土坑4層)	GaK-18817	5,200±100 (3,250B.C.)
MNN-9	黒色炭化物 (SK-17土坑3層)	GaK-18818	5,540±100 (3,590B.C.)
MNN-241	黒褐色土壌 (SK-108土坑底部)	GaK-18819	6,150±100 (4,200B.C.)

第60表 セツ栗遺跡 放射性炭素年代測定結果

第7節 まとめ

- 1 縄文時代は表裏縄文土器、早期押型文土器・条痕文土器等、前期前葉～中葉土器が出土した。
- 2 表裏縄文土器は日向林A遺跡に類似する傾向を示し、隣り合う遺跡として、丘陵の上部にある日向林A遺跡とその麓にあたる七ツ栗遺跡は同一集団の遺跡と思われる。
- 3 条痕文土器の中で、沈線文の土器群と条痕文土器群の間を埋める土器群が出土している。層位的には分離ができないが、貫ノ木遺跡の沈線文系土器群との編年的問題が注目される土器群と思われる。
- 4 前期中葉の土器群が多く出土している。日向林A遺跡同様信濃町内での縄文前期中葉の土器が纏まってきており、今後北信濃の縄文前期中葉の土器群あり方が注目されると思われる。また土坑と前期土器の分布の関係も重要と思われる。
- 5 遺構は集石2基、土坑25基確認された。土坑の中で、調査区の西から東に向かう斜面に、西から斜面に沿ってほぼ直線状に並列する土坑が15基検出された。その間隔が93mにも及び、隣接する土坑をそれぞれ5つのブロックに分類することができた。そのブロックごとの間隔はほぼ等間隔の約12～10mであった。陥穴と思われる第1類土坑は土坑の並び方など民の土掛け方を探る手がかりになるとと思われる。放射性炭素の分析結果、第1類の土坑は縄文時代前期の約5,500年BPという年代が与えられた。
- 6 弥生時代中期前半の一個体土器が出土した。単独出土であった。信濃町での弥生時代中期前半の土器の出土は極めて珍しく、今後の弥生時代の土器研究が注目されると思われる。
- 7 平安時代は住居址5棟検出された。また、調査区北東側においては日向林B遺跡調査範囲内で、平安時代の建物址（ST01）1棟と柵列（SA01）が検出された。このような小規模な平安時代後半期の集落のあり方が、東裏遺跡や針ノ木遺跡、星光山荘B遺跡、貫ノ木遺跡など北国街道と山間小規模集落との関係を考える上で重要な遺跡と思われる。また、鍛冶を生業とする集落のあり方も重要と思われる。
- 8 中世の土坑墓と思われる土坑を1基検出した。

第15章 普光田遺跡

第1節 遺跡の調査と概要

1 遺跡の概要

遺跡の概要普光田遺跡は長野県上水内郡信濃町大字富濃字普光田2,505他に所在する。本遺跡は野尻湖の南東側に位置し、薬師岳北西山麓の外鍾部、およびそれに連続する沖積低地にあたる。現在上信越自動車道薬師岳トンネル北西側出口にあたる。

2 調査の概要

(1) 調査範囲と調査方法 (第45図)

調査区に任意に幅約1mのトレンチ18本と、低地部に外鍾部にそれぞれ15×20mの範囲でトレンチ拡張区を設け、ルーム層まで掘り下げながら、遺構・遺物の確認を行った。

(2) 調査経過

調査期間 平成4年6月24日～平成4年7月2日

(日誌抄)

6月22日 表土剥ぎ

7月2日 試掘終了 遺構遺物検出せず作業終了

6月24日 試掘開始

(3) 調査結果の概要

山麓部ではルーム層から表土にかけて薬師岳から供給された礫片が大量に堆積していることが判明した。また、山麓部の緩傾斜部と低地部のⅡ層は圃場整備などで削平されていることが確認された。トレンチ内攪乱土から諸磯併行期の土器片が2点出土。拡張区表土下からチャートのフレーク1点、縄文早期中葉の土器片が1点出土した。これらの遺物は暗渠の埋設および圃場整備時に入り込んだ可能性が強い。また、完形の石鏃1点と黒曜石のチップ2点表採された。しかし、遺物の包含層は確認されなかった。

よって、周知の範囲の前面調査に至らず調査は終了した。

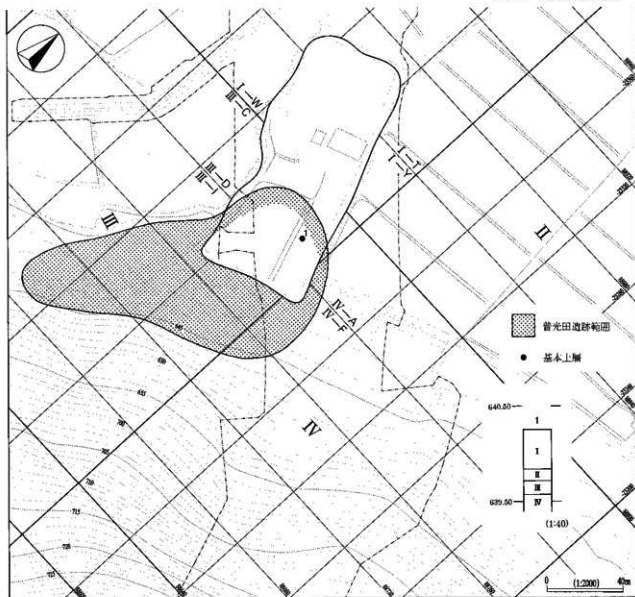
(4) 基本土層 (第4図、第2表)

I層	黒色崩落土	IV層	褐色ルーム層
Ⅱ層	黒色表土層	V層	黄褐色ルーム層
Ⅲ層	黒褐色砂質層	VI層	鈍い黄褐色土層(水成層)

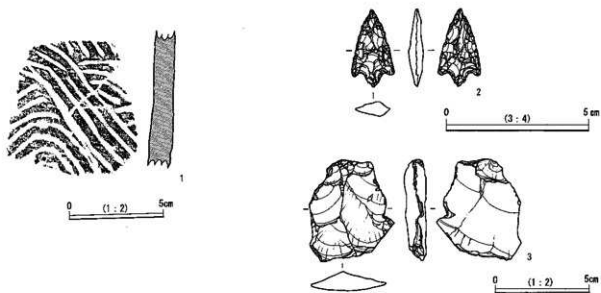
第2節 縄文時代の遺物

(1) 土器 (第45図1、第61表)

1は沈線文系の土器である。4本を1単位とし、先端部を尖らせたやや太い沈線文を押しきり施文している。器厚は10mmと厚く、胎土は細かい砂粒と繊維を含有し、焼成は良好、堅固である。1片であるが



第44図 普光田遺跡 全体図・基本土層図



第45図 普光田遺跡 出土遺物

縄文時代早期沈線文系土器群（相木式相当）の土器として良好な資料である。

標識番号	神田 No	整理 番号	実測 番号	遺構・ 区分	遺物 の種類	器 種	材 質	長さ(m m)	幅 (m m)	厚さ(m m)	重さ (g)	部 位	文様	時期	色調 (外)	色調 (内)	胎土	焼成	織 産	特徴	備考	
第44図	1	1	1	表層	土器								網線	沈線文	縄文早 期中葉	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	繊維少 量含有	良好	有	相木式 併行	表層
第45図	2	2	2	表層	石器	AB	Ch	27	16	6	2											
第46図	3	3	3	表層	石器	F	Ch	54	45	12	27											

第61表 普光田遺跡 縄文時代遺物属性表

(2) 石器 (第45図2・3、第61表)

2はチャート製の凹基有茎鏃で、有茎部が尖っている。長さ27mm、幅16mm、厚さ5mmで、重量は2gである。3はチャート製のフレークで、長さ54mm、幅45mm、厚さ12mm、重量27gである。フレークの縁辺には使用されたのか小剥離痕がみられる。

第3節 ま と め

普光田遺跡は暗渠の埋設や圃場整備によって、遺物の包含層がすべて、破壊されており、客土や、攪乱された土の中からすべての遺物が出土しており、正確な遺跡の時期決定は行えなかった。

第16章 成果と課題

第1節 星光山荘B遺跡について

本報告書の第2章星光山荘B遺跡では、ミズバレ状の隆起線文土器が多量に出土した。これらに伴うして神子柴型石斧（第2章では局部磨製の斧形石器）と有茎尖頭器が出土した。この節ではこれらの土器と石器に類似する長野県内の類似遺跡をあげる。

1 隆起線文土器

星光山荘B遺跡の隆起線文土器は、第2章で4群に分類された。第1群は同じ隆起線文が繰り返すもの、第2群は上段と下段と異なる文様で構成されるもの、第3群は横走する文様の中に縦走（斜走）する文様で変化をつけたもの、第4群はその他単独の文様のものである。これらに類似する隆起線文土器を出土した長野県内の遺跡には、須坂市石小屋遺跡（永峯 1957）・戸隠村荷取洞窟（神田他 1963ほか）・高山村湯合洞窟（関 1971ほか）信濃町狐久保遺跡（小林孚 1983）、口義村二本木遺跡（神村1965）、川上村立石B遺跡（長野県史刊行会 1988）、開田村柳又B遺跡（長野県史刊行会 1988）などがある。

第1群に類似するものは石小屋遺跡のもので、口縁部に2条の小波状の細い隆起線文が走り、その下を数条平行の隆起線文が巡っている。

第3群に類似するものは荷取遺跡のもので、数条微隆起の隆起線文が縦走と横走、あるいは横走と斜走に施文されている。石小屋・荷取遺跡とも数本のヘラを平行に同時に動かした際にできる微隆起を基調とした施文である。この施文方法は星光山荘B遺跡の文様施文と類似する。

長野県外で類似する土器には、山形県日向洞窟（井田 1990）、新潟県壬遺跡（小林他1980ほか）、新潟県小瀬が沢遺跡（小熊他 1993）、神奈川県花見山遺跡・上野遺跡出土例などがある。

第1群土器や第3群土器の類例には、山形県日向洞窟（井田 1990）、小瀬が沢遺跡出土例がある。第2群土器の類例には、上野遺跡第1地点第1文化層の隆起線文土器、花見山遺跡第1群3類a（隆起線文土器微隆起線のみのも）がある。

隆起線文の施文の変遷過程は隆帯状施文から細隆起線文そして微隆起線文とされる。とすれば、星光山荘B遺跡の隆起線文は隆起線文土器の最終末の土器と考える。

2 局部磨製石斧

神子柴型石斧は「大型で横断面が三角形かカマボコ形した石斧である。刃部を研磨したものと研磨しないものがあり、刃部刃縁が直線をなすものと弧状になるものがある（森嶋 1988）」とされる。星光山荘B遺跡の石斧（第2章では斧形石器）（図版53～図版55）は、横断面が三角形かカマボコ形を呈し神子柴型石斧の範疇に含めてよいと思われる。

神子柴遺跡（林 1959）・唐沢B遺跡（第47図1～4）出土例と星光山荘B遺跡の石斧を比較すると、その横断面形は神子柴遺跡・唐沢B遺跡例ほど甲高のものが少ない。または、神子柴遺跡・唐沢B遺跡の石斧ほど大型ではない。

そのほか、長野県内出土の神子柴型石斧を第47図6～12にあげた。第47図のように、これらは厚み3cm以上のものが多い。星光山荘B遺跡例は厚みの3cm以上（138・147）のものが2点しかはなく、甲高のものが少ない。また、長さも15cm以上のものは2点（141・145）しかなく、全般に小型の細身のものが多い。

「古手ものは概してずんぐり形で、新しい段階のものは狭長形であり、小型になることも注意される。道具として機能の終焉を意味している。」(森嶋 1988) という森嶋の編年観によれば、星光山荘B遺跡の石斧は神子柴型石斧の新しい段階の石斧と思われる。

3 有茎尖頭器(有舌尖頭器)と細身柳葉形の槍先形尖頭器

星光山荘B遺跡の有茎尖頭器は、大きさにばらつきがある(図版32)。細身のⅡ類とした有茎尖頭器(図版33-20・21)、細身柳葉形の槍先形尖頭器(図版33-24・26~28)も出土している。

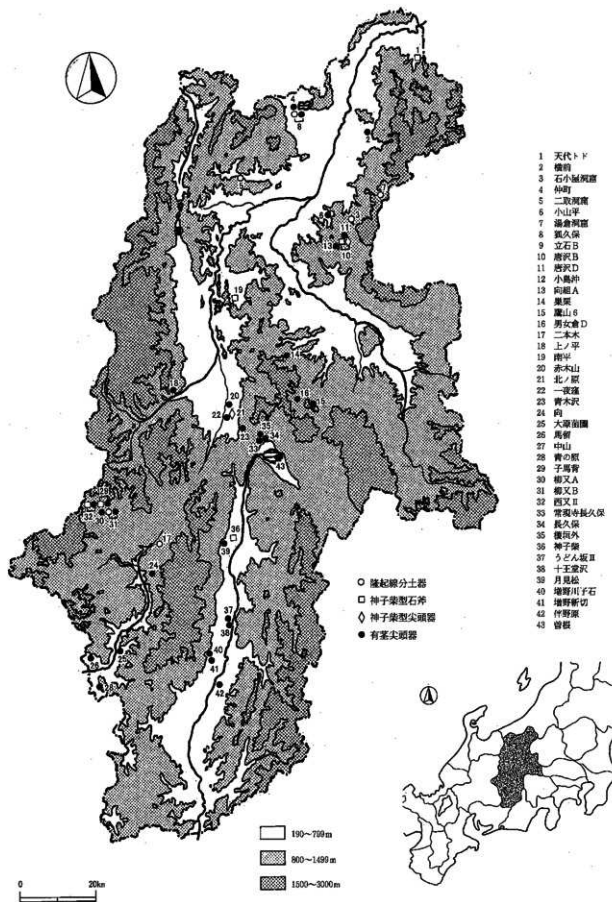
また星光山荘B遺跡の有茎尖頭器は、31点と纏まった点数が出土している。南信地区の開田村柳又遺跡や西又Ⅱ遺跡・小馬背遺跡では纏まった点数が出土している(森嶋 1988)が、北信地域では有茎尖頭器は単独出土例が多い。

星光山荘B遺跡のものは小型で、基部の作り出しが明確なものが多い(図版32・図版33)。基部の返し或未発達な柳又遺跡出土例や、隆起線文土器が出土している西又Ⅱ遺跡例のように基部の作り出しの鋭い有茎尖頭器とは様相が異なる。一方、隆起線文土器の伴う信濃町狐久保遺跡(森嶋 1988)の有茎尖頭器と星光山荘のⅡ類の有茎尖頭器は類似する。また、星光山荘B遺跡の細身柳葉形の有茎尖頭器や槍先形尖頭器(図版33-20~24・26~28)は新潟県小瀬が沢遺跡の有茎尖頭器や槍先形尖頭器(小熊他 1993)に類似する。

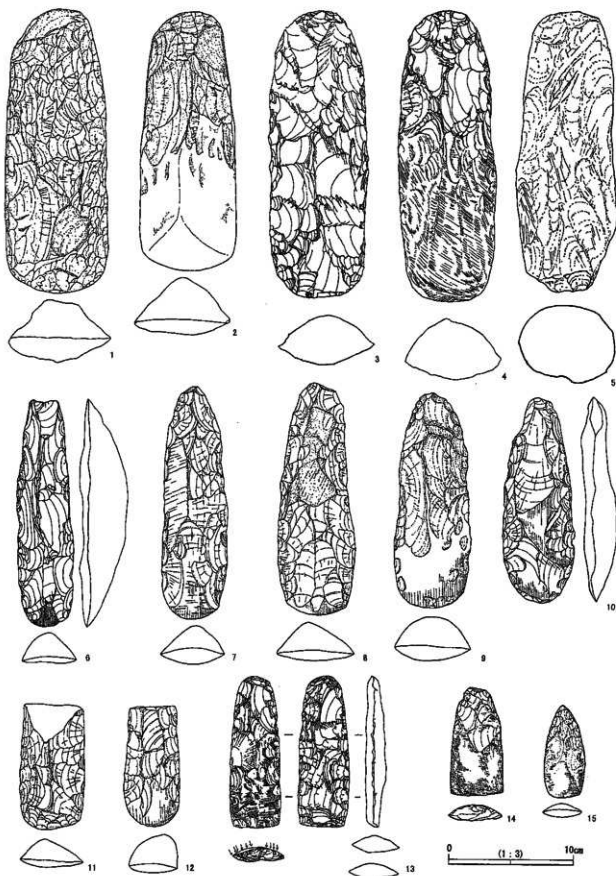
筆者は星光山荘B遺跡の隆起線文土器、局部磨製石斧、有茎尖頭器などの石器群は出土状況から一時期の共存遺物と考える。長野県内では今日まで、隆起線文土器と神子柴型局部磨製石斧と有茎尖頭器の共存した良好な遺跡がなかった。今回の発見は隆起線文土器の終末期のものとする微隆起の隆起線文土器と新しい段階とされる狭長形、小型化の神子柴型石斧、小瀬が沢遺跡のものに類似する細身柳葉形尖頭器や有茎尖頭器と大小さまざまな有茎尖頭器など、一時期のまとまった土器と石器のセット資料として重要な役目を持つものであると思われる。

引用文献

- 井田秀和 1990 「山形県東置賜郡高島町日向洞窟遺跡・西地区」『日本考古学年報』41
- 金子富雄 1933 「長野県上水内郡榑村追通石器時代洞窟住居址」『史前学雑誌』5-5
- 神村透 1983 『二本木遺跡・稲荷沢遺跡』
- 神田五六・金井喜久一郎 1935 a 「上水内郡榑村追通石器時代洞窟の調査報告」『信濃』1-2-6
- 神田五六・金井喜久一郎 1935 b 「榑村追通石器時代洞窟の調査報告補遺」『信濃』1-2-7
- 神田五六・金井喜久一郎 1935 c 「追通洞窟採集のクルミについて」『信濃』1-2-11
- 小熊博史・前山精明 1993 「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『シンポジウムⅠ環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 小林 孚 1983 「狐久保遺跡」『長野県史考古資料編1-2』
- 小林達雄ほか 1980 『壬遺跡』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄ほか 1981 『壬遺跡 1981』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄ほか 1982 『壬遺跡 1982』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄ほか 1983 『壬遺跡 1983』國學院大學文学部考古学研究室
- 関 孝 1971 「古代漂泊生活者の跡をたずねて」『官報たかやま』164
- 関 幸一 1973 「湯倉洞穴遺跡 (第1次)」『日本考古学年報』24
- 関 幸一 1974 a 「湯倉洞穴遺跡 (第2次)」『日本考古学年報』25
- 関 幸一 1974 b 「高瀬沢洞穴遺跡」『日本考古学年報』24



第46図 長野県内縄文時代草創期遺跡分布図



1・2・14・15神子柴遺跡 3～5・13唐沢B遺跡 6小島沖遺跡 7仲町遺跡 8砂間遺跡(信濃町) 9立ヶ鼻遺跡(信濃町)
10猪平遺跡(長野市) 11ゴンゾ山遺跡(豊野町) 12狐久保遺跡

第47図 長野県内出土の神子柴系石斧

貫ノ木遺跡である。約80%を超えるものがこの類であった。次いで日向林A遺跡の約65%、七ツ栗遺跡の約60%が第2種であった。

(2) 口唇部形態

口唇部の先端の形態は丸頭状と角頭状に分類される。しかしその口唇部下では肥厚になるものなどがあり更に細かく分類すると口唇部下には次のような形態があった。

- 第1種 先細り丸頭状
- 第2種 先細り角頭状
- 第3種 非肥厚丸頭状
- 第4種 非肥厚角頭状
- 第5種 肥厚丸頭状
- 第6種 肥厚角頭状
- 第7種 口唇部下段状

各遺跡に共通して口唇部形態は第4種非肥厚角頭状口唇部が多い(七ツ栗遺跡53%、日向林A遺跡49%、貫ノ木遺跡33%、東裏遺跡30%)。貫ノ木遺跡図版77—5のような第1種先細り丸頭状のものは少ない。日向林A遺跡では第7種口唇部下段状が認められる(図版189—98など)。この形態は日向林A遺跡特有である。

貫ノ木遺跡で特徴的な形態は第1種、第2種、第4種である。東裏遺跡では第6種、そして第2種と第4種である。日向林A遺跡と七ツ栗遺跡では第4種が主な形態であった。

(3) 口縁部器厚

口縁部の器厚は次の通りである。

貫ノ木遺跡	3.5mm~8.0mmの範囲。5.5mmのものが多く。
東裏遺跡	3.5mm~8.5mmの範囲。6.5mmのものが多く。
日向林A遺跡	4.5~9.5mmの範囲。6.5mmのものが多く。
七ツ栗遺跡	5.5~8.5mmの範囲。6.5mmのものが多く。

(4) 口縁部形態

口縁部形態には4種類のものが観察される。

- 第1種 直立的なもの
- 第2種 緩く外反するもの
- 第3種 強く外傾
- 第4種 「く」の字状に外反

貫ノ木遺跡では第2種が63%、第3種が14%、第4種が21%。日向林B遺跡では第1種が2%、第2種が75%、第3種が23%。七ツ栗遺跡では第2種が93%、第3種が7%。東裏遺跡では第1種が4%、第2種が63%、第3種が21%、第4種が12%の構成となっている。

第2種が、どの遺跡でも大半を占めている。第1種のは東裏遺跡や日向林A遺跡で認められるが全体の数%未満を占める程度である。第4種は東裏遺跡(図版108—121など)と貫ノ木遺跡(図版78—31など)に、10~20%程度の比率を占めている。

2 表裏縄文土器の文様分類

表裏縄文土器は施文効果と施文方法を重視して分類を行った。

1 施文具、2 施文方向、3 施文効果、4 施文の範囲を4項目に注目し、分類した(各遺跡の表裏縄文土

器の分類番号と一致させた)。

(1) 第1類

縄文が多方向から施文されたもの。異種の縄文が施文されている例はほとんどない。「LR」が多く施文されている。貫ノ木遺跡の図版77-5のものが代表例である。

この土器の接合部は接合しようとする粘土帯を挟むように接合し、その接合面の外面は粗く施文した後に、飛び出した粘土を押さえるために、再び接合部のみに縄文を施文している。縄文の施文が装飾性よりも、整形のための施文であったことを示していると思われる。

(2) 第2類

器表外面および内面、口唇端部に縄文を施文し、最後に器表の口唇端部直下に改めて、縄文を施文することを特徴とする。日向林A遺跡に特徴的な施文法である。口唇端部下の施文は、その下の胴部施文と施文方向が異なり、細い帯状のように明確に分離するものがある。日向林A遺跡の第2類が代表例である。口唇端部の縄文施文によりはみ出した粘土を、押さえるために施文が行われたと思われる(図版188-72~81など)が、帯状の施文が装飾的效果を生み出しているもの(図版189-93、図版190-113など)があり、整形のための施文から装飾化したものと思われる。

(3) 第3類

「縦走縄文」が器表外面に施文されるもの。「RL」の原体で施文されたものが多い。器形は円錐形と砲弾形の二者がある。

円錐形の日向林A遺跡出土例(図版192-139)を観察すると、緩やかに口縁部が外傾し、そのまま底部に至る器形をとる。器表全外面に縦走縄文が施文される。口唇端部に縄文が施文されない。

砲弾形の東裏遺跡出土例(図版112-175)では、口縁端部が指つまんだようにわずかに開き、口縁部が直立し、胴部がやや膨らみながら底部にいたる。口唇端部に縄文が施文され、器表全外面に縦走縄文が施文される。口縁部内面には二段から三段の斜縄文が施文されている。

(4) 第4類

器表外面の縄文施文が横方向に条が走る「横走縄文」をこの類とする。「LR」のものが多用されている。不明確なものもあるが、口唇端部に縄文施文される。口縁部内面には一段ないし二段の斜縄文が施文される。

胴部、底部破片に横走縄文が施文される破片が認められることから、器表全外面に横走縄文が施文されていると理解している。なお、内面には認められないことから、内面の縄文施文は口縁部のみであろう。

(5) 第5類

縄文を縦方向から施文した「縦位施文」により、「斜縄文」が施文されるものをこの類とする。「LR」の単節縄文のものが多く施文されている。口唇端部に縄文が施文されるものと、されないものの二者がある。口縁部内面には二段から三段の斜縄文あるいは横走縄文が施文される。

(6) 第6類

縄文を横方向から施文した「横位施文」により、斜縄文が施文されるものをこの類とする。「LR」の単節縄文が多用されている。口唇端部に縄文が施文されるものと、されないものの二者がある。口縁部内面には二段から三段の斜縄文あるいは横走縄文が施文される。

(7) 第7類

器表外面に特殊な施文をこの類で一括した。

a 外面口縁部下位が無文帯で、その下に縄文が施文され(破片が小さく縄文が施文されているか確認できないものもある)、内面にも縄文が施文されるもの。無文帯は口唇部下位に細いものが設けら

れるものから、やや広いものまでである。

- b 外面縦帯状に施文されたもの。
- c 外面口唇部下に若干の有段部があるもの(口唇部形態第7種)。
- d 絡条体の原体を押圧したもの。

(8) 第8類

表裏撚糸文のものをこの類とした。口唇端部に撚糸文が施文されるものとされないものがある。内面施文は様々で、斜め、横方向のものがある。施文範囲は小破片であり、明確にできない。

内面施文は、東裏遺跡などで胴部下半まで施文されたのが認められるが少ない。大半は口唇部下約1cm～2.5cmである。

第1類は様々な方向に原体が回転されることが特徴である。条が整わないものが多く、器面を滑らかにすることに重きをおいている例が多いようである。特に貫ノ木遺跡の図版77-5のように輪積み接合部を強化するように施文されている例がある。また内外面に指頭圧痕が明確に残る。

これらの特徴はお宮の森遺跡(「松町教委他 1995)の表裏縄文土器に類似する。しかし、内面の施文は口唇部下のみで胴部下半までは達していない。

第2類には第1類のものと類似するものがある。一見、異方向羽状の縄文にみえる。しかし、本類は口縁部と口唇部の施文後に口唇部下位に縄文を施文するという特徴があり、第1類とは異なる。口唇部下位に縄文を施文することに特徴がある。口唇部に二回以上の施文(口唇部と口唇部直下)をすることにある。この施文は、口唇部下位に横方向に斜縄文を施文しており、胴部と施文効果が異なる。これは、撚糸文土器の井草1式の斜縄文帯下に縦線施文をする文様に類似する。口唇部施文にこだわりがあること、帯状の施文にしては狭いが、口唇部下に胴部施文とは異なる施文が行われることなど、井草1式に共通する。

第7c類(口唇部形態第7種)のものは、口唇部下に口縁部の巻き込みなどの有段部に施文したものである。第2類の範疇に入るもので、撚糸文土器群の口唇部文様帯に類似すると思われる。

第3類は縦走する縄文土器である。特徴的な土器は東裏遺跡図版112-175、日向林A遺跡図版192-139である。東裏遺跡のものは砲弾形胴部で、直線的に口縁部にいたる器形のものであり、日向林A遺跡の例は尖底部殻口縁部に向かって緩やかに外傾して口縁部いたる器形である。前者は撚糸文土器の井草大丸式の器形に類似する。後者は夏島式の上器の形態に類似する。前者には口唇部の施文が明確であり、角頭状である。後者は内面側にあたる口唇部下に施文されている。このように、縦走する表裏縄文土器は撚糸文前半期土器群に類似点が多い。

第3類～第5類までは条が整っているものが多く、第1類の施文方向が多方向なものと異なる。

第7a類は口縁部に無文部を持つ。無文帯のものもある。無文部の下は異方向の施文や、粗い施文が見られる。これは撚糸文土器群の手抜き手法による施文の荒廃に類似していると思われる。

第8類の表裏撚糸文土器(口向林A遺跡図版199-262など)は口縁部が強く外反しており、「く」の字状である。口唇部には施文があり多帯(口唇部に2～3回帯状に施文する)化せず、口唇部が角頭状に肥厚する。これらは、撚糸文土器群の大丸遺跡の土器に類似する。

3 表裏縄文土器の段階分類

以上の分類から本遺跡群表裏縄文土器を4段階別に大別することができる。段階別に考察すると次のようになる。

(1) 第1段階

第16章 成果と課題

第42回 調査 番号	発見 遺跡 番号	遺跡名	市町村	所在地	土器										その他	文献				
					東 海 縄 文	縄 文	縄 文	縄 文	縄 文	縄 文	縄 文	縄 文	縄 文	縄 文			縄 文			
1	47	真ノ木	上水内郡信濃	野尻		○														
2	71	東裏	上水内郡信濃	松原	○			○	○						○					
3	72	真ノ木	上水内郡信濃	松原	○															
4	106	日向林A	上水内郡信濃	古御	○			○	○											
5	107	七ツ釜	上水内郡信濃	古御	○			○	○											
6	128	夏ノ柳	上水内郡信濃	石郷・夏ノ柳	○			○	○											
7	147	市道	上水内郡信濃	大井・市道	○			○	○											
8	175	村木	下水内郡安曇	郷・実代村木	○			○	○											
9	176	仙当	下水内郡安曇	郷・月岡仙当	○			○	○											
10	179	天代トF	下水内郡安曇	郷・天代トF	○			○	○											
11	184	鳴沢頭1・B	飯山市	一山・下渡扇状地			押正		○						平行	沈黙	○	○	○	飯山市教1992
12	185	下渡大原	飯山市	一山・下渡大原	○															
13	187	早ノ池南	飯山市	一山・下渡	○	○			○											
14	188	小北沼	飯山市	埴・小北沼	○				○											
15	189	針尾池	飯山市	菅原・長神	○				○											
16	192	北尾湖	飯山市	菅原・小菅	○	○			○											
17	193	十三ヶ丘	飯山市	飯山・飯坂	○				○											
18	200	三枚原	下妻井郡木島	穂波・三枚原	○				○											
19	205	上林中道	下妻井郡山ノ	平橋	○	○			○											
20	206	湯倉洞前	上妻井郡高山	秋・湯沢	○	○			○											
21	207	黒部	上妻井郡高山	高井	○	○			○											
22	209	石小畑洞窟	飯山市	仁礼・仁礼山	○				○											
23	147	天道下	上水内郡信濃	穂波	○				○											
24	210	大地C	長野市	浅川・飯綱大池	○				○											
25	220	藤澤	長野市	松代・西条橋邊	○				○											
26	225	古岳敷山	更埴市	八幡古岳敷芝山	○				○											
27	226	島津	更埴市	島津	○	○			○											
28	229	佐野山	更埴市	島津	○	○			○											
29	230	池尻	更埴市	島津	○	○			○											
30	239	石戸山	小島郡真田町	長・菅平	○				○											
31	344	東鏡B	小島郡真田町	長・菅平	○				○											
32	344	東鏡B	小島郡真田町	長・菅平	○				○											
33	351	唐沢A	小島郡真田町	長・菅平	○				○											
34	261	唐沢岩陰	小島郡真田町	長・菅平上の原	○	○			○											
35	262	峠の岩岩陰	小島郡真田町	長・菅平上の原	○	○			○											
36	267	フロンティア 牧場	小島郡真田町	長・菅平	○				○											
37	271	古岳敷A	小島郡東御所	新穂・古岳敷	○				○											
38	273	大野田	小島郡東御所	和・海津寺	○				○											
39	274	鶴田岳	小島郡東御所	和・海津寺	○				○											
40	277	餅穴	小島郡東御所	高野・片野	○				○											
41	280	焼塚	小島郡東御所		○				○											
42	297	男女倉B	小島郡和田村	男女倉	○				○											
43	298	男女倉C1	小島郡和田村	男女倉	○				○											
44	299	男女倉F	小島郡和田村	男女倉	○				○											
45	300	男女倉G	小島郡和田村	男女倉	○				○											
46	306	倉塚	北佐久郡望月	赤口	○				○											
47	309	岩清水	北佐久郡望月	望月・岩水・唐松	○				○											
48	312	藤田	北佐久郡御代	藤野	○				○											
49	316	上裏	南佐久郡白田	藤塚・上裏	○				○											

第63表 長野県内表裏縄文土器出土遺跡表 (1)

れるようになるが、第3段階になると口唇部施文にこだわりを次第になくし、条を整え内面も若干平滑化しているように思える。第8類の表裏燃糸文土器もこの段階のものと思われる。

これらの段階を燃糸文土器群と比べると第1段階は燃糸文土器群以前の段階、第2段階は燃糸文土器群の初期の段階、第3段階は燃糸文土器群の大丸夏島式段階とみることができよう。

(4) 第4段階

口縁部に無文部があるもの(第7類a)をこの段階としたい。無文部は磨りけしと思われるものもある。内面施文が粗いもの(図版108—123—127など)もある。

また、本遺跡群の表裏縄文土器には各段階に非常に器厚の薄いものと厚いものが存在する。第3段階にも薄手のものは存在する(図版192—143)が、概して第1段階には薄いものが多い。器厚が薄い=小型土器とみることでもできるが、表裏縄文土器群の系統の差と捉えることもできよう。今後の分析に託したい。

分類する段階で、土器片が3cm方形以下のものが多く、このような小さな破片で分類してよいものかかなり迷った。しかし、大きな破片のみであれば、個体や遺跡に偏りが出てしまうと思われ、観察可能な小さな口縁部破片も分類に取り入れた。できる限りの口縁部の拓本も掲載するように心がけた。今回の分類方法が最良であったかどうか若干疑問も残る。しかし、表裏縄文土器研究の何らかさ口になれば幸いである。

最後に長野県内で表裏縄文土器と燃糸文土器が出土している遺跡について表にまとめた。全遺跡を網羅してはいないが、長野県内の遺跡地図と照らし合わせて参照願いたい。

参考・引用文献

- 上松教育委員会他 1995 『お宮の森裏遺跡』
原田昌幸 1991 『燃糸文系土器様式』 考古学ライブラリー61 ニューサイエンス社

第3節 土坑について

今回報告した信濃町周辺の各遺跡からは、数多くの土坑が発見された。各遺跡ごとに分類し報告した。本章では、これら各遺跡の土坑を全体的に観察することで、遺跡を越えてある程度の広さの地域における土坑の様相を観察したい。

1 土坑の分類

平面形、断面形、深さ及び内部施設を分類の基準とした。都合、17類に分類できた。

第1類：平面形態が長方形あるいは長方形に近い楕円形を呈する。大きさはほぼ1.5×1.2m前後。断面形は箱型で、深さは100～150程度。土坑の底に小さな穴(逆茂木痕と考える)が伴う。

星光山荘A、星山山荘B、七ツ栗遺跡では第1類、貫ノ木遺跡では第5類としている。

第2類：平面形態は径約1.5m前後の円形ないし円形に近い楕円形。断面形は箱型で、深さは50未満。内部施設は無い。

星光山荘A、七ツ栗遺跡では第2類とした。

第3類：平面形態は径約85cm前後の円形を呈する。深さ約0.5～1mの浅い箱型の断面形呈する。内部施設は無い。

貫ノ木、西岡A遺跡の第2類、大久保南遺跡のSK03が本類に相当する。

第4類：平面形態が隅丸長方形、土坑底も隅丸方形を呈するもので、断面形態からa、b、二類の細分される。4a類は断面が箱型、4b類は断面がロート状のものである。

4a類例には上ノ原遺跡SK05をあげる。4b類には西岡A遺跡の第3類、上ノ原遺跡SK12がある。

第5類：平面形態が径約1.2mの円形を呈し、深さが150cm以上ある。断面形で4種に細分される。断面U字形のものをa種、V字形をb種、漏斗状をc種、土坑底に逆茂木痕のあるものをd種とする。

第6類：平面形態がほぼ1×0.7m前後の楕円形を呈し、深さが1.5m以上と極端に深いもの。断面の形状からふたつに細分する。断面U字形のものをa種、断面形が漏斗状のものをb種とする。

西岡A遺跡の第5類がこの類に相当する。

第7類：平面形がほぼ1×1.2m前後の円形にちかい楕円形を呈し、深さが1.5m以上ある。第5類とほぼ同様の平面形態をもつが、土坑底面の横幅が極めて狭くなることに特徴がある。

貫ノ木遺跡では第4類、七ツ栗遺跡では第6類に分類した。

第8類：平面形態がほぼ1.2×0.6m前後の長方形を呈する。断面箱形で深さが50cmに満たない浅いものである。

貫ノ木遺跡の第6類としたものがこの類にあたる。

第9類：平面形態は1×0.5m未満の小型長方形、四隅の角が明瞭である、断面形は箱型。深さは約70cm未満、土坑底の四隅も明確な角をもち、土坑底面中央にビットをとまう。

貫ノ木遺跡の第7類としたものである。

第10類：平面形態はほぼ径1.2mの円形で、断面がオーバーハングした袋状土坑。深さが50cm未満のもの。

日向林A遺跡第2類に分類したもの、及び貫ノ木遺跡SK84がこの類である。

第11類：平面形態が不整な楕円形ないし円形であり、断面が階段状を呈するものをこの類とした。

日向林A遺跡第3類、星光山荘第2類をこの類にあてる。

第12類：平面形態が不整形であるが底面の形状が楕円形をとるもの。断面形態は槽鉢状ないし箱型となり、土坑底面に小さなビットをもつもの。

貫ノ木遺跡第8類がこの類である。

第13類：平面形態がほぼ1×1.5m前後の長方形を呈し、断面形態が50cm未満の箱型であるが、土坑底面に凹凸があるもの。

日向林A遺跡の第3類をこの類とする。

第14類：平面形態が長径50cm未満の不整形なものをこの類にあてる。

貫ノ木遺跡第9類、日向林A遺跡第5類、七ツ栗遺跡第3類をこの類とする。

第15類：平面形態がほぼ1×2m前後の長方形で、断面50cm未満の箱型を呈するもの。

針ノ木遺跡のSK01、SK02、日向林A遺跡第4類がこの類に相当する。

第16類：平安時代の土坑で焼土を多量に含む覆土をもつものを一括する。

東裏遺跡SK01～SK08、針ノ木遺跡のSK03、SK04がこの類に相当する。

第17類：上面に集石を伴い、深さ30cm前後の浅鉢状の断面形態をもつものを一括する。星光山荘A遺跡の第3類がこの類に相当する。

2 年代測定について

第1類に分類した七ツ栗遺跡SK17第4層、SK17第3層、SK108土坑底面から出土した炭化材の

年代測定を行った。その結果、先述したように $5,200 \pm 100$ B P ~ $6,150 \pm 100$ B P という値を得た。縄文時代前期に相当する年代である。年代の決め手を欠くこの類の土坑にとっては貴重なデータとなった。

第5類に分類した貫ノ木遺跡SK37とSK38底面土壌から $10,260 \pm 140$ B P ~ $10,150 \pm 120$ B P という放射性炭素測定結果も出た。縄文時代草創期終末から早期初頭にあたる。

3 リン酸分析

貫ノ木遺跡のSK25（第5類）SK36、日向林A遺跡のSK142（第2類）、SK109・SK110（第11類）、SK189（第14類）、SK150（第15類）でリン酸分析を行った。その結果、日向林A遺跡SK109・SK110（第11類）、SK189（第14類）、SK150（第15類）で、人骨に由来すると考えるリン酸の集積を確認した。第11類、第14類、第15類に分類した土坑は墓である可能性が高いことが明らかになった。

4 土坑の大別

17類に細分した土坑は時代や用途差が反映しているものと考えられるが、その形態から大別可能である。

第I a群：土坑底面に小さなピットをもつ1類及び9類。土坑底面に認められる小ピットは逆茂木痕と考えられ、陥穴であろう。

第I b群：その平面の大きさに比較して、土坑の深さが深い3、4、5、6、7類。従来から、陥穴とされる一群である。後述するように配置などから見ても、陥穴と考えられる。

第II群：2、8、14、15類。平面の大きさに比較して、深さが浅い一群。第14類、第15類に分類した土坑はリン酸分析の結果、墓である可能性が高い。

第III群：17類。集石土坑。集石は加熱を受けた礫から構成され、何らかの調理用の施設と考えられる。

第IV群：10類。貯蔵穴とされる土坑である。日向林A遺跡では調理用施設と考えられるIII群SH03に隣接している。また、貫ノ木遺跡でも約4mとやや離れるがIII群SH104があり、周囲に磨石や土器片が散布している。III群の集石土坑と組み合わせられて、機能している可能性がある。

第V群：16類。出土遺物から平安時代以降のものと考えられ、焼土や鉄滓が伴うことから、何らかの工房に関係した遺構であろう。

第VI群：11、12、13類。不整形な一群。調査時の検出の難しさや手違いによるものと考えられる。

5 第I群（陥穴）の配置

星光山荘A遺跡ではI群の土坑（陥穴）が11基発見されているが、二本の線上に配置されている。線状の配置をとる土坑群をそれぞれ第1、2ブロックと呼称する。第1ブロックの全長は24mあり、4~6m間隔で7基の土坑が、等高線を斜めに切る線状に並ぶ。土坑の長軸は土坑群がつくる線に直交するように同じ方向を向く。第2ブロックは全長6m、2m間隔に4基の土坑が線状に並ぶ。両ブロックとも第I a群の土坑である。

星光山荘B遺跡では2ブロックが発見されている。全長30m、間隔14~16mに3基の土坑が並列するものと、全長36m、間隔8mで4基の土坑が並列するものである。緩やかな丘陵の斜面を斜めに横切るように配置される。

七ツ栗遺跡では間隔がランダムではあるが、ほぼ直線的に94mにわたって配置されている。おそらく、3~4基から構成される5ブロックに細分される。丘陵の斜面を垂直に横切り、さらに調査区の外側に延びているのであろう。

貫ノ木遺跡では5ブロックの陥穴の配置が見られる。第1ブロックは全長24m、8基から構成される。

第2ブロックは全長14m、6基から構成される。第3ブロックは全長6m、4基構成される。第4ブロックは全長16m、6基から構成される。第5ブロックは全長14m、7基から構成される。

西岡A遺跡においても二つの線状ブロックが確認されている。

6 第I群土坑の配置からの考察

I群土坑はいわゆる陥穴とされる遺構である。形態の変遷について、佐藤宏之は逆茂木痕のあるもの(第I-a群)から、逆茂木痕のないもの(第I-b群)、長狭化したもの(いわゆるTピット)という変化の過程を想定している。土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果では、第I-a群に大別した第1類の土坑が縄文時代前期であるという結果を得ている。信濃町周辺では逆茂木痕のあるタイプが縄文時代前期の所産であることが明らかになったことは特記すべきであろう。また、貫ノ木遺跡では、第I-b群にあたる第5類土坑の底面土壌から出された放射性炭素年代測定結果では、約10,000年前の縄文時代草創期終末から早期初頭の値が出ていることも注目される。佐藤宏之の変遷観に従えば、1・9類→3・4・5・6類→7類という変遷過程を想定でき、1・9類が縄文前期、3・4・5・6類が縄文中期、7類が縄文中期から後期のものと推測できようか。しかし、今回の調査においては縄文草創期～早期の遺物が多量に出土し、縄文中期以降の遺物は縄文晩期まで出土しておらず、放射性炭素測定値にしたがえば第I-b群から第I-a群となり、土坑の時期については疑問が残る。

今回報告した各遺跡では、いずれも数基以上の陥穴が線状に並び、各遺跡で複数のブロックが検出されている。陥穴が線状に配置される例は隣する飯山市の小泉遺跡などで知られているが、これらは本報告で報告した陥穴より後出的なTピットタイプのものであり、その長さも数十メートル以上と長い。

陥穴類には消極的な待ち伏せ形と積極的な追いこみ形の罌罌が想定される。佐藤は消極的な待ち伏せ形の罌罌から(水場などを中心としたランダムな配置)、対象の動物の習性を利用する積極的な罌罌への変遷を考え、後半期(中期以降)に積極的な罌罌(数基の陥穴が組み合わせられる)への転換を考慮し、縄文社会の変質を指摘している。

報告した各遺跡の陥穴はいずれも数基以上の陥穴が線状に並ぶもので、時期的には佐藤の指摘よりもさかのぼるが、数基以上の陥穴が組み合わせられる積極的な罌罌に使用されたものと考えられる。また、貫ノ木遺跡に代表されるように、一遺跡に複数のブロックが発見される点は注目しておきたい。一定の場が狩猟の場として固定され、回帰的に使用された可能性を示すからである。当該地域が狩猟の場として好条件を備えていると同時に、縄文時代の狩猟が定住集落を拠点とし、集落よりやや離れた猟場を定期的意用するという生活様式が想像される。

また、七ツ栗遺跡の陥穴の配置は、直線状の配置が5ブロックに細分でき、場の回帰的な使用が意図的に行われ、一直線状に94mに陥穴が並んだことを示していないだろうか。こうした偶発的な陥穴の配置が、飯山市小泉遺跡のTピット配置例のような長い配置構造を生み出していく可能性があると思われる。

引用文献

飯山市教育委員会 1995『小泉弥生時代遺跡』

佐藤宏之 1998『陥穴罌の土俗考古学—狩猟技術のシステムと構造—』『縄文時代の生活構造・土俗考古学からのアプローチ』同成社

第17章 結語

平成3年度(平成5年度)から行ってきた信濃町の14遺跡の発掘調査事業が本報告書の縄文時代～近世編と旧石器時代編の3分冊を持って終了する。信濃町内の貫ノ木遺跡と西岡A遺跡のバイパス分は1998年度に『一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書—貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』として刊行された。本書はその報告書とともに再録して、15遺跡の縄文時代以降分を本書に掲載した。信濃町においてこのような野尻湖南・西方の丘陵部に集中する大規模な調査は今まで行われなかった。この地域は、旧石器時代の野尻湖遺跡群の分布域にあり、多くの小規模な発掘調査や、野尻湖調査団による野尻湖周辺の調査によって、旧石器時代の遺構や遺物が調査されてきている。しかし、今回の調査により、旧石器時代以外の重要な遺物と遺構が調査された。とかく、野尻湖周辺の旧石器時代は大きなニュースなどに扱われ、野尻湖に秘める歴史が古い時代だけに注目が集中されていたように思われる。本調査報告書は旧石器時代以外にも重要な意味を持つ歴史の場所であったことを示したと思われる。それぞれの遺跡の総括は各章において触れているが、時期別に調査成果をこの章でまとめ、信濃野尻湖における発掘調査の総括としたい。

縄文時代草創期

本報告書で注目されるのは草創期無文土器の存在である。発掘当初は旧石器時代石器の中に縄文土器が混入していたと思われた。しかし近年旧石器時代後期の石器群の中でも無文の土器の存在が報告されている。整理段階で、東裏遺跡では柳葉型尖頭器の伴って無文土器が出土し、日向林A遺跡では旧石器時代後期のエンドスクレイパー(掻器)に伴って無文土器が出土していたことを確認した。今後同様な出土例の増えることを期待する。

また、星光山荘B遺跡においては、局部磨製の甲高な斧形石器や有茎尖頭器が纏まって出土し、それに伴った多くの隆起線文土器が出土した。斧形石斧は15点出土し、このような多くの数の局部磨製斧形石器が隆起線文の中に伴った例は少なく、遺構をとまなわぬ遺跡での出土は、今後大いに注目されると思われる。

縄文時代草創期終末～早期初葉

表裏縄文土器が貫ノ木遺跡、東裏遺跡、日向林A遺跡、七ツ栗遺跡で多数出土した。特に東裏遺跡や日向林A遺跡の出土量は多量であり、1万点が超える出土量である。表裏縄文土器の中心は静岡県などに多く、その分布の中心は北信地域とは思わなかったが、今回の調査結果、野尻湖の北、上越市大堀遺跡から野尻湖周辺地域にかけても出土量の多い分布域があることが明確となった。表裏縄文土器群は新潟県山間地から中央高地をとり静岡県にいたる広範な地域を拠点として発達したものと思われる。また特に、日向林A遺跡のように住居址のような遺構を持たない大量の表裏縄文の出土は、この時期の生活形態を考える上で重要と思われる。

縄文時代早期前葉～中葉

早期前葉から早期中葉にかけての土器群として押型文土器が野尻湖周辺で確認された。押型文土器は、繊維を含まない土器群と繊維を含有する土器群とに分類される。前者は東裏遺跡に多く分布していた。後者は貫ノ木遺跡、日向林A遺跡、七ツ栗遺跡で出土した。前者は撚糸文土器群後半期に伴うとされ、表裏縄文土器に伴出するとの意見もあるが、本報告書では表裏縄文土器を出土する遺跡の中で、東裏遺跡以外に纏まった出土はない。東裏遺跡でも、押型文土器と表裏縄文土器の分布は若干異なる。時期を異にす

る土器群と思われる。

早期中葉の土器に無文土器と沈線文土器が発見されている。東裏遺跡では無文土器が纏まって出土している。また、貫ノ木遺跡では沈線文土器が纏まって出土している。平板式に類似する無文土器が信濃町で発見されたことは注目されよう。

縄文時代早期後半

東裏遺跡、日向林A遺跡、七ツ栗遺跡で纏まって検出された。東裏遺跡においては絡条体瓦痕土器が纏まって出土し、また早期終末から前期前半にかけての土器群が出土している。七ツ栗遺跡では、条痕文土器群と沈線文土器群を結ぶ土器群が出土している。

縄文時代前期

針ノ木遺跡と普光田遺跡を除き、ほとんど遺跡に縄文前期の土器が出土している。縄文前期初頭から中葉にかけての土器群である。特に日向林A遺跡や、七ツ栗遺跡には前期中葉の土器が纏まって出土している。

縄文時代前期の土坑として、七ツ栗遺跡から平面長方形あるいは楕円形で、断面箱型で、底面に逆茂木痕のある土坑が16基検出された。土坑内の炭化材から年代が約5500年BPとの値が示された。この土坑は斜面に沿って列をなして設けられていた。また、星光山荘A遺跡列をなす土坑第1類、星光山荘B遺跡列をなす土坑第1類、貫ノ木遺跡土坑第5類、西岡A遺跡土坑第1類、上ノ原土坑第4類、七ツ栗遺跡土坑第1類がこの形態の土坑と思われる。これらの土坑は、陥穴一形態として注目されよう。

縄文時代晩期

星光山荘B遺跡から少数土器が出土している。縄文晩期の石鏃も他の遺跡から出土しており、野尻湖周辺にも狩猟に訪れていることが確認された。

その他縄文時代

また、貫ノ木遺跡、西岡A遺跡の斜面上に並ぶ平面形態が円形や楕円形の深さ1.5m以上ある土坑群が、注目されよう。貫ノ木遺跡土坑第3類・第4類、西岡A遺跡土坑第4類～第6類の土坑である。時期は限定されなかったが、断面が筒型・漏斗型であり、陥穴と思われる。七ツ栗遺跡土坑第1類と違い、獲物の対象物の違い、時期的違いなど考察されよう。

弥生時代

七ツ栗遺跡から弥生時代中期前半の土器片が出土した。また、大平B遺跡からは弥生時代後期の土器が出土した。少数であるが、弥生時代の遺物が野尻湖周辺でも出土している。

古墳時代

東裏遺跡から北陸系の土器が単独で出土している。信濃町では、古墳時代遺物は東裏遺跡出土以前には確認されていなかった。近年信濃町の調査で、風久保遺跡から大量の古墳時代の遺物が斜面から大量に出土している（長野県埋蔵文化財センター 2000）。野尻湖での古墳時代の遺物出土状況が注目されている。信濃の国から日本海に通じる経路のひとつが、明確に確認されたと思われる。

平安時代

平安時代は、星光山荘B遺跡で住居址1棟、貫ノ木遺跡で1棟、東裏遺跡で9棟、建物址1棟、土坑8基、針ノ木遺跡で住居址4棟、土坑2基、七ツ栗遺跡で住居址7棟、建物址1棟、槽列1基、土坑墓1基が検出された。

山間地における小規模な集落では、1～3棟づつが、かたまつて点在する集落形態をとっている。中には鍛冶作業の住居址や建物址が存在した。小規模な山間地小集落は、荘園期の開発が、山間地にまで及んだことが考察される。

中世以降

七ツ栗遺跡、貫ノ木遺跡から土坑墓が確認されている。また、上ノ原遺跡などに炭焼き窯跡などが確認されている。

以上、信濃町内14遺跡縄文時代以降の発掘成果の概要である。縄文時代から近世まで、各時代の遺構遺物を提示した。また、自然化学分析により、星光山荘B遺跡隆起線文土器の年代が測定された。隆起線文土器とそれに伴う石器群の解明に貴重な年代的指標となろう。また、土坑の分析において、今まで土坑の年代が、土器などの遺物に頼ったものであり、土坑内の遺物が出土しない土坑の年代は未確定な物であった。今回の七ツ栗遺跡土坑の炭化物層分析結果は土坑分析に貴重な基礎資料になるとと思われる。

* * *

以上のように本報告内の遺跡の調査は、縄文時代草創期初頭から近世まで、各時期各種の有意義な成果を上げることができた。調査終了後すでに4年を経過し、多くの人々のご協力を得て、このような報告書の刊行にたどりつくことができた。本書が、縄文時代草創期から早期にかけての研究や、土坑の研究等研究の一端となれば願うものである。

最後に、これまでさまざまな形でご支援、ご協力いただいた方々に厚く御礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 会田進 1971 「押型文土器の再検討—特に施文法・文様構成を中心として—」『信濃』23-3 信濃史学会
- 会田進 1987 a 「第2節 [課題] 縄文遺跡の発掘と縄文式土器」『縄文押型文土器調査研究報告書』『郷土の文化財』16 長野県岡谷市教育委員会
- 会田進 1987 b 「第3節 押型文土器をめぐる最近の研究」『縄文押型文土器調査研究報告書』『郷土の文化財』16 長野県岡谷市教育委員会
- 会田進 1988 「縄文時代早期遺物集中地点」『反日南』
- 会田進 ほか 1981 「岡谷市長池・横川山地に点在する縄文時代遺跡の調査」『長野県考古学会誌』41
- 青木正洋 1992 「諏訪市の押型文土器出土遺跡」『諏訪市史研究紀要』4
- 県町教育委員会 1975 「下伊那郡県町天伯A遺跡—縄文中期集落・方形周溝墓・古墳」
- 上松中学校考古学クラブ 1975 「上松松の遺跡と遺物」1
- 上松中学校考古学クラブ1978 「上松松の遺跡と遺物」2
- 上松町教育委員会 1993 「最中上遺跡」
- 上松町教育委員会 1994 「金比羅遺跡」
- 上松町教育委員会ほか 1995 「長野県木曽郡上松町 お宮の森裏遺跡」『一般国道19号上松バイパス建設に伴う埋文化財緊急発掘調査報告書—』
- 阿智村教育委員会 1973 「赤坂一區道153号改良工事阿智村小野川地区・昭和47年度緊急発掘調査報告書」
- 安斎正人 1999 「狩猟採集民の象徴的空間—神子集遺跡とその石器群—」『長野県考古学会誌』89
- 飯田市教育委員会 1986 「恒川遺跡群」
- 飯田市教育委員会 1987 「殿原遺跡」
- 飯田市教育委員会 1988 「北田遺跡」
- 飯田市教育委員会 1989 「六反畑遺跡」
- 飯田市教育委員会 1990 「日向畑遺跡2」
- 飯田市教育委員会 1991 a 「恒川遺跡群新屋敷遺跡」
- 飯田市教育委員会 1991 b 「恒川遺跡田中・倉垣外地跡」
- 飯田市教育委員会 1991 c 「直刀原遺跡」
- 飯山市教育委員会 1991 d 「國宮飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告I」
- 飯山市教育委員会 1992 「國宮飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告I」
- 五十嵐幹雄 1954 「長野県小県郡長村菅平東組遺跡調査概報」『信濃』6-7
- 伊藤慎二 ほか1989 「上水内郡信濃町字上の原・大道下採集資料について」『長野県考古学会誌』58
- 伊那市教育委員会 1967 「長野県伊那市三ツ木遺跡発掘調査速報」
- 伊那市教育委員会 1969 「月見松遺跡緊急発掘調査報告書」
- 伊那市教育委員会 1973 「浜弓場遺跡—緊急発掘調査報告」
- 伊那市教育委員会 1975 「小出南（城南）・浜射場遺跡」
- 伊那市教育委員会 1977 a 「浜射場遺跡・萬蒲沢遺跡—緊急発掘調査報告書」
- 伊那市教育委員会 1977 b 「今泉遺跡緊急発掘調査概報」『伊那路』21-1
- 伊那市教育委員会 1977 c 「月見松遺跡第Ⅲ次緊急発掘調査概報」
- 伊那市教育委員会 1978 「児塚遺跡—緊急発掘調査概報」

- 伊那市教育委員会 1979 『尻塚遺跡』
- 伊那市史刊行会 1984 『伊那市史歴史編』
- 伊深智 1970 村小「開田馬背遺跡発掘調査記」『木曾教育会紀要』5
- 伊深智 1971 「西又Ⅱ遺跡調査ノートより」『木曾教育』36
- 伊深智 1974 「西又Ⅱ遺跡調査ノートより(2)」『木曾教育』44
- 今村正次 1977 a 「豊岡村伴野原遺跡発掘調査寸報」『伊那』1977-4
- 今村正次 1977 b 「豊丘村伴野原遺跡発掘調査報告寸報」『伊那路』21-1
- 今村正次 1978 「畑瀬工事に伴う伴野原遺跡立入調査報告」『起源』2
- 上田小県誌刊行会 1955 『上田小県誌第六巻歴史編上(一) 考古』
- 歌代勤他 1980 「野尻湖周辺の人類遺跡と古環境」『地質学論集』19
- 江口友子 1996 「百塚東E遺跡」『笠付遺跡 百塚東E遺跡 百塚西C遺跡 割目B遺跡 新潟県教育委員会 他
- 大岡村教育委員会 1972 『長野県東信濃郡大岡村鍋久保遺跡緊急発掘調査概報』
- 大桑村教育委員会 1988 『大明神遺跡』
- 大沢和夫 1968 「長野県下伊那郡増野新切遺跡」『日本考古学年報』16
- 大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団編 1999 『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査—旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の求』
- 王滝村教育委員会 1982 『崩越』
- 太田保 1958 「駒ヶ根市赤穂区舟山出土の土器について」『伊那考古』9
- 大塚達朗 1994 「1993年の縄文時代学会動向 土器形式編年論 草創期」『縄文時代』5
- 大塚達朗 1991 「基調報告・林謙作「縄紋土器の範囲」へのコメント」『シンポジウム1 環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 大野政雄・佐藤達夫 1967 「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53-2
- 大場磐雄 「上代の洞窟遺跡」『史前学雑誌』6-3
- 大町教育委員会 1990 a 『開田高原大原遺跡』
- 大町市教育委員会 1990 b 『一律』
- 小笠原永隆 1994 「琵琶島遺跡採集の縄文土器」『野尻湖博物館研究報告』2
- 岡本郁英他 1981 「仲町遺跡」『長野県史・考古資料編』1-2
- 岡本東三 1987 「第2節 [課題7] 押型文土器の技法と起源をめぐる」『縄文土器調査研究報告書』「縄土の文化財」16長野県岡谷市教育委員会
- 岡本東三 1989 「立野式土器の出自とその系統をめぐる」『先史考古学研究』2
- 岡本東三 1991 「縄紋文化移行期石器群の諸問題」『シンポジウム1環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 岡本東三 1980 「神宮寺・大川式押型紋どきについて」『藤井祐介追悼記念考古学論集』
- 岡本東三 1999 「神子集文化をめぐる40年の軌跡—移行期をめぐるカオス—」『先史考古学研究』第7号
- 岡谷市教育委員会 1966 『岡谷市今井上ノ原遺跡発掘調査報告』
- 岡谷市教育委員会 1982 「概報縄文遺跡」
- 岡谷市教育委員会 1987 『縄文土器調査研究報告書』
- 岡谷南高等学校歴史部考古班 1970 「上御前遺跡発掘—中間報告第2回・第3回—『縄』1
- 岡谷南高等学校歴史部考古班 1971 「上御前遺跡発掘—中間報告第2回・第3回—『縄』2
- 岡谷南高等学校歴史部考古班 1972 「上御前遺跡発掘—中間報告第2回・第3回—『縄』3

参考文献

- 長村誌刊行会 1967 『長村誌』 真田町長財区
- 小野昭 1991 「シンボジウム1環日本海における土器出現期の様相」『シンボジウム1 環日本海における土器出現の様相』
日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 小原等 1973 「小県郡真田町菅平小島沖遺跡出土の石器」『長野県考古学会誌』 16
- 開田村教育委員会 1986 『開田高原大原遺跡』
- 加賀宣勝 1974 「長野県柳又の石器について」『人類学雑誌』 82-3
- 片岡肇 1972 「神宮寺式土器の再検討」『考古学ジャーナル』 72
- 片岡肇 1978 「神宮寺式系押型文土器の様相」『小林知生退職記念考古学論文集』
- 片岡肇 1979 「押型文土器の起源について」『日本考古学論集』
- 片岡肇 1982 「縄沢式土器の再検討」『信濃』 32-2
- 片山長三 1959 『神宮寺遺跡発掘調査報告書』
- 可見通宏 1969 「押型文土器の変遷過程」『考古学雑誌』 55-2
- 可見通宏 1987 「第2節 [課題6] 関東地方の押型文土器と起源と燃水文土器」『縄沢押型文土器調査研究報告書』
「郷土の文化財」 16 長野県岡谷市教育委員会
- 可見通宏 1989 「押型文系土器様式」『縄文土器大観』 1 草創期 早期 小学館
- 金子富雄 1933 「長野県上水内郡榑村追通石器時代洞窟住居址」『史前学雑誌』 5-6
- 上郷町教育委員会 1981 『姫宮遺跡』
- 神村透 1966 「塩尻市高出遺跡とその周辺」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
- 神村透 1967 a 「押型文土器の問題点」『下伊那考古』 4
- 神村透 1967 b 「稲荷沢遺跡調査略報」『木曾』 5
- 神村透 1968 「立野式土器編年の位置について」『信濃』 20-10、12
- 神村透 1969 「立野式土器編年の位置について」『信濃』 21-3~5、7、9
- 神村透 1979 「駒ヶ根市横山遺跡」『信濃考古』 54
- 神村透 1983 「増野川子石遺跡」『長野県史考古資料編』 1-3
- 神村透 1987 「第2節 [課題4] 中部地方の押型文土器と特徴」『縄沢押型文土器調査研究報告書』「郷土の文化財」 16
長野県岡谷市教育委員会
- 神村透 1983 『二本木遺跡・稲荷沢遺跡』
- 川上元 1967 「異形部分磨製石器の新資料」『信濃』 19-4
- 川上村教育委員会 1984 『川上村遺跡詳細分布調査報告書』
- 神田五六・金井喜久一郎 1935 a 「上水内郡榑村追通石器時代洞窟の調査報告」『信濃』 I-2-6
- 神田五六・金井喜久一郎 1935 b 「榑村追通石器時代洞窟の調査報告補遺」『信濃』 I-2-7
- 神田五六・金井喜久一郎 1935 c 「追通洞窟採集のクルミについて」『信濃』 I-2-11
- 木島平教育委員会 1999 『高山遺跡』
- 木島平村教育委員会 1976 『三枚原遺跡』『三枚原遺跡』
- 木曾考古学研究会 1973 『開田高原小馬背・西又II遺跡出土遺物中心の縄文時代草創期学習会資料』
- 木曾西高校地歴部考史班 1961 「昭和35年度(第1次)柳又調査について」1 『校風』 1
- 木曾福島町教育委員会 1984 『木曾福島町芝原古田遺跡』
- 梶原健 1955 「長野県下水内郡永田村月夜岳遺跡」『若木考古』 37
- 栗島義明 1991 「移行期の諸問題-岡本論文によせて-」『シンボジウム1環日本海における土器出現期の様相』 日本考古学
協会新潟県大会実行委員会

- 栗原文蔵・小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』47-2
- 更埴市教育委員会 1994 『森将軍塚古墳』『森将軍塚古墳』
- 更埴市古代中世専門委員会 1963 「更埴市大田原池尻遺跡の調査」『長野県考古学会連絡誌』8
- 小海町教育委員会 1992 『小原』
- 紅村弘 1973 『岐阜県恵那郡坂下町袴の湖遺跡調査報告書』
- 小藁一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相—南関東地方を中心に—
『研究論集』Ⅱ 東京都埋蔵文化財センター
- 小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の—様相」『信濃』41-4信濃史学会
- 小熊博史・前山清明 1991 「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『シンポジウム 環日本海における器出現期の
様相』日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 小杉康 1987 『縄沢押型文遺跡調査研究報告書』『郷土の文化財』16 長野県岡谷市教育委員会
- 小林達雄 1962 a 「無土器文化から縄文文化確立まで」『上代文化』別冊
- 小林達雄 1962 b 「室谷第一群土器に対する覚書」『歴史教育』16-4
- 小林達雄 1963 「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」『石器時代』6
- 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡岡田村柳又遺跡の有否尖頭器とその類型」『信濃』Ⅲ-19-4
- 小林達雄 1977 「縄文土器の世界」『日本原始美術体系』1
- 小林孚 1964 「押型文土器の出土せる墓ノ神遺跡」『長野県考古学会連絡誌』11
- 小林孚 1968 「長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報」『信濃』Ⅲ-20-4
- 小林孚 1983 「狐久保遺跡」『長野県史考古資料編1-2』
- 駒ヶ根市教育教育委員会 1971 a 『藤助畑・春日一緊急発掘調査報告一』
- 駒ヶ根市教育教育委員会 1971 b 『舟山遺跡緊急発掘調査報告（第1次及び第2次調査）』
- 駒ヶ根市教育教育委員会 1972 『羽場下・舟山一緊急発掘調査報告一』
- 駒ヶ根市教育教育委員会 1974 『養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡緊急発掘調査報告書』
- 駒ヶ根市教育教育委員会 1988 『反目南遺跡』
- 小松虔 1966 「下諏訪町入道遺跡発掘概報」『信州ルーム』9
- 小松虔 1976 「裾原岩陰遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』27
- 小松虔 1978 「裾原岩陰遺跡と押型文土器の出現時期」『中部高地の考古学 長野県考古学会15周年記集』長野県考古学
会
- 近藤尚義 1988 「縄文早期前半の土器」『長野県中央道長野縣埋蔵文化財発掘調査報告書』2
- 埼玉考古学会 1986 「埼玉考古学会30周年記念シンポジウム資料」『埼玉考古』
- 埼玉考古学会 1998 「縄文草創期—爪形文と多線文土器をめぐる諸問題」『埼玉考古』24
- 斎藤幸恵 1987 「第6章 押型文土器文化の石器群とその研究」『縄沢押型文遺跡調査研究報告書』『郷土の文化財』16
長野県岡谷市教育委員会
- 酒井幸則 1969 「増野川子石遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包含地発掘調査報告書』
- 酒井幸則 1978 「判野原遺跡92号住居址調査報告」『始源』2
- 酒井幸則 1983 「増野川子石遺跡」『長野県史考古資料編』1-3
- 坂詰秀一 1971 「長野県野沢温泉村虫生遺跡」『日本考古学年報』19
- 酒詰伸男・岡田茂弘 1958 「大川遺跡」『奈良県文化財調査報告書』2
- 佐久市教育委員会 1981 『五斗代B遺跡』
- 佐久町教育委員会 1987 『後平遺跡』

参考文献

- 笹沢浩 ほか 1966 「長野県上水内郡信濃町窯ノ神遺跡出土の押型文土器」『信濃』18-4
- 佐藤雅一 1993 「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『シンポジウム1 環日本海における土器出現の様相』
日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 塩尻市教育委員会 1984 『竜神遺跡』
- 塩尻市教育委員会 1988 『向陽台遺跡』『一般国道20号改築工事埋蔵文化財包含地発掘調査報告書』
- 塩尻市教育委員会 1988 『一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包含地発掘調査報告書』
- 塩尻市教育委員会 1995 『堂の前・福沢・青木沢』
- 滋賀県教育委員会 1984 『栗津貝塚湖底遺跡』
- 信濃町教育委員会 1994 『丸谷地・大道下遺跡』
- 信濃町水道課 1980 『野尻湖仲町水道工事立会調査報告書』
- 下伊那編纂会 1991 『下伊那史』第1巻
- 下諏訪町教育委員会 1975 『浪人塚下遺跡』
- 下平秀夫 1970 「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査概報」『信濃』22-4
- 下村晴文 1985 「神並遺跡出土の押型文土器」『東大坂市文化財協会紀要』1
- 下村晴文・菅原章太 1987 『神並遺跡Ⅱ』
- 造形藤麻呂 1973 「上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構」『長野県考古学会誌』16
- 縄文セミナーの会 1988 『縄文早期の諸問題』
- 縄文土器研究会 1984 『押型文土器』
- 新谷和孝 1993 「長野県お宮の森裏遺跡の縄文時代の集落」『考古学ジャーナル』362
- 静古生 1935 「棚村洞窟雜記」『信濃』I-2-6
- 菅平研究会 1970 『菅平の古代文化』
- 鈴木道之助 1974 「下野台地における縄文時代初頭の文化」『史館』4
- 鈴木道之 1991 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房
- 鈴木保彦 1969 「縄紋草創期の土器群とその編年」史叢12・13
- 鈴木保彦 1974 「縄文土器出現の様相」『どるめん』15
- 澄田正一・安藤厚三 1956 a 「岐阜県九合洞穴」『日本の洞穴遺跡』
- 澄田正一・大森義一 1956 b 「岐阜県山県郡九合洞窟遺跡調査報告』
- 関孝一 1971 「古代漂泊生活者の跡をたずねて」『官報たかやま』164
- 関孝一 1973 「湯倉洞穴遺跡（第1次）」『日本考古学年報』24
- 関孝一 1974 a 「湯倉洞穴遺跡（第2次）」『日本考古学年報』25
- 関孝一 1974 b 「高蒲沢洞穴遺跡」『日本考古学年報』24
- 関孝一 1983 「湯倉洞窟遺跡」『長野県史・考古資料編1の2』
- 関孝一 1973 「湯倉洞窟遺跡（第1次）」『日本考古学年報』24
- 関孝一 1974 「湯倉洞窟（第2次）」『日本考古学年報』25
- 芹沢長介 1957 「日本における無土器文化の起源と終末についての覚書」『私たちの考古学』4-1
- 高橋桂 1963 「北信月夜岳遺跡調査略報」『信濃』15-3
- 高橋桂 1974 「山の神遺跡」『日本考古学年報』25
- 高橋桂 1977 「三枚原遺跡」『日本考古学年報』28
- 高森町教育委員会 1980 『広庭遺跡』
- 高山村教育委員会 1988 『黒部遺跡』『黒部遺跡』

- 竹内理三 ほか 1982 『日本歴史地図 (原始・古代編上)』 柏書房
- 竹内恒 1968 「御所替戸遺跡の遺物」『信濃考古』 23
- 辰巳四郎・大和久震平・堀静夫 1985 「栃木県大谷寺洞穴の調査」『日本考古学協会40年度研究発表要旨』
- 田中清水 1972 「駒ヶ根市舟山遺跡とその周辺の縄文早期遺跡」『伊那路』 16-6
- 谷口康浩 1993 「小瀬が沢洞窟出土土器の編年的考察」『シンポジウム1環日本海における土器出現期の様相』 日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 谷口康浩 1996 「第一章第二節 室谷洞窟出土土器の再検討」『かみたに』 人文編 『新潟県上川村神谷地域学術総合調査報告書』 上川村
- 茅野市教育委員会 1971 a 『新産岩陰遺跡—発掘と自然遺物—』
- 茅野市教育委員会 1971 b 『棚畑遺跡』
- 茅野市教育委員会 1974 『中ツ原・和田遺跡』
- 茅野市教育委員会 1978 『よせの台遺跡』
- 茅野市教育委員会 1980 『与助根根南遺跡』
- 茅野市教育委員会 1983 『高部遺跡』
- 茅野市教育委員会 1986 『高風呂遺跡』
- 茅野市教育委員会 1990 『棚畑』
- 茅野市教育委員会 1993 a 『滝ノ脇遺跡』
- 茅野市教育委員会 1993 b 『天狗山遺跡』
- 著者不明 1969 「長野県上伊那郡箕輪村神子柴遺跡出土石器」『伊那路』 3-3
- 著者不明 1961 「神子柴遺跡・米園文獻に紹介される」『伊那路』 5-2
- 辻沢遺跡群研究会 1974 「辻沢遺跡群—辻沢川流域における遺跡分布調査報告』
- 帝塚山考古学研究所 1984 『高山寺式土器をめぐる』
- 帝塚山考古学研究所 1988 『縄文早期を考える』
- 東部町教育委員会 1984 『塚穴遺跡ほか』
- 東部町教育委員会 1986 『不動坂遺跡群Ⅱ・古屋敷遺跡群Ⅱ』
- 東部町教育委員会 1990 「大門田遺跡」『海善寺』
- 東部町誌編纂委員会 1990 『東部町誌歴史編』 (上)
- 戸沢充則 1950 「岡谷市下り林遺跡の早期縄文式土器」『信濃』 2-7
- 戸沢充則 1978 「押型文土器編年研究素描」『中部高地の考古学』
- 戸沢充則 1994 『縄文時代事典』
- 戸田哲也 1988 「表裏縄文土器論」『大和のあけぼの』 Ⅱ
- 戸田哲也 1994 「表裏縄文土器研究の現状と課題」『縄文時代』 5
- 戸田哲也 1995 「撚糸文系土器終末期の—様相—片瀬山a・b類を中心として—」『縄文時代』 6
- 友野良一 1976 「向山遺跡の調査」『伊那路』 20-2
- 友野良一 1982 「向山遺跡」『宮田村史』
- 豊丘村教育委員会 1974 『田村原遺跡—縄文早期末～古墳時代の住居址・方形周溝墓群』
- 豊丘村教育委員会 1976 「長野県下伊那郡豊丘村伴野原遺跡パトロール概報』
- 豊丘村教育委員会 1977 「伴野原遺跡発掘調査概報』
- 豊丘村教育委員会 1978 「昭和52年度長野県下伊那路豊丘村伴野原遺跡立入調査概報』
- 豊丘村教育委員会 1979 「伴野原遺跡群』

参考文献

- 豊野町公民館 1979 「みなおそう古代遺跡—大倉・立石・丘遺跡」『とよの館報』 188
- 中島宏 1987 「中部地方における埴間式土器編年の再検討」『埼玉の考古学』
- 中島宏 1990 「立野式土器についての一考察」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』 7
- 中島宏 1991 「表裏縄文土器群の研究」『埼玉考古学論集』
- 長門町誌編纂委員会 1989 『新編長門町誌』
- 長門町教育委員会 1987 『長門町六反田Ⅱ』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史』 考古資料編 遺跡地名表1-1
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史』 考古資料編 (北・東信) 1-2
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史』 考古資料編 (中信) 1-2
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史』 考古資料編 (南信) 1-2
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』 考古資料編 遺構・遺物 1-4
- 長野県岡谷市教育委員会 1982 『概報 樋沢遺跡』 郷土の文化財 16
- 長野県企業局 1968 『桜畑等埋蔵文化財緊急調査報告書』
- 長野県教育委員会 1971 a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田地区』
- 長野県教育委員会 1971 b 『神子柴遺跡出土石槍』『教育長野』 1971-9
- 長野県教育委員会 1972 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田地区 (その2)』
- 長野県教育委員会 1973 a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近地区』
- 長野県教育委員会 1973 b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡飯島町内 (その3) 駒ヶ根市内』
- 長野県教育委員会 1973 c 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡松川町内』
- 長野県教育委員会 1973 d 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町内 (その2)』
- 長野県教育委員会 1973 e 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯田市地内 (その2)』
- 長野県教育委員会 1974 a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市内 (その1、2)』
- 長野県教育委員会 1974 b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那史内 (その2)』
- 長野県教育委員会 1976 a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村 (その4)』
- 長野県教育委員会 1976 b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村 (その1) 富士見町 (その2)』
- 長野県教育委員会 1976 c 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市 (その3)』
- 長野県教育委員会 1979 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村 (その2)』
- 長野県教育委員会 1981 a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市 (その3)』
- 長野県教育委員会 1981 b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市 (その4)』
- 長野県教育委員会 1981 c 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市 (その4) 富士見町 (その3)』
- 長野県教育委員会 1982 a 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村 (その5)』
- 長野県教育委員会 1982 b 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村 (その1)』
- 長野県教育委員会 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 長野県教育委員会 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12』
- 長野県考古学会 1963 「伊那市伊勢並遺跡の調査」『長野県考古学会連絡誌』 7
- 長野県考古学会 1995 「シンポジウム特集号 表裏縄文から立野式へ」『長野県考古学会誌』 77・78
- 長野県考古学会縄文時代早期研究会 1994 「表裏縄文土器から立野式土器へ」 長野県考古学会縄文時代早期研究会資料

- 長野県考古学会縄文時代早期研究会 1994 『内部検討会資料表裏縄文土器から立野式土器へ』
- 長野県埋蔵文化財センター 1987 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査発掘報告書』 1
- 長野県埋蔵文化財センター 1992 『中原遺跡』『県理分センター紀要』 9
- 長野県文化財センター 1994 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』 13
- 中野市教育委員会 1986 『寺の前遺跡』
- 長野市教育委員会 1974 『飯綱大池B遺跡調査概報』『飯綱大池B遺跡調査概報』
- 永峯光一 1957 『長野県上高井郡東村石小屋洞窟発掘報告書』『信濃』Ⅲ・9-5
- 永峯光一 1965 『長野県上高井郡東村仁礼山石小屋洞窟の調査について』『信濃考古』 14
- 永峯光一 1966 『石小屋洞窟発見の微塵起縄文土器』『古代文化』 20・8・9
- 永峯光一 1967 『長野県石小屋洞窟』『日本の洞窟遺跡』
- 永峯光一・鈴木孝志 1957 『長野県埴科郡松代町西条地区入相稲遺跡調査概報』『信濃』 9-4
- 永峯光一・樋口昇一 1967 『長野県唐沢遺跡』『日本の洞窟遺跡』
- 中村敦子 1994 『Ⅱ2歴史的環境』『丸谷地遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会
- 中村孝三郎 1959 『新潟県中魚沼郡津南町清津 縄文早期下別当遺跡』『NKH』VOL.2 N01 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1964 『室谷洞窟』
- 中村孝三郎・小林達雄 1963 『卯ノ木押型文遺跡 貝板遺跡』長岡市立科学博物館
- 中村竜雄 1965 『諏訪明星屋敷・ハタ河原遺跡調査報告』『信濃』 17-4
- 野沢温泉村教育委員会 1985 『岡ノ峰遺跡』
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1995 『大塚遺跡』『一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書』新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 日本道路公団名古屋支社・長野教育委員会 1973 a 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内(その2)』
- 日本道路公団名古屋支社・長野教育委員会 1973 b 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内(その2)』
- 野尻湖人類考古グループ 1980 『野尻湖周辺の人類遺跡』『地質学論集』 19
- 野尻湖人類考古グループ 1990 『第5回野尻湖陸上発掘の考古学効果』『野尻湖発掘の考古学効果』 2
- 野尻湖発掘調査団 1975 『野尻湖の発掘』
- 野村一寿 1990 『木曾の原始時代』木曾西高校自主研究レポート
- 市隆之 1988 『石畑岩陰遺跡』『群馬県史資料編』 1
- 林謙作 1993 『縄紋土器の範囲』『シンポジウム1 環日本海における土器出現期の様相』日本考古学協会新潟県大会実行委員会
- 林茂樹 1957 『駒ヶ根市中沢横山遺跡調査報告書』『伊那路』 1-10
- 林茂樹 1959 『神子柴遺跡発掘調査略報』 1 『上伊那教育』 2
- 林茂樹 1960 『長野県上伊那郡箕輪村神子柴遺跡出土の円盤型石斧について』『信濃』Ⅲ-12-6
- 林茂樹 1961 a 『伊那の石槍』『伊那路』 5-3
- 林茂樹 1961 b 『神子柴遺跡の意味するもの』『上伊那教育』 26
- 林茂樹 1962 『横山遺跡の斜縄文土器と押型文土器』『信濃』 14-3
- 林茂樹 1971 『舟山遺跡における縄文早期集落址について』『日本考古学協会47年大会要旨』
- 林茂樹 1984 『三ツ木遺跡の押型文土器と楕円文土器』『中部高地の考古学Ⅲ』

- 林茂樹 1976 「月見松遺跡緊急発掘調査概報」『信濃考古』 37
- 林茂樹 1983 「神子柴遺跡」『長野県史・考古資料編』 1-2
- 林茂樹・気賀沢進 1979 「駒ヶ根市中沢高見原横山B地点遺跡報告」『長野県考古学会会誌』 34
- 林茂樹・藤沢宗平 1959 a 「長野県上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡発掘調査報告」『伊那路』 3-3
- 林茂樹・藤沢宗平 1959 b 「神子柴遺跡について」『信州ローム』
- 原田昌幸 1991 『燃糸文系土器様式』考古学ライブラリー61 ニューサイエンス社
- 原信之 1965 『鎌倉市大船山居遺跡発掘調査報告書』
- 原寛・紅村弘 1958 「岐阜県稲の湖遺跡略報」『石器時代』 5
- 原村 1985 『原村誌上巻』
- 伴信夫 1970 「尾の島館遺跡発掘調査報告」『下伊那教育博士調査部会研究発表要旨』
- 伴信夫 1974 a 「尾ノ島館遺跡」『長野県考古学会誌』 10
- 伴信夫 1974 b 「長野県下伊那郡南信濃村尾ノ島遺跡発掘調査報告」『長野県考古学会誌』 17
- 伴信夫・小岩井俊忠 1970 「南信濃村尾ノ島館遺跡発掘調査報告」『下伊那教育』 85
- 樋口昇一 ほか 1967 「長野県西筑摩郡柳又調査（第4次）」『日本考古学年報』 15
- 樋口昇一・森嶋稔・小林達雄 1965 「木曾開田高原における縄文以前の文化」『信濃』 17-6
- 樋口昇一・森嶋稔 1959 「木曾開田高原の無土器文化遺跡-柳又遺跡を中心として」『信濃』 III-11-11
- 樋口昇一・森嶋稔 1960 「長野県柳又遺跡第1次調査概要」『日本考古学協会要旨』
- 樋口昇一・森嶋稔 1962 「木曾柳又遺跡(A・B地点)の最終発掘調査」『長野県考古学会連絡紙』 2・1
- 樋口昇一 1961 「木曾柳又遺跡第1次調査について」『信州ローム』 7
- 喜田貞吉 1935 「胡桃の実に穿てる孔に就いて」『信濃』 I-2-11
- 廣瀬昭弘 1977 『三枚原遺跡』
- 廣瀬昭弘 1980 「北信濃小佐原遺跡の現状と課題」『信濃』 33-4号 信濃史学会
- 廣瀬昭弘 1995 「表裏縄文土器研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』 77・79号 長野県考古学会
- 廣瀬昭弘・高橋桂 1977 「第1群土器～第8群土器」『三枚原遺跡』木島平村教育委員会
- 福島邦男・中沢彦彦 1997 「長野県北佐久郡望月町新水B遺跡の遺構と遺物」『シンポジウム押型文と沈線文本編』長野県考古学会縄文時代（早期）部会編
- 藤沢宗平 1959 「神子柴遺跡発掘について」『伊那路』 3-3
- 藤沢宗平 1962 「長野県上伊那郡神子柴遺跡樹（第1次）」『日本考古学年報』 11
- 藤沢宗平 1969 「伊那市月見松遺跡」『信濃考古』 27
- 藤沢宗平・林茂樹 1960 「神子柴遺跡第2次発掘調査概報」『信州ローム』 6
- 藤沢宗平・林茂樹 1961 「神子柴遺跡第1次調査概報」『古代学』 9-3
- 藤沢宗平・林茂樹 1969 「伊那市月見松遺跡の調査」『日本考古学協会44年大会要旨』
- 藤沢宗平・林茂樹 1959 「ローム層内に発見された石斧を伴う文化について」『日本考古学協会要旨』

藤森栄一 1934 「信濃国下水内郡鳴沢頭の土器及石器」『史前学雑誌』 6-6

藤森栄一 1986 『井戸尻』

堀田雄二 1983 「東部町出土の押型文土器」『上小考古』 13

堀内真・宮下健司 1981 「富士山麓における表裏縄文土器」『信濃』 34-10号

町田礼助 1935 「榎の洞窟調査」『信濃』 I-2-6

松沢重生 1957 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』 4

- 松沢修 1993 「栗津遺跡の縄文早期の土器について」『研究紀要』2 三重県埋蔵文化財センター
- 松島透 1955 「長野県下伊那郡立野遺跡」『日本考古学年報』3
- 松島透 1957 「長野県立野遺跡の押捺文土器」
『石器時代』4
- 松田真一 1989 『大川遺跡』山添村教育委員会
- 松本市教育委員会 1984 『松本市前田木下遺跡』
- 松本市教育委員会 1989 『松本市向畑遺跡Ⅱ』
- 松本市教育委員会 1990 『松本市坪ノ内遺跡』
- 松本市教育委員会 1991 『松本市南中島遺跡』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市百瀬遺跡』
- 神村透・山田端徳 1966 「木曾山口村青野原第二次調査及び原遺跡調査報告」『信濃』Ⅲ・18-5
- 神村透 1965 「木曾口義村の考古学的調査 (Ⅰ)」『信濃』Ⅲ・17-11
- 神村透 1970 a 「長野県日義村二本木遺跡」『日本考古学年報』18
- 神村透 1970 a 「長野県山口村青野原遺跡」『日本考古学年報』18
- 丸子町教育委員会 1985 『市の町・塩川条里的遺構遺跡』
- 丸子町教育委員会 1992 『瀬ノ上遺跡』
- 丸子町誌編纂委員会 1992 『丸子町誌歴史資料編』
- 丸山敏一郎 1968 「長野県菅平陣の岩陰遺跡調査概報」『信濃』8-9
- 三重県埋蔵文化財センター 1993 「前半期押型文土器の諸問題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』2
- 御子柴泰正・小池政美 1972 「伊那市手良浜弓場遺跡の分布調査」『伊那路』16-6
- 南信濃村教育委員会 1986 『尾の島館遺跡発掘調査報告書—一条段文土器・中世城館誌』
- 南牧村教育委員会 1993 『南牧村遺跡詳細分布調査報告書』
- 南箕輪村教育委員会 1969 『神子柴遺跡緊急調査報告書—第3次発掘調査』
- 宮井英一 ほか 1982 「神奈川県大和市上草柳第2地点東遺跡出土の土器」『大和市研究』12
- 宮坂英武 1956 「諏訪郡茅野町北山地区大門幹池ノ平遺跡概要」『信濃』89-9
- 宮坂英武 1957 『尖石』
- 宮坂英武・宮坂虎次 1966 『藝科』尖石考古館研究報告叢書第二冊
- 宮崎朝雄 1981 「撚糸文化の石器について」『奈和』19
- 宮崎朝雄・金子直行 1988 「井草式土器及び周辺の土器群について」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究 紀要』5
- 宮崎朝雄・金子直行 1990 a 「撚糸文系土器群と押型文土器群の関係」『縄文時代』1
- 宮崎朝雄・金子直行 1990 b 「若宮遺跡出土時群の再検討」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』9
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 a 「回転文線系土器群の研究—表裏縄文系・撚糸文系・室谷上層系・押型文系土器群関係—」
『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 b 「井草式土器及び周辺の土器群についてⅡ—井草式土器の成立を中心として—」『縄文時代』6
- 宮沢恒之 1965 「長野県下伊那郡豊丘村田村原遺跡の石器」『信濃』17-4
- 宮下健司 1977 「土器の出現と縄文文化の起源」『信濃』32-4号
- 宮下健司 1988 「呪文草創期の土器、縄文早期の土器」『長野県史考古資料編』1-4
- 御代田町教育委員会 1994 『塚田遺跡発掘調査報告書』
- 武石村誌刊行会 1989 『村石村誌』第2編
- 望月町教育委員会 1982 『金塚遺跡』望月町教育委員会 1983 『新久保A遺跡』

参考文献

- 望月町教育委員会 1986 『石清水遺跡』
望月町教育委員会 1990 『上次上遺跡』
望月町教育委員会 1991 a 『平石遺跡—第2次緊急発掘調査報告書』
望月町教育委員会 1991 b 『山ノ神第3号古墳・山ノ神第4号古墳・山ノ神A』
望月町教育委員会 ほか 1981 『新水』
森嶋隆 1969 「木曾開田村柳又A地点の石器」『信濃教育』 881
森嶋隆 1968 a 「長野県更埴市池尻遺跡」『日本考古学年報』 16
森嶋隆 1968 b 「長野県小県郡真田町唐沢B遺跡の調査」『日本考古学協会43年度大会発表要旨』
森嶋隆 1969 「小県郡唐沢B遺跡」『信濃考古』 28
森嶋隆 1988 「生産と生活の道具」『長野県史』考古資料編 1-4
森嶋隆・小林学 1960 「長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡」『日本考古学年報』 18
森嶋隆 ほか 1969 「長野県上水内郡信濃町壱ノ神遺跡」『日本考古学年報』 17
森嶋隆 ほか 1972 「更埴市鍋久保遺跡の押型土器を伴う住居址について」『長野県考古学会誌』 14
森嶋隆 ほか1976 「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』 23・24
八木貞助 1935 「細村先住民遺跡洞窟附近の地質」『信濃』 1-2-6
八木光則 1977 「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』 28-4
矢口忠良 1975 「長野市浅川大池の分布調査報告」『長野県考古学会誌』 21
歴代高校地歴班 1964 「百瀬遺跡」『地歴班研究集報』 8
矢野健一 1993 a 「押型土器の起源と変遷」『考古学雑誌』 78-4
矢野健一 1993 b 「押型土器の起源と変遷—いわゆるネガティブな楕円文を有する押型土器群の再検討—」『考古学雑誌』 78-4
山形真理子 1991 a 『三の原遺跡』
山形真理子 1991 b 「多織文土器編年に関する一考察」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』
山田猛 1983 「押型土器群の型式学的再検討」『三重県史研究』 4
山田端穂 1966 「青野原遺跡の発掘」『清音』 54
大和久震平・埴静夫 1965 『新潟県の考古学』
山内清男 1960 「縄文土器文化のはじまる頃」『上代文化』 30
山内清男 1968 a 「矢柄磨器について」『日本民族と南方文化』
山内清男 1968 b 「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』 224
山内清男・佐藤達夫 1962 「縄文土器の古さ」『科学読売』 14-12
山ノ内町教育委員会 1985 『上林中道遺跡』
八幡一郎 1922 「信濃国諏訪郡金沢村壱穴」『人類学雑誌』 37-9
八幡一郎 1972 『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上）』
八幡一郎・上野圭也 1962 「長野県菅平東組の早期縄文式文化遺跡について」『考古学雑誌』 48-2
八幡一郎・宮坂英式 1967 「長野県磨産岩陰」『日本の洞穴遺跡』
吉田富夫 1938 「下伊那に土器を観る」『信濃教育』 624
吉松健一・小林学 1975 「野尻湖畔町裏遺跡の石器について」『長野県考古学会誌』 22
米山一政 1964 「長野県更埴市桑原池尻遺跡報告」『上代文化』 34
両角守一 1932 「信州諏訪郡長地村榎戸遺跡」『考古学雑誌』 22-1
和田壽久 1995 a 「大堀遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成5年度新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 和田壽久 1995 b 「大塚遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成6年度新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 和田壽久 1995 c 「大塚遺跡」『逕文にいがた』No.12 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 和田壽久 1996 「大塚遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成7年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 綿田弘実 1996 「中央高地における縄文早期末葉絡条体圧痕文土器」『長野県立歴史館 研究紀要』第2号 長野県立歴史館
- 渡辺重義 1975 「軽井沢町弁財遺跡の押型文土器」『長野県考古学会』21
- 和田村教育委員会 1975 『男女倉』

報告書抄録

書名	上段越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 16
副書名	星光山B・星光山B西・西岡A・貝ノ木・上ノ原・大久保南・東原・黒山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七ツ葉・菅光田
巻次	調査町内その2
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	49
編集者名	土屋 中島英子
編集機関	(株)長野県文化振興財団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒387-0007 長野県更田市近代字跡水260-5 TEL:026-274-3991
発行年月日	2006年3月31日

所在地	所在地	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査内容
星光山B入道跡	長野県上水内郡信濃町下山2611-6地	205834	45	36° 50' 03"	138° 11' 22"	1995年5月16日～1995年7月31日	4,000	調査内容
星光山B入道跡	長野県上水内郡信濃町下山2611-6地	205834	172	36° 48' 52"	138° 11' 23"	1995年7月27日～1995年9月14日	1,400	調査内容
大平B入道跡	長野県上水内郡信濃町大平南長字ノ木3461地	205834	47	36° 49' 09"	138° 11' 47"	1993年6月21日～1995年11月19日 1994年4月21日～1994年12月9日 1995年4月3日～1995年11月30日	49,300	調査内容
西岡A入道跡	長野県上水内郡信濃町大平南長字第九郎清田1821-1地	205834	62	36° 49' 10"	138° 11' 41"	1994年4月21日～1994年10月31日 1995年4月5日～1994年10月20日	19,800	調査内容
上ノ原入道跡	長野県上水内郡信濃町大平南長字上ノ原204地	205834	65	36° 48' 50"	138° 12' 08"	1995年10月24日～1995年12月9日 1996年1月17日～1995年11月28日	7,500	調査内容
大久保南入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字上ノ原204地	205834	61	36° 48' 41"	138° 12' 16"	1995年4月18日～1995年11月28日	3,500	調査内容
東原入道跡	長野県上水内郡信濃町大字厚字東原405地、上ノ原361-202地	205834	70	36° 48' 28"	138° 12' 33"	1992年4月19日～1995年12月10日 1994年11月14日～1994年12月13日 1995年7月18日～1995年10月13日	44,000	上段越自動車道埋蔵文化財調査
黒山入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字上ノ原204地	205834	71	36° 48' 15"	138° 12' 56"	1994年4月18日～1994年11月11日	8,500	調査内容
針ノ木入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字ノ木4055地	205834	98	36° 48' 15"	138° 13' 16"	1994年10月3日～1994年6月17日	4,000	調査内容
大平B入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字ノ木4055地	205834	97	36° 48' 15"	138° 13' 46"	1994年4月18日～1994年6月17日	4,000	調査内容
日向林A入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字日向林2232地	205834	104	36° 48' 10"	138° 14' 00"	1994年6月20日～1994年12月09日	12,000	調査内容
日向林B入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字日向林2232地	205834	105	36° 48' 07"	138° 14' 05"	1993年4月19日～1993年10月29日 1995年4月5日～1995年6月14日	5,500	調査内容
七ツ葉入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字七ツ葉2651-3地	205834	106	36° 48' 05"	138° 14' 07"	1993年6月19日～1993年6月18日 1994年10月3日～1994年10月31日 1995年10月15日～1995年8月4日 1995年10月20日～1995年10月31日	5,300	調査内容
菅光田入道跡	長野県上水内郡信濃町大字高橋字菅光田2659地	205834	107	36° 47' 59"	138° 14' 16"	1992年6月24日～1993年7月2日	1,000	調査内容

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
星光山B入道跡	その他(野営地)	縄文	土坑 遺物集積所 竈石	土器 石器	縄文早期-前期十層
星光山B入道跡	その他(野営地)	縄文平安	土坑 遺物集積所 竈石	土器 石器	地誌(興隆誌)縄文土器約1300点と有茎土器類35点と種子・骨器石斧18点の同一時期での多量な良好資料 晩期十層
貝ノ木入道跡	その他(野営地)	縄文平安 近世	土坑 遺物集積所 住居址 土塚 竈	土器 石器 土師器 鉄製品	表裏縄文土器・貝殻類土器の良好な資料 前面に並列する陥穴の土坑群
西岡A入道跡	その他(野営地)	縄文	土坑 遺物集積所 竈石	土器 石器	縄文早期十層 前面に並列する陥穴の土坑群
上ノ原入道跡	その他(野営地)	縄文	土坑	土器	縄文前期十層 陥穴
大久保南入道跡	その他(野営地)	縄文近世	遺物集積所 土坑 灰層 竈	土器	縄文前期十層 陥穴
東原入道跡	その他(野営地) 高野	縄文古墳 平安	土坑 遺物集積所 住居址 土坑	土器 石器 土師器 鉄製品	特殊形状土器類に伴う前期前期土器 表裏縄文土器と表裏押型土器と押型土器・埴土土器の良好な資料 古墳時代初期の土師器土器 平安時代以降の土師器土器
黒山入道跡	その他(野営地)	縄文	遺物集積所	土器 石器	表裏縄文土器と前期初期土器
針ノ木入道跡	原野地 高野	縄文平安	土坑 住居址	石器 土師器 鉄製品	平安時代以降の土師器
大平B入道跡	その他(野営地)	縄文	土坑 遺物集積所	土器 石器	縄文早期-前期十層 表裏前期十層
日向林A入道跡	その他(野営地)	縄文	土坑 遺物集積所 竈石	土器 石器	住居址を持たない表裏縄文土器の出土量が大気に向上 早期表裏土器と前期中期の土器
日向林B入道跡	その他(野営地)	縄文	遺物集積所	土器 石器	埋蔵層部に伴う前期前期土器
七ツ葉入道跡	その他(野営地) 高野	縄文 弥生 平安 中世	土坑 遺物集積所 住居址 土坑	土器 石器 土師器 鉄製品	表裏縄文土器と前期中期土器 縄文前期の良好な並列する陥穴群 弥生時代中期前期の土師器の土器群 平安時代以降の土師器土器
菅光田入道跡	散布地	縄文	なし	土器 石器	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 49

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 16

—信濃町内 その2—

星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・
裏ノ山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・七ツ栗・普光田遺跡
縄文時代～近世 本文編

発行 平成12年3月31日発行

発行者 日本道路公団

長野県教育委員会

(財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒387-0007 長野県更埴市屋代字清水260-6

TEL 026-274-3891 FAX 026-274-3892

印刷 明和印刷株式会社

〒380-0943 長野県長野市安茂里2161-2

TEL 026-226-5311 FAX 026-228-0799

